

127  
+4

一  
不  
諸  
國  
物  
語  
全



平田止水居士輯  
源 基定補正

# 一休諸國物語回繪

大阪書肆

競争屋出版





20640  
 それ一休和尚は後小松院の二の宮までましませり世の人の耳よ  
 残れる御歌も後の小松の二葉と詠し玉ふも有けるとかや誠よ  
 いとも賢くましく  
 宗をたゞ一目まにらみ  
 のあとの棒ちさり木と見立て御身は麻かたはと共思召めさす深  
 世をひやうたんによりか  
 玉ひ御心は誠や竹を二つにわりたる如く路人の口碑よあれば舌  
 の先の障とし侍るも仰  
 の頃より才智方入はま  
 諸國物語圖會といあしよけるとかや  
 の咄しのふるさゆとも  
 の多きを見るにつけ聞  
 つけ拾ひ集めて

止 水 敬 白

山居竊僧

聽松風

須臨濟

德山禪

一箇位山

三十二年

公案工友  
了畢後

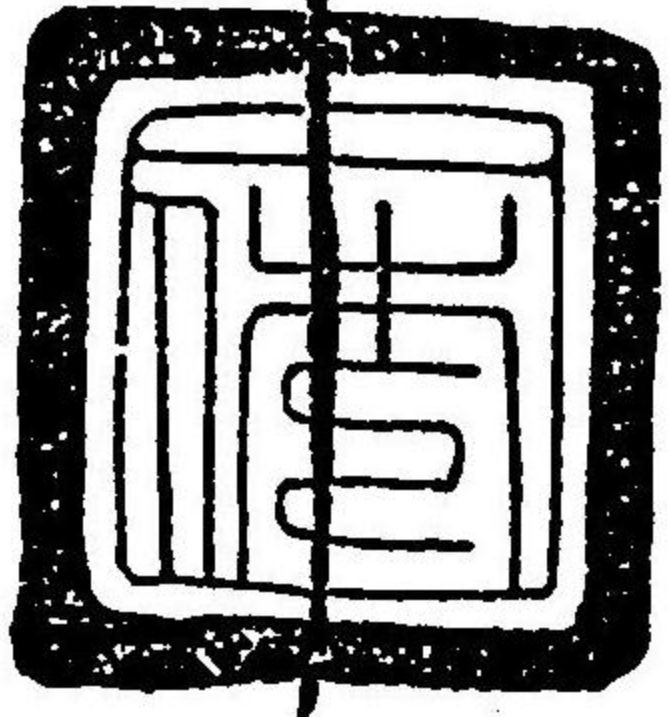
長松月殿  
四能參眠

唐學士也

龍寶門答

# 東海純一休老

書る詩一筆



## 二休諸國物語圖繪卷之二

12  
43

●和尙若年よみはせしより才智業も勝れよく人を導く玉ふ或人問ていはく何よ小僧それ地獄極  
 樂と事ありげよいしかしなから死後あらでは證據なきよし承はるるもありぬべし活人あり  
 て惡事をなせば死て三途の大河死出の山を登り難所を越てやうく地獄に入と事ありさて  
 又極樂淨土と事には是より十萬億土と事せば遙の道を經て参るとなれば我等がやうある不達者  
 ものと極樂の事はさておき地獄へも行がたかるべし此儘いかむ一休こたへて夫地獄遊とよ  
 むらば眼前の境界惡鬼外よし淨土といつは愛をさる事遠からずとのたまへばこの者ややう  
 いやく左様に目の前に地獄をくらくありとのたまふとも願はれて見へねば合点もかす小法  
 師の分として委くしめし玉ふ事成まじとあざ笑ふてぞやける一休腹をたて扱は其方は我を  
 若年ものどもあざり玉ふかどて願て一休繩をもちて後ろへまはりかの者の首ふ引かけ思ふさ  
 まよしめ付なんぢ懸はいかよと事さる。とき此の合点して尤これ地獄あり其ときまた繩を  
 とさ玉ひて汝かくあるときさというんと事玉へば淨土ありとこたへ其ま。合点してさてもく  
 小法師は何のあさまへも有まじさやうよおもひあざりしに幼稚なれどもかくのこどく智慧  
 める事わたくしならぬ事なりとぞかんとける

○一休十一歳のとき的事なりしが師の房他行したまむける留主の處へ余所より餅一ツきたりけ

れば一休すこし割て師匠のかへり玉ふよ取出して奉る師もたうけ人よて満月無片破明は何地  
よかあるとのたさへば一休そのころより智慧さかしくましませば直ちよ返答よ雲隠有是とて  
かの眼を出されける此心は満月之丸くみちてかけたる處なし此餅も満月の如くまん丸くてあ  
るべきよかけたるといかよと問ひたまへば雲隠隠れてこよ有とこたへたる也師うち笑玉ひ  
てさても小賢さ小僧かあとして餅をみあたび玉ひけるとなり

○一休御諱を宗純とやせしが別號を一休と名付たまひける或人きたりて一休と名付玉ふ御心と  
いかなる御心得よて侍るやと尋ねければよくこそたづねめされけるさりながら一休にふかさ  
心むあらざればかたりて聞すべきやうもなしとてかく  
有漏路より無漏路へかへる一休

あめふらばふれ風ふかばふけ

と遊しければ彼ものさよて扱もおもしるさふある御歌や有漏無漏といかかなる事よておはま  
けるぞと尋ねればそはある御掛子をどつて彼者の顔をあてたまへばいや何事をうなさるよと  
あまろさたるばかりよて何とも心得ずとす一休が曰その何とも心得ぬところが無漏路なりは  
つとおまろさし處が有漏路ありと仰られければ彼俗肝を冷まして有がたや即時大事をさづか  
らけるよよろこびて扱御歌の一やすみとは心得ずい雨ふらばふれ風吹ばふけとは何なる御心  
よて侍りけるぞさればよわづかの道のことあれば雨も風もいとふ事侍らまを仰られければ扱

も有がたき御歌かなおそれながら只今まづかりやせし心を一首やてみんとやければ夫はまよ  
くある心さしやそのたまへばうのものよめんと  
うろじひろじ一休ぞとさくときは

十万億土すんささとしる

と任すければ一休さこまめし善哉くよて尻餅ついてよろこび玉ひてかゝる例しむるこしに  
も侍りし事ぞ四休居士といふ人ありけるよ山谷といふ人その四休の心を問ければ四休わらひ  
て替ていわく

鹿茶 飯飽 即休  
三平 二満 過即休  
不食 不妬 老即休

とやされければ山谷がいはいく是安樂の法なりそれよく少とさり不伐の家なり足る事をしる  
は極樂の國ありと感じてしたしく語りて四休の心を問三首よつくりうたひ樂しみしとかや其  
一首に

富貴 何時 潤 獨 一  
大醫 診 得 人 間 病 一  
守 錢 奴 與 抱 官 一  
安 樂 延 年 万 事 休

と有りしよよく似たり一休の心をとひて今其方の歌よむ事よと感じたまへば彼人やすやう一  
休の二字をたづねて四休の四字をしる事求めきて得と幸と註したりこれ幸なりとよろこ



びけるが四休のうち三平二満とはいかなる事やらんとすければ其方の内方よとのたまへば合点まいらせ見にくきといふ所のといへばいやさよあらせおとせのとなりとのたまふば切もめづらしきとうな誠は三平は両の類と鼻二満は類と頭よさてもおもしろき事也さうながら女どもに聞かせあべ一休さまをつめりすべしとわらひて飯りける

○和尚幼稚きときより常の人よはうこりたまひて利根發明ありけるとかや師の坊をば養叟和尚とすけるこびたる旦那ありて常ふきたりて師の坊は養叟をとし侍りては一休の發明なるを感し折々はたはひれを言て問答をとしけり或ときかの旦那皮袴を着て来りけるを一休門外よりちらと見て内へはしり入へぎよ書付立られける

一此寺の内へかはのたぐむうたくさんせいあり若皮の物入るときは其身よかあらすばちちたるべし

と書付て置たりかの旦那をを見て皮のたぐひにはちあたるあらば此寺の太鼓の何とし玉ふぞとすける一休聞たまひさればとよ夜更三度づばちあたる間其方へも太鼓のばちをあてすまじ皮のはかまをさらされるはとにいとせられけるその、ちかの旦那養叟和尚を寄によふとて一休も御供よとすしかの返報せばやとたくみけるが入口の門のまへに橋ある家ありければ橋のつめよ高札をかなよて太く書てたてける

此はしわたるとかたぐさんせいなり

と書付ける養叟和尚のじふんよしとて一休をゆしてかの入の方へ御出あるは橋の札を御覽とて此はしわたらでは内へ入べき道なし一休のいにと有ければいや此はしわたるとどうあよて仕たれをまん中を御渡あれとて真中を通り内に入たまへばかの者出合て禁制の札を見あがらいかで橋をわたり玉ふぞと、がめければいや我は橋はわたらず真中をわたりけるぞと仰られければ亭主も口をどぢけるが何がな不審すさむとて又いわく凡沙門の形といつは忍辱二躰は衣を着罪障さんげの袈裟をかけてこそ僧とすべけれいかふ小僧ありとて俗衣の出たら心得がたくいとすせば一休幼けれども歌一首をよみて答へらる

若てきたぞ本來空のくる衣

そであが、らで人こそしらね

とよみ玉へば旦那も養叟も手をうち口をあひて塞ぎかねられけるとなり扱御齋を出しけるが今一度不審せべやとおもひ一休ははわざと魚類の膳をすへけるめづらしくやおぼしけむひたもの喰ひ玉ふときよ旦那のいへる人しれぬ衣めしたる御僧のした、か魚をまゐることよとたわひれければ一休聞たまひて口を録倉梅道なれば貴さも行きさいやしさもすぐとのたまへりちらへうねか、る物もどほり候哉と刀をすかりとぬきけるを一休すこしもさわかみ味か味方うと問ふ敵也といふしからば通す事あらすいや味かたありといへば其ま、けへんくとのたまひてくせものおとほるとて只今俄に關かすなりたるいといふ玉へば旦那も和尚も此小僧の

口よはかたれまじとて言葉なく舌の根をふるひてやみぬ

○十七歳の御とき引導し玉ふ或とき下加茂邊を通りたまふ折ふし途中に死人あり一休たらしより引導をさづけ玉ふとさに或人見て恐かなり小僧死人よひかつて何事をいふたりとも耳に入へきやいかるといふ一休答へていはく西無耳雷之音聞即自出此文のことろは夫がせうといふものは耳もなく目もなければ芽を出さんとおもふときハ雷の音を聞て則芽をいだすとあり斯のごとくの非情神木のたぐひまで困縁加合のことわりありいはんや人間よわめてをや彼是もつて同事あると返答したまへばこのもの實もとおもひけん一言の答へるも及ばず立さうりけり

可笑記曰蓮广大師のあしの葉に乗り佛の道をかたる紫野の一休和尚と世の法議をそしらせ興がるおどけをあして釋迦をしかり玉ふも助んごめの本心こゝに蜷川新左衛門親當といふ武士弓馬の道くらからず殊に佛道は祖師禪宗をまなびて座禪の床ま入おしへの道をしりかねて一休と問答をしけれども終いひ得せ秋の夜長さつれくよ友をかたらひ酒興し憤大唐には五月五日 端を酒よ入て飲めば老せずといひて貧飢する由さもあらむ先身の年より若く見ゆると此水の徳ありといふよ同じ水鳥一座の中に三十ばかりよたらぬ男白髪まじりよ生しといかよと問へば口かしくさ男酒を飲ねば腰がふたべよなる等なれとのたまへばこそ酒のみふれとへら老口のまなき釜中塔へ紫野一休のん内じさうりて是はよき所へとわ

さへぬ釜ニツつてははしさらば慮外とまたむどころを蜷川よき不審と一掃七十粒そもさんか拾る事いかん一休たへて法界よ手向く蜷川また法界がのひべしや一休また法界が飲まじさといふか答へしにつまりそれはしらぞと閉口して大笑にあり肴よとかけたれども淨るり小職もふるめかし今の問答のふうしさに任せ善惡五戒の講釋せよとのぞみこれうはつた精進さか音曲と無理よ引たて上座にあをし高座は火煙のやぐらを取出し行燈つり上かうべをかたひけりじまるを待よ一休くわんくとしてとてお興がる 思あがらばさつは三十三身を現じて其機よしたるひためよ法を解せたまふ普賢菩薩は江口の遊女と變じて凡夫ふちぎやをこめ十羅刹女は太鼓女郎とありて 貴聖人よまみえたまふ愚僧とその菩薩よはあらざれどもしはしそのながれの末を汲て川柳花は紅の色衣はあしすみの衣の袖をうきよせまづ鼻をうみせさばらひニツニツ四弘誓願の文を唱ていぎをたしし白紙巻て取あへすさいげ奉る親誦と名付讀上る

夫つらくおもんれば分段同居の風俗と陰陽をもつてし有爲の掟は夫婦をもつて義理とす鳥よ比翼のかたらひあり木に遊狸のちぎり有いこんや人倫よわめてをやひそかにおもへハ容色たをやかよして梨花の露をなむがとく心中あらとよして行水の物よ隨ふがとく天生の美麗世にたぐひなき西施が容貌貴妃が顔色一トたび笑は百の細あざやかに見ゆるの思ひを動かし聞人心をくださぬらむ春の朝あはうめさくらの下陰また、すみて三味線

大徳寺境内  
 野茶風色

肥後

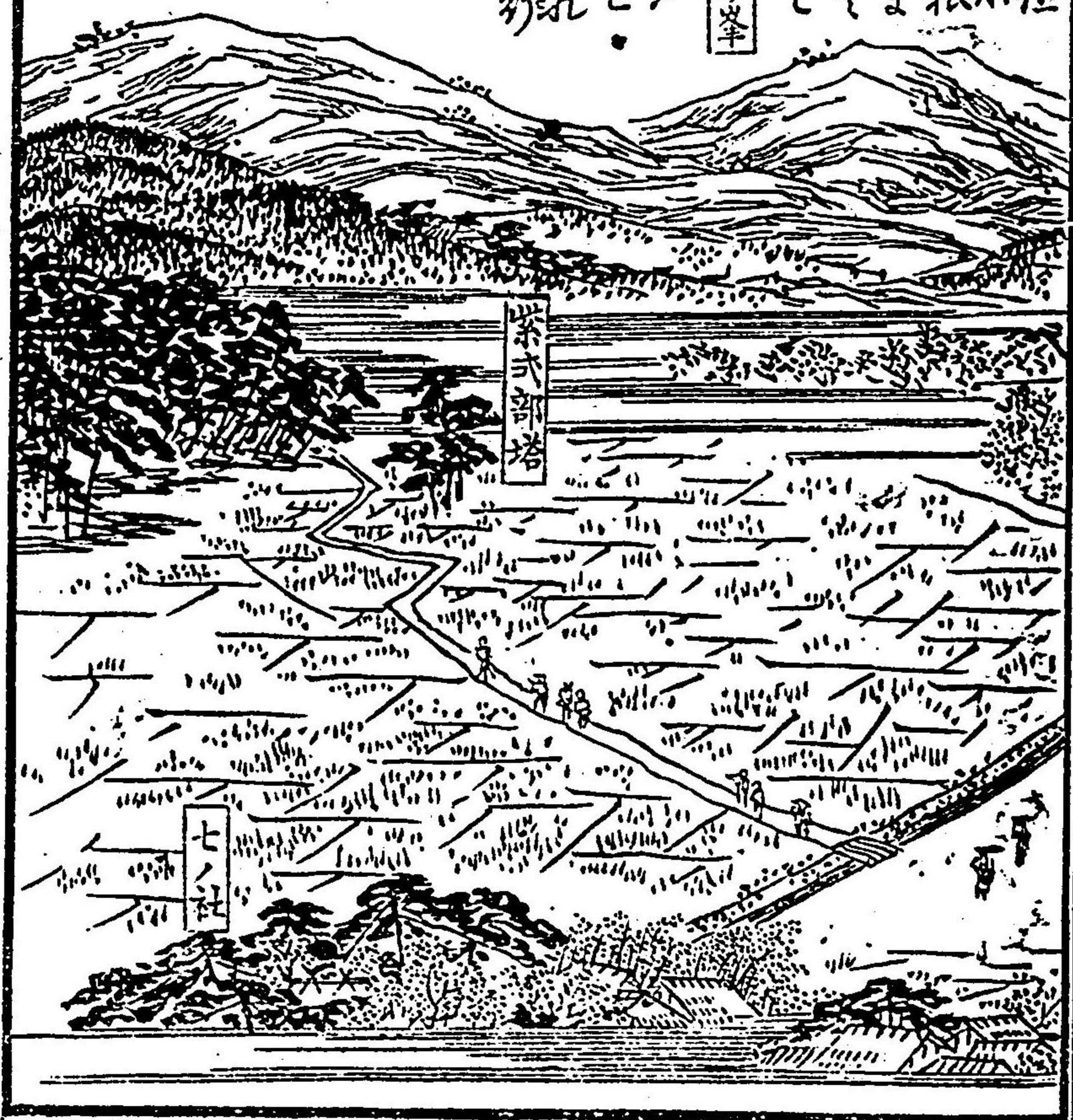
むらさき色の  
 くらもれ茶を  
 採りてせむ  
 法小あかしの  
 花さきふ  
 くら

一保十二茶のとき  
 小溝にて中ぬき大根を  
 おい



茶のふかき水のはろ大徳  
 寺お止せぬを頼んぐら  
 かろてなを煮し小根大根  
 とありあうといひしはま  
 つふおちる中ぬきとありし  
 茶は茶とてくく小根と  
 いひ小根とて大根とい  
 うあといひさるおろく  
 かりのふかき水のはろ  
 一保の茶もれ茶を採りて  
 法小あかしの花さきふ  
 花さきふとてあけ  
 一とく

雁島



七ノ社

茶式部塔

をひかし秋の夕ぐれ南菊のまがきよ立をどをりてなげふしを吟じ翠帳紅圍の中よ枕をな  
 ちべしよ。め語紅粉翠黛のかはばせ二世のちぎりを結ふといへどもかぎりあるは浮世の  
 ならのし生者必滅會者定離のおきてあれば一人もといなるこのなし誠よこしかたを思へ  
 ばいたづらよくらし空しく曙すあ。くやしひのな悲しい哉今このときよき苗を種せん  
 は何の春かばだいの花をながめん早く無明の酒の酔狂をさまたさんにはしかじと先一座の  
 小歌をしづめてのぞむところの談話なアまたよこれ希代の發菩提心のけていふみたふ  
 この善根にこたへて現世ふも長生をし金銀米錢澤山は當來には極樂に往生し、だいまし  
 てあそばんのこよす酒宴博中 敬白

次ふ經文をひらきて頂き一調子むけて大悲經第三よ曰く佛阿難に告てのたまこく若衆生  
 あつて涅槃をねがひ求めせといへ共しかも佛のところよあつてもろくの善根を種つれ  
 べ我説どころのこの人かあらす涅槃を得てんといふ

○上京に糸や由右衛門といふ者あり内々一休和尚の答話よきと古今無雙のよし承はりいつぞ  
 は紫野へまわり何よてもめづらしき事をうけたまはらん左かくば此方へ齋入や入べきとかね  
 く思ふ折ふし和尚且郡かたより歸りたまふ途中よて行合さてく一段の處よて御目にか  
 く、アいものかあ序あがら明日少し志す日よさしわたへ候御坊さまへ御齋を進じ候兼々御  
 寺へ伺候いたしやべきとぞんじ候處 幸是よて御めよか、り候 必々ぞさせば和尚心得ず候

まりながら宿所といかんと、ひたまふとき此入宿之室通せんじよ其處ありといひてわかれ  
 ぬ一休心得さて翌日早天よりこしらへ候もの、宿を尋ね行玉ふよ此者もすこし心あるものよ  
 て店よちいささ錠をつりて置けり小さなたを釣たるここあたといはん事ありと判じ頼てうち  
 に入たまふがまた座敷の口よ犬のかはを敷たり和尚さしきを通らる、とさき亭主出合さて、  
 今日折ふし路次おしく御太儀の御事なり御足よこれ候はん洗足まゐらせんとサ一休いや  
 く只今かこを越へてまゐり候もあすこしも苦しからせと仰らる、よ亭主扱こそ早一ぱい  
 わされたりと思ひさて御膳をこしらへ出す和尚ふたを取て見たまへ何れよも小糖を一はい  
 入たり一休さあらぬ体よて居玉まふ處へ亭主座敷へ出れば一休さてく今日の御志よ三七日  
 よて候かと仰らる、に亭主いよく感心しやがて和尚座を立玉のんとするとき亭主はなほと  
 こ、ろを引んとて錢百文をとり出しこれは今日の布施よまゐらするあり是へよらすして居  
 がら御請われとサよ一休さ、ものへす心得ず候是ま、よてうけやべまき候と、投すよこ、へ  
 賜り候へとサさるれば亭主いよく感心し扱々御坊さまのき、およびたるよりの答話僧よてや  
 ままし凡人はしばらく思案してや出そよいまだ舌も引入さるうちよ早くも斯く仰らる、古今  
 まれなる御坊さまやとかんじける

○和尚さる川邊を通り玉ふよ女ののだから成て居けるを見たまひ陰門をめざして三度禮拜して  
 すきたまふ折ふしありあふ人々是を見てきて、あの僧は狂氣か出家の身とし女のどだかにな

りたるを見て三度ふし拜みてゆるる、はいのある事やらんいかさまにも狂氣あるうさもなく  
ばか、る事はし給ふまじめつらしき事なりいざ近づきて子細をたづねんげにもつともありと  
て我もくどめをしたひやがて追付そを引御坊た、今女のはだへを見て禮拜し玉ふはい  
かある因縁やらん問まはしくい但し佛道修行にかゝる事やましますかいかにくとせえかけ  
て問ければ一休うひの事よもあよび玉はを斯いひすて、過玉ふ

女とば法の御くらといふを貸

しやかめ達磨もひよいくと生

といひすて、ここ通りたまふいかある坊主やらんとふしぎなすよしる人ありてあれこそ一休  
ありといひし人ありさてこそ彼僧ならではうやうのといふべき人ありとも覺へず殊勝やな世  
の中の坊主あらば女の肌を見たらんよ必ちよげぬぢかへりく目もはちたで行くやらんか  
く禮拜なして還か玉ふこそ有がたけれ實も女の胎内より貴人高位も出玉ひ諸宗の高僧たちも  
出らる、ぞかし人みな尤とらんじける

扱今晩は先夜酒宴談の次をとさやあり講談興起の義は編誦文よも聞へたとふり酒宴談中逆  
修現當安樂のため一つに笑のたろとしてつとひる所の説法講談で侍るある經よもし國の  
中林の中もしと白檀の家是中皆應起塔供養と、かれてかやうある在家俗語の白衣の中よて  
も一偈よでも演説するときつたとへばけがらはしき所も則三世の諸佛來迎影現の道場とい

ふ物なれば信心を決定して聽聞あるべきとが肝要よて侍る次よ恐僧義なんよもしらざる瓢  
金坊主ものしりがはよ子細らしきと必さやうまんの心を起し玉ふか大惡人じやそれはあせ  
よと不審あらん涅が經には依法不依人と説てその人よはよらぞ能所の法よよれと敵へ玉ひ  
成實論よは經を引て我意よあらすとも各正理よ順するをば地教とすべしともあり痕が衣を  
若たりとも法の道を説よき所あらばうやまひつ、しんで聞取べしとも釋したとへば未曾有  
經像法決疑父母恩重經等を佛説よあらすといへともいかよして其理佛の御心に叶がゆ  
よ諸の祖師これを用ひて證文とするべく我等ときものも教化し説法せんときは佛も我も敬  
ふやうに沙門を供養せよとのべ玉ひぬれば信心の手前からの慮外なから某を末世の佛じや  
とも思召がよく侍る扱たい今披露の經文は訓讀のとく大悲經第三の卷なり物じて經を講す  
るよは來意釋名入文判釋をといふとほさわれども淺學のそれがしおれば万端さしおめてた  
い經文の表よよつて談ぞべし今の文の意は釋迦如來阿難尊者に對して仰らる、やふは末世  
の衆生等下根下劣よして直に涅槃よいたるべしとの文でござるが佛のみもと、いふと釋迦  
はすてよ入滅あり後佛の彌勒はときいまたいたらぞ何くをさして佛の所とさだむべきと  
もへば文字のこれ法身の氣命といひて遠うらそこの金句の説法を一たびき、てあがくわす  
れの阿難尊者如來滅後に獅子の座よのぼり一代の法藏を結集し一千の阿羅漢これを具多羅  
葉にしるすはすこしも佛説よたがはそこのとき大衆ふたつのうたがひをなして如來かさ

はめ理を詮め生を度し物を化す中あも大悲經別してしゆまやう千万あり此等の文義を談す  
 此處が則三乘開會の即世道場まつたく諸佛來現の所といふものなり實より涅槃をば求め  
 れども座與ももあどけにも名利にもうとにも佛語論談をさく心が其ま、善根を種るといふ  
 ものあれは佛説といつはりあく未來成佛は極然の同理ありさて道修は七分の善徳まつたく  
 得て現世安穩のあしたは榮花のはるをうたひ命期臨終の夕あは法性の月を詠せん事又う  
 たがひもなき經驗の旨にてとざるはど願もしくもひたすひてねがはくは眞實の涅槃を  
 もとめ玉ひて一遍のあむむだなむ法花をとあへ玉は、往生成佛は決定でとざるまつこれ  
 で經の句はさかりと聞へままたア、ねむけが出るとふあ

○下立寶堀川邊の道邊とすものありあるとき一休を齋やす入よりつひなし終て道邊やすれける

は和尚さま某は娘一人もちてひがさんぬる春の頃隣町へ縁よ付すひがや、もすれば姑と  
 からひて歸すひ親の身にひへばあんばうめいわくよぞんじ色々異見すてはかへしひと度々よ  
 およひひ和尚さまは智若よてましませばあもしるさ因縁ばなしひはいそとほ物騒さのせたま  
 へかしむく覺ゆる娘の談言のたりや聞せなばすこしは聞入とも侍らん和尚さま、玉ひそれがし  
 一とせ修行のこぞや關東にての事なりしは是は姑女もあしくわたる嫁なるがたちまち其むく  
 ひ歴然なり、事あらしくかたりやさん下野よての事なりしがしうとめ久しく病みてあやみけ

るこ其子深くなげさて醫師をよび療治まけれもさらし驗あく日を送りけるがあるときいし  
 の中やう此病おはぶたのさもを養てあたへあは忽ち本復あるべまといふさらばとてぶたのさ  
 もを求先是をよく養て母す、めよとて妻にわたしその身の他行しけるこの妻つねく  
 姑をよくみ老病の事なればせんなき薬ぐひなまと思ひける折節その孫嫁子をうみければ其る  
 あを養よとりてよく養て姑は勤めぶたの肝のかくしておのが薬ぐひよぞなしたりける程なく  
 赤いろある蛇うのよぶたの口へ飛入ける尾四五寸は口より外へ残りけりその嫁あささけびも  
 だへぬるといふばうりあしまたに奇代ふまぎの事なれば聞傳へ見物の人おほくあつまりける  
 が老たる人の見るときは尾をうごかさ若きもの、見けるときは此蛇尾を右左り上下へうご  
 かし女の顔をた、さけるこそおそろしけれある人釘ぬきを以て蛇をはさみ引ぬかんとしけれ  
 きも尾のうたき事黒が沼の如くよて奥へは入といへどもすこしも口へは出ざりけりかくのと  
 く悩むと三日にしてつゆよむあしく成よけりこれといふもつねく、姑もあしくあたりまひ  
 くひなり姑の口へ入れまじき胎衣をす、め我口へくふまじきぶたのさもをぬすみくひける惡  
 逆よよつてゆくのとく口へはいるまじき蛇の飛入けると天罰なりうたち影のしたがあとく  
 おそろしきとさうぢりとかたりたまへバ夫婦ともに手をうつてあら恐ろまやどかんじける道  
 邊またすけるの和尚さまそれがし此ぶらあたらしき枕屏風をこしらへすひこれはむすめが方  
 へかくりす心得にてい何よても一筆あそばし下されとや一休やそき事ありとて筆とりよじ



萬一人事一口むやく捲而壁よ耳岩よ口姑夫唯主おやとあふぐのみ  
我男げよたいせつよあもひあは

あどしうと梵の見よくかるべし

ひひの火のもえたつときの有あらば

こゝろの水をせきとめてけせ

どかやうに書てたびけり此屏風今に傳り侍るぞぞ

さて前夜の講談すせし文中に涅槃といふは天然の詞ありこゝは滅度と翻して空寂の理も歸する旨あれどもたゞ成佛至極の處と覺へたまへこの經の中の要は然る佛の所におゐて善根を種つればと説種るといふ文字が法壁にうあふ間所よて侍れば耳をかたむけて講談を問たまふべし此種の字とらゆるともたねとも卿とも讀てたよへば草木のたねの如く瓜をうめれば瓜を得豆を取よも同じ事善種をまけばよき果をとるを因果ともいへり世間には仕合のよいと果報といひよろしうらざるを因果といふて誤りあり因果も果報もさあひくひといふ心よて文字よ善惡の差別のなけれどもかやうある誤りは世よあまたよて侍る弘明集に織芥の惡と劫を歴ともはるびす毫釐の善の世々よも滅せずとて微塵髪すぢはどの因も果ならずといふとなければかやも惡事のたねとてばすべからず生べきと治定にて侍るされば法苑珠林よ經を引ていこく愚痴の人因果をしらぞみだりよ邪見を起し三寶四諦もなく禍もな

く福もなく善もなく惡もなく衆生の業因もなく惡果も無どかたるものは決定して阿鼻地ごくに落べしといふ文あてとざるばどよ何れもなしなみ玉ひて因果撥無して佛法といふものがないものじやなど、垣やふりある事はかまへていはしやり升なされ共今とさきの人多くひがみて地獄も極樂もありとは聞て見てくるものおしとよく見るはあやつりよ紫のくもを空より糸にて釣下し箔の光をはあつ佛弘誓の舟よ二十五の菩薩一度よ尺八をふき三味線をひかせてつかふと上手よてまたおかし鬼といふも虎の皮のふんどし、たるが濃たる角をふり立しくむいらいしの弄びがおそろしきものよいかげんなる事を佛もたくまれて子どもたらしのたひひれを仕出し玉ひけるよといふ者もありややく何がしの法師と油獄に行て有し皇の苦痛を見たてまつりて歸り唐土の僧も奈落のくるしみをおもひ出して日よ三度血のあまた流すとも書こしたるぞといへばうそつきの末弟どもがいふとあれば何を證據よすべしおどめざける人こそ淺ましけれ同じ論に日無よおちて因果を問する者はたとひ万牛挽とも永劫地ごくの門を出じと書て是をかなしみ玉ひてこそ三世の諸佛も十方の如來も世々番々に出生し玉ひ此まどひをやめさせ一切衆生我ごとく一佛來道あらしめんと五十年のあひだ聲をからして説法教化したまひける 例よ心得るは惡の中の極惡あればまどに邪羅延力の牛のかすも惡趣を引出するといかたかるべし此等の人のおつる所の地ごくはくげんをうくるよ問なきがゆゑも無間地獄と名作る其跡相往生要集因果經等よつぶさよあれば只



今中事におよびませぬ何といたましひ事では侍らぬか愚僧などはまづいやでござります爰  
よ一ツのふしさがこれあり自問自答して聞せやさんさりあがら御退屈でござらふ一ぶく我  
さん。

○一休人を殺すものに證據をひき得道させたまふ事ありこ、に早川治郎太夫とすもの和尚のも  
どへ行すさる、はそれ人をころすに其理もつともあらば千万人を殺ともくるしかるまじ又殺  
まじき其理なくば一人ありとて惡逆無道あるべしと申けるとさ和尚仰られけるはそれ殺生と  
もろくの罪の根本ありたどひ生る物よあつてはのみ氣よてもころす事あるべからせ同  
たい殺さるよはしうし男こたへややう少もくるしかるまじ或と主命と申又ははうばひどもに  
たのまれぬれば是非なく殺事ありかくあるときと其たのみたるものこそとがあらん我のまつ  
たくとがはさまじと利口氣に自慢去て申和尚舌も引入させせして汝の柳は雪つもりたり枝  
おもげよ見へひはらひてんやと仰られける心得申候とて柳陰に立よりふりおとしければかし  
ら袖のうへに雪ちりか、りしをうちこらふとき和尚の曰汝いかあれば雪をこらひ玉ふぞ某が  
たのみ申せば某こそちりう、るべき事あるよやと仰らるれば此人のたと行當りそれよりし  
てかさねて殺生をやめけるとかや是又依ておもへばいかに人をころす罪科なりといふとも朝  
敵をはろばし惡逆のものをたいぢせん事はいく千萬人ありとも苦しかるまじ一人半童ありと  
も殺すべき道理なくば其責おもかるべしされば人を殺よあつてはもつとも害すべき道理なれ

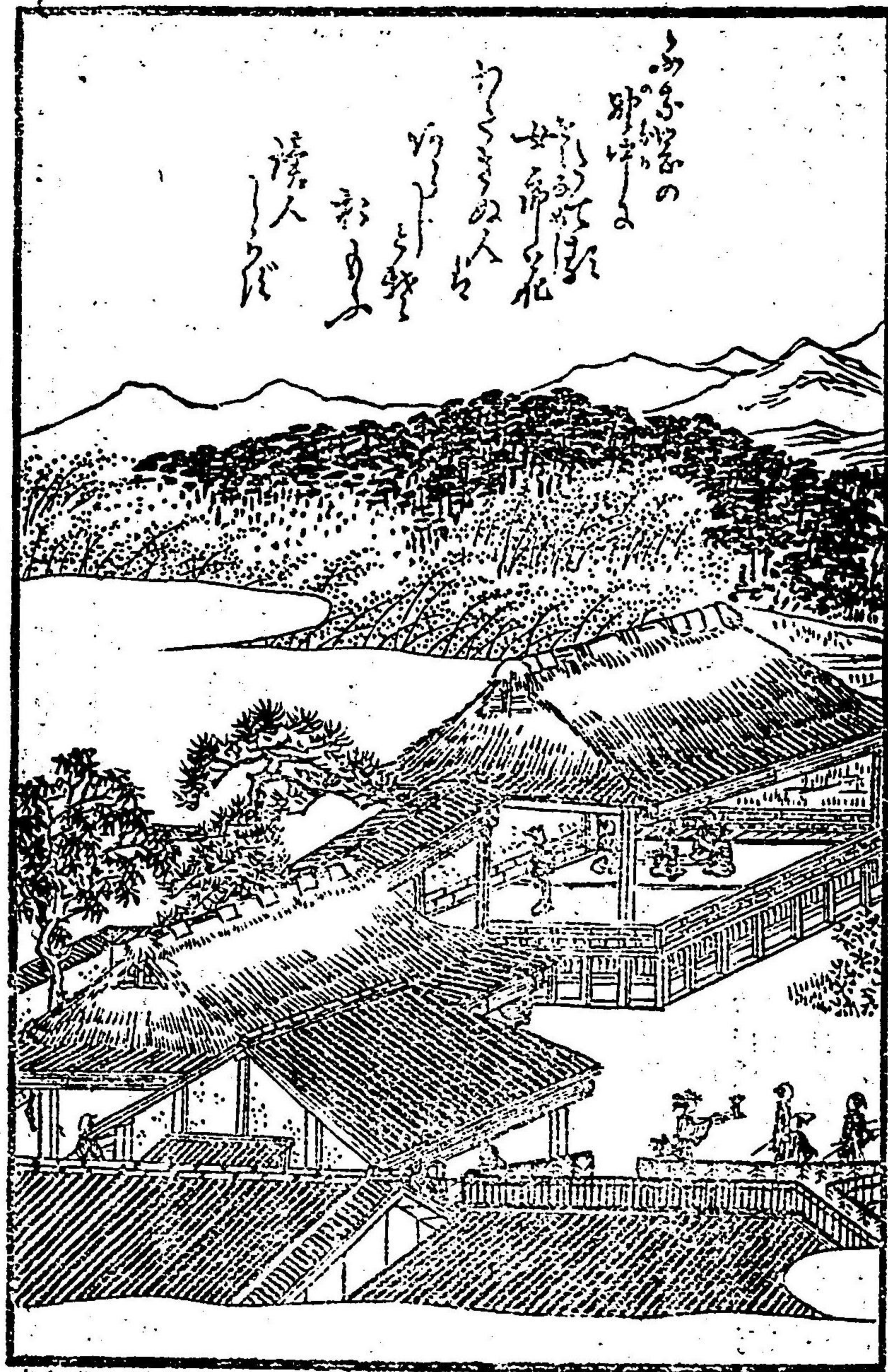
とむさひらひの余にすぎこのみてさるべき事いか、あらん然ればころすべき道理の内にもた  
さるまじき道理あるべしよくこ、ろすべし

○爰に木屋平次郎とすものきはめて長ちいさくいろくろき男なり世間の人々これをあざけり笑  
ふ事よの常あらせまして他所へ用事をと、のへに行とあれば指をさし子どもあまた付したふ  
て道をも安からしめねばおのづから歩をあすとならざるべき少し心ざす事ありて一休和尚  
を請じ我身の不具をつぶさよはあし今更これをくわかなしひ一休仰らる、と質生たる身をち  
いささとして何とすべき左やらの事をかあしむものよあらせ其子細は金はちいさきものなれど  
も天下のたからとある針はちいさきけれども衣服をぬふ寶となる墨とくろければ佛經圖録聖  
經賢傳の書をしるして天道の助となる漆はくろければ諸道具を助たり山は高しといへども  
貴からず樹あるを以て尊しとす霜雪と白ければも万民これをいためりたどむ肥ふとりたる人  
がいかほど瘦細りたくねがひたりともかなふまじまかるを強てやせ細らんとくひものといめ  
うたちをちいめたらばとて必氣血をへらし病を生じ身命のやふかるべし又瘦ぼそりたる人何  
程こゑ太りたしとねがふともかあふまじ肥太りたらんと飲食物たくさんにして寐伸居のびを  
せば必氣血をみだらし食傷してうらしげく牛の糞のかさねくなるを寝所も包おき後には  
俊寛僧都の鬼界がしまる住し、ありさまなりなば命もすでもあやふかるべしされば藥師  
如來の出世者婆へんじやくが再來して藥をあたへ療治する共いかでその験を得んしうらば天

の黑白脊の長短も又かくの如し爰もあもしろき咄ありさる所に才かく利はつの人あり此男いかよも脊がちんちくりんよて我身がからもうらめしく悔かあしむ事せつなり余りむねんさよつくぐと思案しけるよ我身こそかくありとも是非子をもよおひては脊の高き子を持べしよあらばまづ女房をむかひんよ好ありみめかたちには少も望なし只脊の高き女をと尋るに其脊六尺余よて無雙の悪女ありいそぎこれをむかへとり夜豊かせさけるほど程あく此女懐妊して九月をも過て程あく産月ひもをとくよろこび取あげて見れば娘なりあつばれ男子よてあれかしと願ふ處に女なり捨べきよもあらず育てけりかくて此度は是非に男をまふけんくどかせぐ程にらむ程よくつつけさまよ女子ばかり五人までまめり彼男あら腹立や無念やといかよおめさけれども甲斐もあくつよさうの捨ふのどいやけども流石さうもあらず養育するはどに成身するにしたがひ何れも母親よ似て色黒く脊高く鼻筋ひしげはうまへうつむさるころよには一ツの徳にハ鼻の用心いらまなこ細く、びさき驚などの如よて六尺もたかの女ありむこどり嫁入ならざればとせよてあつかひける有さまあり何事もかやうの事を聞かす諸事悔うなしし事あらじと言葉よ花を咲せて踊りてこそ歸りけり

よて自問自答のついきを御はあしやさふ縁と無縁と三ツの品あり問如來ハ是實よ一さい衆生の父母にて大慈大悲あまねくあふて更に俗とさあく影の身よそふ如く護念し玉ふならば其佛の力よて衆生もことごとく悪をやめ善を修すべきはづあり何ぞ日夜よ惡業をつくる事

いかなかふや難問あふてかあはぬ所でござる此答への尤佛の大慈は平等にして差別なく一珠の雨の如く日月の光の如く何方よわけへだてをあけれども受る處の衆生が同からせ縁と無縁との相違あるとは釋迦如來舍衛國よあめて說法あそばしたるにて合点が参りそれはいかなる事とや佛この舍衛國の祇樹精舎に廿五年おはしまして說法なされたるとき殊勝のあまらみ猿鳥さつね狸のあらゆるものまで如來の說法をきよて頭をうあだれし如くおはれば皆あつから住所あへりし、かるに此國よ住む人數九億ある中に三億の衆生は目の前よ釋迦如來を拜み奉り音聲を聞て得道し又三億の衆生はたゞ佛の此國よて說法し玉ふとすき、又三億の衆生は佛といふ名もしらす是を見玉へ同國よ住み同じとさにあひあがら縁の有と無とは此三ツの品かよりあり佛の手前よりの少しもへだてなければ爰は力よおよばぬ所あり又醫者の藥をもるよ何とぞして人の病を本復させたくじかげんよ心をつくして興ふといへとも飲ねば醫者の咎よはあらず全かくのとく佛は八万四千の煩惱の病をいやす大醫王ありとのたとへ是にてよくきこへ侍るよすれば初の難問とすみました此上は隨分よよひをしりぞく所の彌陀念佛や法華題目あとの良藥を飲で安樂世界寂光淨土よ往生成佛をどげたまふべきが一大事よて侍るも一ツ因といひ果といふと人のうたがひをあす事がこれ有はどに次手あ難問して聞せませう先しばらく此問よ世話方請中御らうそくを獻せられませ



○さる人一体の草庵へ尋行和尙にあり奉りてやや我等文盲ふつ、かものにいへば耳がたき事は聞てもきかざるがとく何にてもおもしろき事候の御はなしたまこれとやとさよ和尙されは唐土に虎きつねを追つ先すでは喰はんとするに此狐のやうといふに虎よくきけ必せわれをくらふとあられ今日よりしてそれがしをもろくの 獸の大將に天道より仰付られたりさる程は汝我をふくめるあらば天命よそむき忍ち汝が命めつそべし若此事いつはりと思ふなれば我あつにつきて供をして参るべしもろくの 獸われを見てかならず恐れおの、きよげうくるべしといふ虎ふしきよおもひさらばとて此狐のあとに立ておくもろくのけだものども案のどくみあちりくよ、げかくれおそれおの、きひれふす其子細は此きつねを恐れにぐるにあらせあとなる虎を見てもろくのけだものはにげかくれおそれおの、くなれされども虎とまことよかの狐は恐れをなすと思ひ天命をおもんじかへつて守護ををしけるとかやそも大なる化やうがなされべ世間の家々にもかの狐こそ多ければ化され玉ふを御用心く

○爰は能勢小作といへる大すりきりのわるがしこさるのあり時しも極月廿七八日ごろの時の事なりしが借錢あこひつめられせんかたなく方々をかけたりさいかくしけるも我も人もめんく用ある折からなれば我用お立べしといふものなし、うるは粟田口邊は彦八とすて富さかへの町人ありかれが處へ尋行からはやどおもひ粟田口へといそぎける此彦八とすものいがある前業のつたあきにや朝夕の飲食とて黒米飯よみづしるにてくふほどの者なまかれよか

くといひけるがくだんの如くまづしきものなれば我身よさへをしみ朝夕の食をだよもどきに取ては一度もかんよんする程のものなるゆへまして親類すら頼もつて他よかねあをを用よ立べき事おもひもいらせかつて取合やされば是非なくまて歸るとて

たうらとむならぬたうらは彦八が  
持たるかねは我身さん玉

とよみすて、こそこのへりけれさる人のすけるは一体和尙へ参りあげさ給はさだめて和尙のヒひふかくまします程にこそしは玉はらん事はよもあはじはやく参られよ殊は其方のよろしきとさは相應の用事を度々のあへられし事なれば其方の事の和尙かげよても念頃よ仰られ候ま、御うけおひ玉はぬ事あるまじとくくとすせば此者げよも同意してやがて和尙へ参る折ふし和尙出合玉ふ先四方の咄しニツ三ツ仕り序よさどきを見合すけるといかよ和尙さまそれ人間之四百四病の其中に貧苦はどつかさ病となしと古人も是をかなしめりされば御僧も内々それがしが年月持病御存なりとに此頃しきりよさしおこりひさる醫者よ尋候へば此煩ひと我等が療治にこりあひがたしかやうの病をつるは醫書よ見へやさせ然とも曾て病の名とすかねば醫者の見立をしらざるに似たり多分此わづらひは借金といふまづらひありいか成者婆へんじやくが、りたりと治しがたうるべし妙薬金銀丸をもちひてのみ玉は即時治すべしとをしへられけりもし和尙さまも御持のらば一包御はらしやよあづかり度候となみだ

をばらりと流してサせば和尙さ、玉ひてさればこそ其病之年に二度づ、おこる病ありまづ  
當月今ごろ秋と七月中旬何れも遠國までもとやりまづひやなりさるあらば愚僧すこし持の  
こせたり一包まのらせんとて奥へ入たまひ銀一つ、と取出し上書よと養命補身丸とらさづけ  
もし再發のどらとしらぬなり早々歸られよ

さて因果の差別目前の道理を講じよしや唐土の子才と士嫌といふもの、問答めて侍るそ  
れをふまへてと論せねども今少し因果の道理を問つたりたるものがや事にて因果といふも  
のがたねと木の實のどくならば同じ田地に種茄子小角豆の中も枝葉のしげりたるもわり  
やせたる枝、虫のつきて見苦しきもわり何れも其肥たる枝と前世にていうなる善根ありや  
せたる枝といかある悪業をかなして是はどのちがひがあるにて侍らんその上松の木が後  
生ねがひてさくらもありたるためしありや天地の間は生るもの之萬物自然の理にて種と同  
じけれども所よりて大小高下のあると別て善事したる瓜のわしき事したる豆の葉といふ  
やうあるいふかしき事あらんやおそろくと佛法をやまりて因果の差別を説なるべし是いか  
んくこれを士嫌がこたへよ是不類の談あり變化之心は依是木なる事豈心あらんやといへ  
り此心と不類の談とと耳とつて鼻をかひが如く山を越ゆるよ、たる不審といふ事なりそ  
れいかよとすよ成實論に

前世の妄執と今四大をまねく虚空を圍て仮名の身となる前世の業因よよつて法界の五

大仮名和合して五昧とあると釋して善惡因果と論せるも有情の群生心のあるもの、上よ  
こと沙汰とる事あれ誰か悲情草木の心なさうつ木後世を祈れば善をなせといふべきか、る  
ゆゑ、變化之心による木たる事あり心に心あらんやといへり變化之品形のかさるといふ事あり  
しかれば有情非情と、ろわるとあきとの差別を各点すればその難問みあこれやとて、べら  
きやたいし右のものいひ華嚴會上の樹神の偈と甚深の子細あるとなればこゝよと論せる如  
くあり誠と昨日われは今日あり今年われは来年ありたれかよくあすの日をつげて来る事と  
なければども今日がくるれば明日もあり現在あれば未來あり因あれば果なふてうあとの道理  
極るならひ薩婆多論に日ひりし半酒比丘といへる人之常と牛の酒かひやうよ口をうごく  
としられたるの先世牛の中より生をうけられたとす又ひとりの比丘ありかり初も錢をも  
つて我面を見られしかば過去傾城のうまれがたりなり目蓮尊者と神通を得玉へとをつねよ  
とてひれおをり歩行たると前世獄の中より生れ來るとしるされし又佛弟子の中は夜盡わか  
すよ眠りたる僧あり佛よこの因縁を尋ね奉れば千歳の閻辛螺がいの生を得たるものなりと  
のたまひしとつつかしくおもひ晝夜また、さもせず七日の閻辛なことをおらいて居たりしか  
ば忽ち明言と成しを著せよ見せければ是いひへから病よてつふれたらんよと藥あれども  
生たる目よと眠りて休るが食物なるを此日敷ふさかさればかつるさしたる目なり藥かなと  
まどてさすかの名醫とぞとらひて去けり其と世尊これをあこれみたまひて金色の御手

をのべて双眼をなで玉へば即時やみこれて明眼になれる事もあり生としいけるもの三界二十五有の生死病死迂流問隔六道四生形をとし果報ひとしからざる事と皆先業の習氣よよれども一切の凡夫罪障ふかくして因果をしらせ皆みづから苦の因を作りてみづから苦の果をうくるかいこの我身をしとり夏虫の火よこがる、たぐひ皆自業自得疑ふむかつてうつたへんあるうたよ

奥山のすぎのひらたちどもすれば

おのが身よりぞ火を出しける

ともよめり噴却苦悔よひやうりんし多少業火よやかる。とぞ

こりもせずさ世の間にまよふかな

身をおもてぬりこ、ろなりけり

終よその苦しみにわかきうへつて五塵六欲よおぼれて思愛よしばられし相續のちぎりも命のさへざるうち無常のふすまをかざるも身体をやふれざる間大梵高尊の闇も火血刀のくるしさをのなしみ阿育の七寶も壽命を買せ思たへぬれば又三途八難古巢に飯り犬どうまれうらすとなり不淨の肉よ樂しむをばい葦中よとまり道と變じ角をいたる毛をかふむり生々世々の其間四足にてやあらん無足にてやあらん覺す淨いしづみぬ紅蓮大江蓮のこはり八寒よとじられやうく餓鬼よへめぐりあるひて畜生にまよふを修羅よりうつりふしぎや過

去越々劫のすこしきもかりよひうれぬらんたましく人間に生をうけあひがたき佛法にのみ實の山よ入あがら現世後生をふかりとくらしたらりどわかしようやまふべき三寶をも信せず放逸に悪業をたくみ手をひあしくしてまた三惡道にかへるべき事とてめく候ましく悲しきと思ひたまひて日頃願たてまつりし念佛題目やそれくの宗旨の方便さつあむ取付て此たびとせめて少しの善因をまいてありとも生死の家をとおれ未來の淨刹の燈よ置べしと大願のちかひをたてむとへに後生の道よ身命をなげうち玉ふが肝要をひざる又さやぐや談じたき事侍れどもへたの法師が弁舌わらむさのたねもしや此大はのぞみあらば明ばん談聞して聞せましやう

○和尙いまだ小僧にておとせしとき師の御坊よつわへて物よみ手あらひあとして居玉ふ折ふし夜さむのころおれば師の坊のからさけをあつものとしてたいひとりまありて一休へは豆腐やうの物ばかりまゐらせられけるよ一休これを見て凡出家ごあまぐさきものをくはざるよまうけ玉はりしが師匠はからさけをまゐるはくるしからずめかさあらば我等もたべやさんとすける師の坊おかしくおぼしめされなんぢがやうある小僧の身としてなまぐさき物くよときは忍耐あたるありと仰られければ一休眉をひそめしはらく思案してやまる、と同人間の身として小僧よのみばちあたらむや老僧こそあまぐさき物まゐらば耐あたるべけれとあざわらひておとしければ師の坊のたまふはいとけなき身として心たけたるいふやうかなさればよ老僧と

て御ゆるしとなければも我等と引導をして喰はせにといひたまへば其引導といかなることやらん少しうけたまはりたしとやされければ切々のせこそしやくなる人やいで引導し、聞えんとて一盃もりたるからさげをさ、げて善まつどりのべてのたまわく

汝元 來枯木のとし助んとすれども生て二度水中にあそぶとめたこそ愚僧に服されて佛果を得て噫

どのたまひてひたものまわりける一休つくぐと聞て又眉をひそめてしめんして夜の明るを待かねていそぎ魚の棚へとしり行さる大きくした、かなる鯉を一献買取きたりて味噌汁をこしらへかの鯉をひんよぎりふがたあつどりのべて細首ちうらうち落さんとせられける所へ師の坊たち出御らんじてこ、いさたのかぎりあり昨夜もしめし敷しとくといとけあき小僧の身としてうらさげにだも無用といひしよその生てはたらく物を書して食せん事以外の事ありといましめ玉ふ一休もさこそがす我等も引導おとまますとて去の体におはしけるが師の坊もあされとて大にわらひてそれはいかある引導ぞやもし尤しからばゆるすべし、からさばのがすまじとてかの御家の一棒をこわきよかい込引導いかにとせめられける一休すこしめさばがすいで引導仕らんとて左に鯉の細くびひんよぎり右よながたあをしやよりまへていわく  
汝元 來をま木の如し助んとはればにげんとす生て水中にあそばんよりは如し愚僧が養とかれ場

とて鯉の細くび水もたまらまらち落しぐつぐと表てした、か喰て空うそ吹ておはせしかば師の坊これを見てさてもよき引導ふりて手がのりある心得かを昨夜われらが引導にてはからざけは佛果を得せして賢と成べし汝が鯉とくそとはあらで佛果を得りさてく活機なる人や禪僧なるぞや小僧のとて皮の一棒をからりとす舌をふるひての玉ひけるの三年よなる鼠を今年生れの猫が取とはか、る事をやとかや汝はたいものよはあらじと感じたまひけるが案の如く程なく天下老和尚とみづからのたまふほどの活祖師よて一休とて名を千歳と傳へ玉ひて田をかへす翁のりをする尼までも物語の種と人よい、もてはやされ玉ふと誠に凡人よてたましまさぐりける

○一休和尚は鯉が御好物よて取日つれぐは鯉を買よつかとされけるよ折ふし店にされてなかりける彼つかひの者こ、かしこと尋ねいたる故おそかりしかば待わび玉ふま、

此たびはいそぐといふよあがそでの  
たこの入道みちのおとさよ

と遊しける處へ鯉四五とい買もて來りければ一休よろこびて此たこむさくくと食もむざんの事なり引導の願あくてはとて

千手觀音 妙手多  
佐州一味 天然別

新懸二袖 酢一拜二如何  
他禁戒 任二老釋 迦

やれ引導はすみけるぞ火葬よそへさか士葬よせんかいやく水葬よせよとて手とり足とり手  
 ゃく沐浴させて袖酢をかけてひた陰よくひたまひ去る檀方へ行て酒なごまわりけるがわま  
 りは多く鮎をまわりける故吐却あされけるがみを鮎あり旦那衆これを見て大驚きやけるは  
 一休和尚は佛のやうと思ひしに鮎をまわりけるのなさてくなまぐさ坊やこれのくのとわざ  
 けり笑ければ一休すこしもさはがすいやとよ我は鮎をぬべぬとも口より出ればせんかたなし  
 さりながら我鮎をくひしにはぬらまゝとあらがひ玉へば口より吐出したるもの食ぬとあらがひ  
 玉ふかやいよくさこへぬ御坊やとぞりあがりて笑ければいでくわごせ種たとへ口より  
 鮎出たりとも陰はぬ證據を見せんとて皆々引つれて百萬遍行て善導法然の畫像を見せてあ  
 れ見たまへ人々よ善導のみだをくひしとはなれども口より三尊を出玉へり善導大師さへく  
 わざる物の口より出るとを制しがたしよして愚僧くわざる鮎の出るとさらよせんうたなしと  
 仰られければ皆人よこ手をうつてさても頓作なる御返答やと口を閉て歸りける  
 ○扱一休和尚は生佛よて魚を食して水中へ吐出し玉へばその魚たちまち元の如く生かへると浴  
 中よ此事を尋らゆ傳ふと或人來りてかたやければ一休おかしく思して浴中の辻々に高札をこ  
 そわげられぬ其詞よ

来る何日の日さかり松のはどり葉野よわめて魚を喰て其まゝもとの魚よこさ出し水中に  
 おどらしひる事なや御望のかたぐ御見物よ御出待たてまつる

太夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書れける浴中の諸人之を見てうそか誠かどばかり人々いひけれ實しからず思ひしよ扱  
 はうたがふ處なま正しく御自筆よて高札を立らる、上はしるしあくてはかなふまじいざや人  
 々見物して未代のうたり句よせとやとてしるも知らぬも見しも見ざるも其日の來るを待うぬ  
 て門前よ市をあし我見もらさじところふまでのび上りて浴中貴賤ぐんじのせり其刻にもあり  
 しかば大盥の水を入なるほど魚をよく料理してかのたらいのはどりよ御膳をすへける一休出  
 たまひて彼魚をひた食よ食たまひて扱はんざりよひかひて喝々とのたまひて暫く目をふさぎ  
 ちどし玉へを見物のぐんしめは御顔をまもりぬて生たる魚をはき出し玉ふは今やくと待居  
 たるよしばらくありてのたまひけるはあのかくはるぐの御出あるほどよいつよりも一さは  
 手ぎりの吐出して見せやさんどて種々思案するに中々はかれそうよもあしせひにおとばす業  
 にありとひりて捨やさんや各も御歸りわれとて内へ入玉ふ上下万人きもをつぶしきても  
 おどけたる御坊と典をさまして歸りけるが其中よ恐あるものいひけるは只今参りたる魚は皆  
 生て淵におどるあり有がたき一言かお誠に正法よきとくあとしこそうけ玉はりしよ人の余り  
 よいはんとてふしぎなる事をいひてはめんが爲よ返てそしるなれば其理をしめし玉ふ有がた  
 まくと感じければ皆人は氣がつきて合點したも合點せぬもあづさめへりと歸へりしと  
 あり



といひ果といひ善と悪とのふたつは生れ苦と樂とを身よりけさすものあふぞとせんさくして見ればみぢ我一心より作りなすと又が心よさせるといふ事まで銘々覺ながら善方へはうつらせ惡しき事といへば先ず、む我人の過去の罪業が多く殘りてまた五道六道より引もどさんど心の鬼が身をばおれず日夜つきそひて少にても惡念がふればたよりを得て善心をとさまたげぬるをもつてあらゆる六賊といふ六の益人めが目と鼻と口と耳と身と意とに入のはり目にうつくしきものを見れば人の親たるものはあのやうなる衣類染ものを我子よして若たや孫めにこしらへてどらせたしと罪をつくりまた子を持ぬ女はそんじよ其娘子の今日には花見の着物見ればさて風流をひやふ當世のそめ出し帯は何々たしかしながたの内よあつたのかと覺るさし櫛のけつからさかおのれもあのやうにして寺参りするあらばこれはど見にく、とも能見られんものをしやはしやと欲をおこさき扱又一盃なる親父も伊丹鶴のいけのこもかぶりの樽片荷は弁當旦那のは、や向へ往てをじやると久三がいそがしげに通るを見ては何とよいものが行者がなくも大事あるまいとおもひ其外若男どもは色ある女をみるは煩腦。たまは行合袖のふり合よはや必うかれぬとをしたひ百度も見かへりたるも見ざるしよ、坊主の女ねぢひけるはを淺ましきはあしこれ皆眼に彼の色欲の盗人が入かわりて其心をうばふ也仙人が通を失ひけるもつふさにいへば八十八伎の見識有其外耳は聲を

聞てなづみけはひ物をしに形は見へぬとも氣をうでかしか、る穢土をいとひ淨土をねがふ念佛の音聲をさへおもしるさこは音やと後世の心の余所もありて聲よれんばをなし鼻よはかりの物を思ひながら袂に留し薰物にも心をとさめかし舌よあぢはひ身よふれ意よし口よいふ一日一夜四千念年々に思ふ事は皆惡道より引もどすあかだちなりまさかに發る善心も此六塵の盗人にぬすみられて善心の、やくさめてあしき方にのみはだされこよひの講談をも只何とあふ聞たまふべけれを中々御法はさ、よくひ事であく一目の龜のたごへ大海針の事は方々にて、うもんある事あり只今此法問をさくうちなりともせ先て意の駒にくつはをばめ意の境をつなぎとめてさ、玉へ親念親法はならせ身よいとまあく世路にさへられ親の命日にも寺まありさへならぬ世の中いはんや事教よまなことをさらす事もいとまを得ずしかれば聞といふ事が一つの樂しみもどより聞法の得益甚深とはあつたふかければ只一詞も佛のよしへとあらばおろそかよ聞ぬやうに先心をかちつくべし聞といふに三ツの品あると法苑珠林よこれありその内聞をもつて聞が三ツれ中よは下成としめされたしかれば何をもつて聞ぞといへば心をもつて聞がまことの聞やうかるがゆへ心愛よあらざれば聞ぞもまこと(定食)をも其味をしらせと備書にもものべたり莊子にも神をこらして寂に聞といひ前漢書買山が傳よ天下目をいたいて視耳をかたふけて聞とあるもうつくりと見せうつかりと聞ぬといふ事也しかしながら惡業煩腦のこみよはあふてさく事ろくよは濟せ只佛法とあらば

ありがたやとばかり信じたるがよし萬物の種をぞすすとらふは知恵をなればあらぬとし  
るべし

○或人和尙へ参る折ふし和尙たい先んわや諸事のはおしかりて後此男ややう和尙さまわたく  
しは此ごろ病中にて本復いたし今日うぬだち仕まつ和尙さまへ御見舞やたりさて和尙さまよ  
は御答話がよきと事凡日本中よ流布仕りてひあわれ何にても御のをし聞されいへさりなが  
ら今程世間よ高直あるものをもてあつかひ先何々にていや一休さこしめしされば高き物を  
いんとならば

ふじの山よ      あさまのだけ      伯耆の大せん      高間のみね

あたごさん      ひえいさん      東寺の塔      天狗のとあ

品こそかはれ      さだふの墨跡      大燈や扱      貫之が歌書      定家が色紙      たんざく扱もあ

らかねの土のものよは。まつはふんりのかたつき。丸蓋なすびかぶらや。はなのかぶ  
らあし。鶴の一聲。せししごう。さてわささしや。太刀かたをよしみつ正宗。國とし  
波のひら行袋。しるものうづばに。日での年の米の直どらんすはなはる高きかねあ  
り。かれうびんがのこゑたて、童のうたひこへ。ばんしきらひけいかみひてう

これまでなりといひおさめたまふところへ旦那かたよりとて御衣を一衣これは和尙さまへ進  
上し参らするよて持来る一休さのみうれしくおぼしめさる氣色もあく一言の禮といふ言

もあくだい狂歌をそへ玉ふ

かゝ衣またからころも唐衣

かへすぐもからころもかな

かくいひて是を返事よしておくり玉ふと也

○又さる人一休和尙へたづね行くささんどの望をすければ和尙た、玉ひ安き事や其望ならば先  
金剛の正体といふ物をあんど出し玉へとおはせらる、この者聞て取あへを其こんがうの正体  
ならば案するよ及ばすそれはわらよて御座あるべし子細のまづわらといふ物よてこんがうは  
作る物あれば。かくあるべきありとや。和尙おかしさかきりあくして。いやくさやうの物よ  
てはあし。金剛の正体とすは音あつて目よも見へす。手よもとられす火よもやけす。切てもさ  
れす。水よてもぬれせ色よもそまらず。かくては無ものかどみるへば。元來其ときよしたがつ  
て。又あるものありとおしへ玉ふ。此ものさ。てこは六かしたづねものかあこんがうあらば  
どかく藝あらでり別よ余あるものよてつくる物あるまじさいはんぞんせぬ事也とて出けるが  
門のはとりより又とつてうへし御坊さまたい今おしへ玉ふこんがうの正体わかりました門前  
にてとくと合点いたしゆをやられと屁よて御座あるべし子細はまづ屁とやものは音はありて  
手よも取られせ目よも見へ色よもそまらず火よもやけす切てもされぬ姿てもかくて元來なき  
ものかどみるへば腹中のとまよよりてらくつもある物よて候としまんがはあへるはをうし

和尙あるとき、鐘の早がてんも徳ありと引よまたとへばかあつんばなる者人に何を誦ひしてよからんと問しにとても聲よては合点行まじと思ひ耳をおしへて兎角ひく次第よて何しても利ありといへるを此つんばが心よてと耳に似たる物をあさあへといふ事と思ひ木ぶしを大分買込置けるよ折ふし諸方にされて此もの大に利徳を得て後は長者とされる是て人の言葉眞直あうけてうたがは忠誠の心よりなせる故よ利を得たりしかれば佛法の一句を聞ても少もうたがをたどへば愚癡よして法の深理は合点ゆかきともたゞ有がたやと思ふ心が則來佛のはじめとある爰を源空上人も一定と思へば一定と仰られし安心決定の處あり歌よ

聞ときは實もどおもふのりのみち

かへるときにはわすれこそすれ  
 ともめる間た一座ざりとまらきみをおめてたつ人ばかりあり耳を地をく耳がよし浄土双六まもえうちん地をくへ一度おちては二度出るとかなひがたきお地をくといふなり鏡耳は水がどまらねども水中よひたしておくうちは一ばいあるやうよこの一座よわてさく内は水のあるとくちやうもん座をたつときとたよると思ふ法の水はみなもつてしづくもさきおるかと耳といふあり人とうまれて登へのつとよきとよわきと利根鈍根上根下根の有あらむなればせひ覺すともくるしからせしはらくも法門をたもつものは我則觀喜す諸佛も又しかあ

りと説玉ふ刹那片時の間にても有がたき鐘よよつて佛はさつのをしへをうけたまはると大切ある事と信心を發し一蓮の後生を慮心よりやすが專ありたどへば火ともふ物は重寶ある徳ありて大寒小寒の氷面川わたれば手足の切る、とどくつめたく五体ちゞみあがるはどの朝夕よ火をささわたればそのま、あた、まり其外食物を衰金物をどらかして自由自在よつかふ能われども火事といふときは盜人よりこはく家の五軒や十軒は旦時の間よ灰となし人もやさころすはせんぞことい、やあやつなり彼五体をあた、めものを衰たく所の火と此わざとひの火とは別々かとおもへば少も火もちがひなく全く同じ火ありたい用ひやうよよつて善惡明白あればみな我心をわしくもつなと是あたとへて仰置れたあるは又生子を金銀どつてやしあひ一二ヶ月をたてしのは我子にち、をあたへ養子はいつしか、つゝ殺し罰あらはれつひよ刃より、やしを惡ひ心のもちやうもへあり現在かくのとくうしやくせられたるご其ま、の地獄しうもはやくめぐるは因果ぞかしむかしは血今は針ほどの事も棒はどよむくふは目よ見へてどはりごさらこの殺生戒をバ大乘門のときはじめに置は佛は大慈大悲のかたまりたるなればもの、命をどるを別よいましめ玉ひしなり殺生よつめてさまぐこれあるはどよ三世のむくひやうをつぶさよはなして聞せませう去ながら余りかたい事ばかりではみあくたいくつでござらふ先一ふく

○戒寺の門の破風に旗を三ツ作り付たり一ツは兩手を以て目をふさぎ一ツのさるは兩手よて耳

そふさぐ今一ツは口をふさぐあると三人づれにて此門前より立ちまゝ見物す折ふし一  
 休そこを通り玉て立より是を見たまひうちうあつと笑て通行たまふ三人のうち一人がや  
 う何も三ツの猿のいはれをさまじくあんじけれども終合点はわき只今これにしばらくあり  
 て行たまふ出家のうちうなづけて通られしと定めて合點し玉ふあらめいざ子細をたづねみん  
 と追付て一休の袖をひかへ御坊は物たづねずさん只今門前よりつる猿を御らんありてうち  
 うあつと笑たまふやうは定えて御僧はよく御ぞんじありつるものとぞんずるかやうや我々  
 は愚痴文盲として何の弁へもぞんせざる者どもあり子細をかたり聞せたまへや宿へかへり  
 なしよも仕らんいかよくと問ければ一休さればこそ其猿のいはれは我等もくはしくとぞん  
 せず去なれ何れもれきくの若き衆の尋ねたまふよしらぬといふもいかん斯いひし事もあ  
 りげに

何事も見ざるいはざるさかざるは  
 たゞはとけにもまざるなりけり

とよみ聞せたまへば三人の者どもさてく尤なる御歌のこゝろかあ是はめんくの心得に  
 なくてのあはざる歌也さて今の御坊と佛神の化現あるべしと皆一同感したち歸りしが一人  
 のややういかよめんく此歌の心をもつて三人とも今日よりして見ざる聞ざるいとざるの  
 願をたつべし皆もつとも同じて扱かたごらに立よりければ折ふし鐘寺の晩鐘かすかに聞  
 けるを聞ざるの願たてたる人何となくおもひ出て

今日の日もいのちの内に暮れけり  
 あすもやさかん入相のかね

とふるさ歌をうそ吹ける處よいはざるの願たてたる人のいひけるはいかゝ其方聞ざるの願  
 あしくありぬる事のおさましさと手を打もびをさして笑あざけるところへ見ざるの願立た  
 る人のいへるはさてくかたぐは何を聞何をいひてともに大願をやぶり玉ふやおろかよあ  
 さましき事かなど、が先らる、三人の心おろし

○又さる初心なる男ありさいく一休和尚へ参り萬うけたまはる和尚此ものを見るたび其方  
 はたんき人也物ごとに随分かんんせられよと仰られる此もの答てややうもつともうんん  
 仕仕事身よこたへ遇て覺へ候去ながら我何ののまひもなく無異無事よまかりあり候ときい  
 たづらもの來りてそれがしが面よかすときをばさうけ候をぬし拭てかんにん仕候と和尚聞  
 玉ひて言語道断それはわるさうんんの心得やうかあかすくも其うすはさをのこふべか  
 らせもし其かすはさをのこひ候ははさかけたる田夫もの我等がかすひきをひさくきたなき  
 とおもへばこそそのこひたれにくき仕かたありと猶々いかりかさねてはいかある先よかあは  
 せんすらんさるははよ其かすはさをきたなくとも其まゝおきて干つけ置べしそれ何のとも  
 なき人の面へかすときをばさかける馬鹿ものは生有ものよわらせひとへは狂亂すいさやうは

かたくらだ非人ともいふべしそれ雖といふひしのか成貴人高位の人のつむりへもおそれず  
わがり夫婦のかたらむ事をもあしめるひは其をひりうくるされば其國をもとより虫なりとあ  
もへば腹も立を兵そのとくはい同前のものよ對するときは人倫のなすさはふよわらず堪忍の  
こころへ是はどにもあてはいかでかあらん

因果歴然修羅の二ツを御はあしやさん過去の因をしたらんと欲せば現在の果を見よ未來の果  
をしたらんと欲せば現在の因を見よといふを譬して現在の果を見て過去未來の果をしるとい  
むり因果といふは遠い事であく經文多き中は大集經の十來といふ事あり其中に命長きも  
のは慈悲の中よと來る命とじかさものと殺生の中より來る未來もまた然なり今此悲しき淫  
身とありたるこ已よ過去の業因よよつて四苦八苦よよきよ付あしきよ付叶ぬ世をあげく近く  
は成敗は行てれてかべねをさらし籠獄のすきまをいたすを見玉へ其中に重きかるさがあつ  
ていづれかろかとなければとも人を殺したるもの助かるはなし但し侍の戰場にひうひて凶徒  
をしりぞけ盜賊を討て國を治め義をたつるは佛法あは一殺多生とも慈悲の殺悲ともや侍る  
それとひとつ事ではあし梵網經にどくがとく一切生業は皆これ累世の六親けんぞく只頭を  
わらため面をかゆるによつて各相知せどありて六道りんるのわいだ生々世々生うはり死に  
かわりあるときは父とあり母となり親となり伯父となすことあり縁者とあり親となり  
しゆうとしうとめとあり師匠となり子弟となりあるひは士とすまれ百姓と生じ大工となり

商人となり夫となす妻となりて形はのほり所はへだつれどもたがひに思愛のはある、とき  
なかりしを凡夫は淺まし、隔生即忘とて胎内よりうまれいつるときくるしみよ過去の  
りさまをわすれていかなるものか今人ようまれ來りしやら何としたる因縁あよつて親子と  
ありたるやと疑へもしらす少しの利欲に目がくれて人をころしつんざきて又それ敵をも  
どめ切もありさらる、もありまづ未來までと遠き生あるひの口論して人を切たり打れたり  
したる事は聞かよばれん其如現世は修羅道のせめをうくる事は切も淺ましくかあしき事  
あらずや扱未來の事は諸經よ多くといて曰殺生のつみよく衆生をして地獄がさちく生に  
墮るもし人中よ生れと二種の果報を得一ツよこたん命二ツよて多病金胎經には殺生のもの  
は號喚地獄と落と説き因果經よは切ころすもの死して刀山劍樹地獄の中に落ると、さてつ  
るきの山よ追立られてまた身をさかれ血よひせびてわらゆるるしみをうくる事其かすつ  
めるよつもりつくされず

○北野邊よて十二三ばかりの童女の菜つみて居けるか俄にひれん死に入ける處へ一休通りか  
り立より見たまへば四五尺ばかりなる蛇のひかりけるを和尙杖よてはらひのけ童女を引  
おこし子細をとひ玉へば只今こよ若もの、來りてそこにふせく仰られて其後むたいよ  
引ふせられひが何とやらん頭の上よりをとおそれおろきたるふせいよて左あがらよりものか  
そして其まよげよりたまたまありとかたる一休ふしきにおぼしめされしが髪の元結をとかせ

て見玉へば尊勝陀羅尼の書たるを引さき元也いよしたりける是に於て近うかざるぞふし  
ぎなれど和尙あるとき且那方よて此事をはなしたまふ去程に此尊勝だらよの功德よりわた  
の命をたすかりたり扱こそまもりといふものはもつべき事なり

○扱爰より一休一大事因縁の御工夫なされしとき諸且那あるいは御友達兼毎日とむらい來まして  
さまたげとありければうしましく思召て御心地ありしとて一及ん人に出會たまはず皆人こ  
ろもどなく折々御見舞侍れば御長髪ばうくとし玉いて何とも色みへず御惱とのみ仰ら  
れける且那を先として御知音衆もよりあは是は氣遣はしき事ありと、さの名醫を入かへく  
掛まぬらせほいたとけいはいうにと聞ば醫師やされけるは御脈はいかよもよし不審ある御疾と  
ぞれもぐやけるあるとき且那知音衆寄集り此御あやみの様子といかさまよもしつ熱の病と  
い見へぞ若き御僧の事あれはもしや懸おとをあられてかく思ひわづらい玉ふ事もやあらんと  
口々よやされけるがいやく人多く知りたりと思召はあかし給との事もや侍らんひそくに  
さ中の知音のみ二三人は舞てとさうかひ侍らは誰と名ざしあるべし、うらば誰人にても  
れ此者ぞもがかりあてをどか御本意をせげられぬやとあるへかりを頼母しく言合せてひ  
そかに三人参りたり一休出あひ四方山の物がたりすみて一人や出けるは此間さまぐの御療  
治よても御脈は常よかわらざと醫師あひのくやあり平生にさかばはで何とて心深くわたらせ  
玉ふぞや定て懸をなざる、と見つけ侍るひが目か有のま、に仰られよかあへて参らせんと

うちつけてやける一休いうにうれしげなる御面をせにて此上を何をか、くすべき此日頃懸  
わびてさてかくの如くやつれば、候なり能こそ仰出されたり何とやらん我等よと似合ぬ事  
よて侍れども各は日頃のよしみあればひとへ沙汰あくかあへたへ去あがら糸あらずなくよ  
心見だれてはづかしやそれと名をば面上よりのがたし一筆かきて参らすべし門外へ出玉ひ  
ておのくひらいて御覽じていそぎかあへたまらば我等が命をながらへておのく方へと  
其かわり能き道敷へやさんとておくの間へぞんと入一筆さかりと書て引ひすび彼三人あ渡し  
玉ふ三人よろこび御心安く思しめせとて門外へはしり出て扱こそやさぬ事はとていそぎ其名  
をしらまほしくて彼文ひらきて見れば歌よ

本来の面目坊がたちすがた

ひと目見しより懸とこそあれ

我のみう釋迦も達もあらかんも

この君もあも身をやつしけり

とか、れたり三人のものども案よ相違して横手を打て日頃の御心をしらぬ身があらぬわざを  
思ひけるこそおかしけれ今にこじ先ぬおどけよたばかられけるこそおろかおれまことよ有が  
たき御坊かを書にうつし木よささめるは多けれどわたもらの釋迦如來ありとおがまぬ人はな  
かりけり

○慶親に丁蔵坊といふ道心者ありけるいつの頃よりか首と蛇まとの付てはなれましまぐの事をなして漸々とはなせば又夜の間に元のとくよとひ付ことよひじり切たる坊主なれば日々よさがより京へ出て鉢こひけるは彼地をかくさんかためもたんを首よのけて見へざるやうして出ける此事ひとへ難義に思ひ其頃二尊院一休ありしけるにかの坊主たづね行わが身のやまずとくのかしくかたりければ一休も玉いかさまそれは女のしうじやく成べし汝是より高野山へ上りゆへさるあくば退く事あらとと教へ玉ひよろこびて高野へ登りまよ不動坂よと彼地うせてあし了意いよく有がたき事と思ひ高野山二三年も住しが今は早地の事も打わすれ過しふる里のこひしさよ又さがへかへりしが二三日は何の子細もなかりしよ又夜の間に彼の地まどひ付けり其ま、高野山に住ならば彌めでたかるべきも何ぞや古郷へかゝり二度難入るわふ事定業の程こそかあしけれ今坊主のすみしむと蛇寺とぞみなすあへり

二休諸國物語繪卷之二畢

二休諸國物語繪卷之二

○一休旦那衆二三人同心して東山邊へ遊山へ出たまふときしも春の中ばにて梢の花さい中よしとこ、かしこにゆさん多しする片はらよ五七人うちより手を打、さおせりあがりて大笑をしてあそぶ何事かおもしろかりけるとさく所は尻をひりておもしろがる旦那の内一人のややうあま酒にてうじ何のそれは尻がおもしろかるべし一休やさる、こいやおもしろきことをわりなりよく、昔よりおもしろき事なればこそ頼もおもしろのゆるべやあらおもしろの春べやどうたふぼと扱は、るのへのおもしろさも道理とすされき

○一休和尚いまだ十二三歳のころ師匠粘つばを一ツ持てたゞ一人ある小僧いさ、かも喰せせして汝是をかりよもくふべから申もし是を子どもがくへば忽ち死る毒なりといふてひたもの我ばかり食ひては取置る、一休おもてる、は哀れ毒にもせよ死るとも師の出られおばくふべしと思ひて待ける處は折ふし師匠用ありて出らる、一休やがてさがし出し細より取あろしさまお打こぼしあたまへもさる物も付ける日頃くひたしとおもひけるま、に先二三ばいくいてあまつさへ師匠のひどうせらる、壺をうちおとしまぢんになすかくする處へ師かへらる、は一休しまぐとなかる、師何事ぞと問る、されば大事のあめつばを打わりたるあり定めてはたづねのときは何ぞかへしとおもひ命らまてもよしなし子どもが喰へば死ると仰られは

せよ一盃たへ候得とも死なせ二三盃たへつれども死なれずあたまたにもきものにも付て死んど  
 ぞんじ候へどもすべてしおれすとの玉へば師の坊も言の葉なくてうちむらひてぞ入たまふ  
 扱腐蝕の穴をおはぢまやさう一寸の虫よ五分のたましいと申事の候鶴鷹の逍遙を好むもの  
 は死して鉄錫地獄の中よ落て雞をころし卵を煮焼するものは灰河地獄にしづみ錫錫獄中よ  
 落て豆をよるとく尖石ぢごくよいつてうつぶしよ熱鉄の上によし其せあかに尖石をのせ石  
 の中より猛火さへはとばしりて重くして熱きといふばかりなくなたへがたし皆これ殺生は因  
 果なり此身を請るまで鳥類肉類をころすも同じ凡血をふくみ氣をうくるもの皆これ靈地  
 づせ、あざのも、は、づき迄とぐく死をおそる、事をしつて人の足おとをさ、て斬刺も  
 ちやつと聲をやめ蚤のやうなるちいさき虫も人よとられじと、びまわりくもなごも空に家  
 つくるをうち落せせしんだ顔して手足をちいめすくみたる氣色も命を大事とするゆゑなり  
 大唐の交抄といふ國の實けんする人貞觀年中のはじめつかたつとめをやめて樂々と隱居ま  
 てゐられしが此人自体かゝ魔符がすきにてひたと犬をころさて三四十の鷹の餌よかりれし  
 が有とさふとちりげもとよりつうと立るやうよ寒くなり大ねつし頭痛がしてくるやう正体  
 もあくらふしあやみ皆醫術も及ばざりしよある夜人しづまりてのちまだらと赤きしろき  
 犬五疋きたりてとかく其方が命をとらではおかぬと五疋に取つさせめけるとさ此人おもひ  
 當りて汝を殺せしん家來通達が料あり我はころすとといへば犬の曰通達はそのたの差國に

てころせり余の人の仕業はあやせ我等すでお他の食を盗ませ門番のあてかひを喰ひて命を  
 つおく何のあやまりあつと殺し玉ふぞ此詞よつまりてしからは汝らがために後生を吊らは  
 んといふに四ツの犬は合點せしに一ツの白犬頭をふりて曰我すてよつまなきよころさる、  
 のとちらぞ未だ死もさらざるよ生あがり我肉を割れしくるしみ其どきの怨念心肝よそま  
 れきて承引せすこれを四ツの犬あつかひていふは此人の命を今とりたりとも我々が命か  
 へる事おしと思へば追善ばだいを祈り玉は、まことに苦るしみをのがる善根あらすやと理を  
 つくしていふよ心をやはらげぬるとおもへばよまかへれりしかれども猶手足をうごかすと  
 かぢはせ夫より約束のとく犬のためよ追福なしたるよ此病たちまち平癒したる事もあり其  
 外巢をかたふけ宿鳥を射る雛をかりさる事備敷よもいましむいんや佛道の大慈悲門よか  
 むていましめさらんや空とかけける翼地とはしるけたるの水にすむ魚子をあはれむのころ  
 人より切なる事ハ子をもつ鯨といふ魚を追かけて三尺ばかりある輪のやうなる物よてくし  
 くど突とさきと母なるくじら子の脊中あひかさありて我死るまではつうれて終り子をい  
 ださあから釣鱈のとくなる聲を上げて鳴はあれずさくよ不便なる事いふ斗なしこれ畜類の子  
 を思ひその身は死ぬるとても子をばいとよなるよ人間よ生をうけあがら己が子を尻の下よ  
 しきあるひと殺したるは世話よいふ熱火子にはらふとは此類のとより然ば畜生と人にま  
 まれり



○あるとき白河邊に住ける桑門は名譽なるのる口の人侍りけるが、一休のかる口なる事をき、よびていつぞは行て難句をしかけ心見んと常々心がけられけるが不斗おもひ當たる趣向ありければさらば参りて御知人よもなり楮一句して見んととるく、と白河邊より紫野へとぞいそがれける折ふし一休も庵にましくて御知人とありどかくするほどに内々たくみし一句の句作も出来ければ彼僧やされけるはうけ給り及し御かる口を何にても一句遊せかし何とぞ付て見侍らんとすされければ一休仰らる、と客發句よ亭主脇とこそすせ先其方あそばせとありしかは内々たくみ置し事なればさらばすて見んとてあん句をこそは出されけるが此處は何とすす所ぞ一休ひらさき野と仰られければ

紫野 丹波 近

とせられければいまだ息も引入ぬまはや付られけるはそなたはいづくの人ぞ白川のもの也と答ければ

白川 黒谷 隣

とあそばしければかの僧肝をつぶしきさしる六ヶしき章句なり一句のうちには二ツの色字二ツの所の名いなるひやうたんの川ながれなるかる口も少はしはらこふらとし玉ふべしと思ひまに貝とる海土あらで息もつきあへまぬたまふか、る名對ある上と、ぢやくはしとて空うそふひて尻をうらけてあけられけるとあり

○又書書の土佐守の内々掛物の書を二ぶくたのみさる人ありしが終まかきてつかりさす彼人心せさて直よ土佐守の宿へ行てすければ折ふし太鼓うち殿にのあらねどひる寐してこそ居ければ彼仁つねぐしたしくかたる中なり内々たのみおきし事なれば引すり起しか、されける土佐守ねぶりまたえすたとひ一夜忍すとなりとも晩まかきて参らせんとておきすしかれ共又晩といこば明日の川の瀬瀬と心のわりもやせん世中なりひらよといふよ是非あく筆を取くるくともまはしとけかつととりさつと書てこれくとしてふせりける望み足りぬとその書をとつてうへりひねくりまわしてよくくみれ共さらは何ともしれそ水をかきて其中よ一筆ぐるくとしたるものありさら見分られず余り合點ののされば土佐守方へ持行何なるぞと問へども我等もしらせといふか、る書をもつて何かせん引やぶらんとおもへども三國一出来たりとやせん角やせんと思ひけるがいやく一休和尚と腹をこひて掛物とせんぞといふまき大徳寺へしり行和尚やけるは此書は土佐守と書しひがさらよ此水中の物しれせいかい御覽あれとすければされを何とも見へねども腹がのぞみあらばしてまゐらせんと仰られければ忝なしとて贊をうふ一休筆とりて

水中は物ありその一物をとへば書し番工も

しらす持ぬしもしらすを賛する我は猶しらす

と遊しければこれを見る人さく人毎よさても戻すくなる御心ばせや無二なし三國一の掛物也

るべしといひしが今もあつて其うけるのたゞ人の手にあらずとかや  
 ○或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ貴賤群衆の見物ありけり法事やみてのち其寺の僧ら  
 かのまへに香花をとりぬけるよこびたる世俗二三人羅漢を見物去居たるが余の人の退  
 けとも此仁一人つくぐとあがめりて傍の僧は問ける此五百羅漢一々名こそおはすら  
 んは僧はさだめてはぞんじわらん承りたしと申ければ此僧はたゞ三尊の外に一佛も名をしら  
 ざりければ何とも、のいこそして方丈のかたへよげ入ける折ふし一休行合せ居玉ひて何事な  
 るぞと問玉へばしかぐのよし申されける一休のたまひけるはいらざる凡俗のものがめだてや  
 かくて慈もあらざる事たれうは愛侍んやされと望あらば言て聞すべしとて羅漢堂へいざな  
 ひさらば一々とい玉へ真中なるは釋迦ひにひだりあるは迦葉右あるは阿難さて次はと、へば  
 南無さんど其次はと、へばそきやとや其次はと、へばはらこちたご一々れんげ呪の文にて  
 答へ玉へば五百らかんりさて四百千羅漢をとる其何うは答へ給はざらんたんとく問ばさら  
 くと答へたまひ凡そ百ばかりもといひしが此俗人さて和尚はよき御覺へかあと申ければ初  
 尚打わらひさもあく候いとけあきより一卷ばかり中よて覺へて候へと仰られければ此俗人  
 心付取入てりへりけるとありされば時おとつて頓作なる細心入とさく人感じけるとかや物と  
 問て用はならを覺ても用はたらぬ事をばいはざるよまざるめてたまよしなき事を問てあやつ  
 くれけるぞすべて羅漢のみよもあるべからせ

さて殺生を止るべきのはなしあり楞伽經に曰佛衆生をみるよ六道輪廻しおあじく生死よあ  
 りてたがひよ相喰くらふしたしきものにあらずといふとなしと説れて先祖の祖父祖母いか  
 なる罪業よよつて今嗣どうされ伯父坊がくじらふありて來やら兄弟があびさこよ成て來て  
 看よしらる、やら凡夫の眼うらはしらぬ事なり出家たるもの肉食をたつはひとつはこれら  
 のいはれまよ不淨なるもの殺生よも當るもあよこねどの事あり必あじはひにふけりて  
 彼魚この肉をころしてしてやつたらばと思ふ心のおこるまいものでなし此ゆあよいましむ  
 ると思ふべし扱今の經文のとく六道でんあのうちは生とし生るものしたしきものでないも  
 のなしといふは彼の般刺土西伯をどらへてひそかに西伯の子を殺して身をこまやかあさ  
 りくだき表てあくやしよ西伯思て是をくひてわが子の肉といふとをしらす紂土大ひまの  
 ざけり笑て誰か西伯を聖人といふ我子を喰てしらする事といふく形道さかんありと史記  
 の文よあり是を合點すれば此西伯は聖人よてしうも子は生をまかへぬ肉をさへしたしきも  
 のとしらす我々は愚智の凡夫またくらふ鳥類肉るいも生をうへるものあれば正眞の母親  
 が生かはりて來たるぞもしらす宇治拾遺よみ圖よりまれかわりて來る人ありといふ事をか  
 ける近頃近江國に鮎よ成てくる人もあり紀の國よ人の親たるもの那智の犬にうまれたるは  
 なし其外かち双紙よもこれらの證據多きとるこしの書よ引てすばこれ一日か二日  
 にはやつくされぬはと海山よあるとありかやうにすせば向後常住しやうじんをなされと魚

類でもくふ事あらぬやうにやと思しめさんかさまてはなま是はたゞ經文のあらまをすの  
 じや肴らうりかもつて参るはしんだものなれば此方の殺生にはあらま去ながら因縁このがれ  
 ぬほどに只みづから手は網をはり釣をたれて答さきものを殺し玉ふは御無用此わかちをよ  
 くく合點してなる事あらばうまい事して人にもふるまひ参るがよし、かし出家たるもの  
 ・徳利よとじや子を入たる、い、かなるいひわけあるも存せまかくす愚僧もしらす惣じて  
 畜生のかすのまだある事五行大教といふ文あり羽のこへたる物三百六十其中よかしらハ  
 鳳凰毛のこへたるもの三百六十中にきりんが司うろこのあるものが又三百六十龍がつかさ  
 をす甲のあるもの三百六十龍が司稗あるもの三百六十人間がかしらあり又ある經に畜生  
 不同あれども約めて三種あり魚鳥獸あり是以て無量あり魚よ六千四百いろ鳥よ四千五百  
 品獸に二千四百種ありと説き正法念經よハ種數不同よして四千億ありといひあるひハ金翅  
 鳥尾頭の間長き事は八千由旬兩のつばさ横三百六十万里に羽うつ其飛どきは樂天の雲のと  
 しと書跋難陀龍王は須彌山をまどふ事七めぐり摩竭大魚は長ク三百由旬七千由旬是莊子よ  
 かけり鯨といふ魚なり少きものハ番蚊虱人の身の毛の中に住む八万の戸虫さて其外ハ山よ  
 住川に住海よ住里よ住土よ住空よ住むるる小虫をねらへばくちあど又かあるをふくし又  
 を焚くしり猪の鹿よとられ鹿また狩人ようたれ強きものは弱きを伏しまたみぢかきものハ  
 長きよまかれ呑だりのまれたりくひれたりつさめひさしめひかみめひていかりあかりを

かまね苦しみにくるしみをまじ幾度か死いく度か生れうたちをかへて苦惱をうくるものは  
 何ぞ現世ハ過去の業因未來また現在の惡心より惡所にうまれわれと我身のところをよく分  
 別ありて少なりとも惡心をもつまじ人事いはじ物の命をとるまじ何れの宗よ取つめてあり  
 とも未來をたすうりたしと惡良賢よりしんぐをるやうし是非この度は此五道六道の火宅  
 をのがる、やうよひとへに佛力經力をたのみたてまつると一筋に思ひとりて如來の大慈大  
 悲のさづかますがりたてまつらばやうやく憶劫よもあひがたき身を取はなそと又もとの三  
 途よかへるはどよ日夜心得のある事ありたい安心決定が大事の所かならま忘れ玉ふを又殺  
 生よついで鉄輪地ぞくの糞尿地ぞくの野狐の身うくる事何のかの酢のこんよやくの午房大  
 根のどすべき事あまたわれどもまづ講釋はこれよとめませう

○去るあまこびたる男一休のもとへ書を一羽もちていかよ御劫このすいめは生か死かいかん和  
 實ひと答へたまふ此ものいとまもことささりけり此心の生ありといはゞ殺すべし又死ありと  
 といはゞ放ちやらむとの事かしらま一休其後かれが方へ行玉ひてはいり口のしきるをふみまた、  
 げて亭主くよとばれけるどま亭主出ければ一休此數居を出るか入るか居ひたまへば、主  
 あよの返答もいはずだ、手を打て笑ひしとなり

○又或とき一休かつら川をわたり玉ふよ何どかし玉むけん川中よて倒れ流れたまふよ折ふし川  
 ばたよハ人多くあつまり居てこれくといひながらたれひとりわけんといふものもなかり

しうば一町ばかり流れて幸ひ川杭より、りやうくまであが玉ひしかば人々よりつとめさ  
てく御坊と違つよき人かな何としてあがられけるやと、ひしうば一休打わらひてされば我  
川へはまりたればこそあがりたり上りたればこそ生たりさまで珍らしき事よはあらざりけり  
とすさるれば人々聞てさてく口がしこき坊主うあどいつと笑ひて打過ぬ

○爰は山里よ或もの、つまさる男とひそかにかたらひ互に情よやくちぎりあさかりざりけり。  
或夜のむつとよいつがいつまで斯はしのびあんやいかにもしてあつとを殺して思ふまゝ、又契  
りなんやと互うちどけて談合したくみ出して或夜男は酒をしめてあいつ臥さしめ夜ふけ人し  
づまつて後まをどこと二人してをどこの頃に針をもちてころしさて家よ火をかけ焼死たる体  
よしうたがふ人もあさやうにもてなし死たるかばねにとりつき聲をばかりよあささけびけり  
折ふま一休通り合せ此女のなき聲を聞き不思議のおもひをあしたまひてあたりちかき人にな  
づね王へばしかくどかたる和尚き、玉ひて此女のあき聲はおそれたるてうしよて更よかな  
しみの聲よはあらずふしきありといひて通り玉ふあどよて今の修行じやと人間にてはあるま  
じむかしよりいまよいたるまでけんぞん放逸の在處へは弘法大師のきたり玉ふと言つたへり  
定めて大師さあありとおぼえたり聲ばかりき、てそれぞどあかし玉ふは存代ふしぎの御僧か  
あどてみあくかんじけるとなり

○世よ一休和尚の天下の活僧なりしとて諸宗ともよまおあべて尊びけるあれば何れの上人長老

ものあめ給はずといふ事あしあるとき黒谷へ御参りありしよ寺中の人々一休を見奉りやける  
は今の世よ活佛と人ごとよ言るはこの禪師なりよき折からなればいざや當寺よ侍る善導法然  
の書像よ贋をたのみすかの念佛無間とてあさける日蓮宗よ見せて禪宗の佛心宗だにかく此方  
の祖師は尊み玉ふと高言よせばやかるき僧あれば定て贋し玉ふべしとすければおのく此儀  
しかるべしと相談去てやがて一休を方丈へ請じす件の書像をぞま出し贄をたのまけるに案の  
とく易き事なりとのたまふもあ則現と書像を御前に出しければさうりとひらき一覽あり筆を  
とりたやひ先善導大師を贄していわく

未法出現名善導  
濁世末代導師一人  
則是彌陀化身也  
一切衆生易往生

法然上人よは  
傳聞法然活如來  
安座蓮華上品臺  
一 枚起請最奇哉  
后入道同愚痴蠻

と即時よあそばしければさて社とておのく大きよよろこび侍りて此兩佛に淨土宗としてか  
く贋をいたさば家の事なれば手裏なりとて又日蓮宗があさけるべきにか、るうれしき事こそ  
あけれどうの贋を日蓮宗よ見せて大きよ威言をぞやける其頃ととも日蓮宗と淨土宗とは中  
しくて犬のいがむが如く牛のつさ合がとく眼をいからかしければ日蓮宗かの贋を見て大きよ

ばらを立て一休をそねみよくとける其中一人サけるのいやく一休の御心ごものよかざりの  
あき直る御事ありいざや日蓮大聖人の像をう、せ賛をこひて見んあれはどの褒美ごあるべ  
しとサければ尤しかるべしとていそぎふためきて番をか、せやがて和尙の庵にもち参りて蹟  
をたのむよしサければ元よりかるき御僧なればやすき事とのたまひ彼の書をひらき御覽じけ  
るよ此像のさても少くかきてうそ黄なる衣をさせけるよと笑ひたまへば人々サけるはさんい  
いかよもけつかうよ大きよか、せたく存いへども實は先日浄土法宗然が蹟をじまん仕いぬ  
口をしくひひてとるものも取敢す先ちくりげよか、せて参りいひそぎ蹟してたべとサせば心  
得たりとて先の法然の蹟を所々を直して

傳聞日蓮活如來 香座則是妙法臺  
尼入道同愚痴聲 一遍題目殊勝哉

となされ其奥よ

ぼうそく小坊主まめの粉にぬりばうす

とぞわそばされけるとかや其頃また永觀堂の住持黒谷の蹟のよしをき、てよき寺のかうかつ  
ありと蒲山しく覺しのしかはどかるき御僧あるよ何が此方にも蹟たのみサさんどてまづ一  
山の人々を呼よせ談合せられければ其中一人サけるの何とサまでもあるまじ先宗の祖師あ  
れば常寺も傳る半金色の善導大師の書像も蹟をたのまれよとサせば各々サやうげよく是は

代々常寺の重物なればこれ増したる物あるまじさらば其方便僧も成り玉へとて彼の半金色  
の善導大師の書像を持せ一休へまのり一休は對面してサけるは黒谷の蹟のよし承りあまりよ  
ざら山しくいひて是まで参りていあこれ此方の善導も蹟をあそばしたべとサければそれこ  
そ安き御用とてかの書をひらき御覽ありたちながら一筆さらくどかさ玉ひ元の如くした、  
め使僧よわたされければかたじけあしと誣んでいたいさいそぎ永觀寺へ歸りしかぐのよし  
をサければ扱もかるき御僧かな本望とげたりまづ一山をよびよせ讚拜見せばやとてやがて人  
を廻しければ各々よろこびとしり集りさてかの書像を方丈にかけ拜見しければいかにも大文  
字よ歌一首あり其うたよ

くろからんころものすその黄よあると

善導大師はこをたるかひ

とあそばしければみあ人をどつとわらひ興をさます人もあ感またあたる人もありしう今のよ  
まで傳へて天下よ一幅の名物となりけるとかや

邪淫戒といふ事を御はあしサさんさても月日のたつは手間のいらぬ事入日かといもへば明  
てひろよなる又ハツヒツの鐘之諸行無常といひさぬるを余所に間事うあどて此無常といふ  
事をさへひとつ心よわすれねば余り後生よ遠き事となけれども世々ありくと千年万年も  
あるべしと思ふよりあらゆる罪業をつくる事なりよう氣を付て見たまへ目と耳よふる、事

一ツとしてながらへ止まる物でなく人の死別れ行かざるのふまで語りなくさむ男女今日とい  
 なしくなり願死をものといひあがらる思たもるやうのとは世間に多き事あり花のらり木の  
 葉の落ち露霜のさへ雲煙の行へ水のながれのかへらぞ池のこかあく淵わせになり或ひは山  
 もくづれて海になり川もくがちとなり長明の方丈記をみれば地震火事は幾度か幾千万の家  
 居もめつしあると家とをあさぐばの露よたどへて書たるとく一物として常住なる物より  
 さくる物ごとみな無常なれば我命もたのまれずしかればうつかりといつも十三月と思ふて  
 くらす内よかの無常の利鬼がせきたるとき俄にあはてさばきては陰をい事ありかねて臨  
 終の用心が第一とや談義説法も明日の日うあると思ひおだんして夕をまたて死たるときは  
 悔ても甲斐なき事とつねく合点したまふがよしあふがよしある人のうたに

あすわりとおもふこゝろはだされて

けふもひなしく日をおくりけり

といふにおどろあれよしれぬ人の命談儲をさくもけふが過ぎりなるとおもへば一事を聞  
 も大切と思ふ道理あれば此心得がよしさて談義はなしうちついで大熱經の文の中の種  
 字よ心を付ておしりました昨夕のは彼の人を殺し子をころせし事よ付て殺生のひくいをす  
 ましたお逆もの事に殺生戒よりついで五戒のすがたをばおしませとの御望もあ今晚は邪  
 淫戒の所大ていあらくすませう惣じて戒律よついで五戒八齋戒二百五十戒五百戒十重

禁戒四十八さやう戒として異類異形のいましめあはは梵經四部律等よあまたある中に儒は  
 五常をもつて國をさめ佛法は五戒をもつて惡をやめさせん其こゝろはせばかなじ物よ侍  
 る先此邪淫戒といふ文字はよこしま淫をおかすをいましめらる我妻よあらぬを妻にする  
 事を邪淫かいとすさるはどよ此戒を在家戒ともすあり出家よといらぬものうと思へども出  
 家よもさや〜あり是をたゞみの身のうへと思ひ玉ふがよといつての事妻といふは女  
 の手前から男を妻といひ男よりも我女を妻といふて男女通する詞なり鹽屋判官が妻の方へ  
 ある者文をつかこしけるに女の方よりの返事のうたよ

さなきだよおもさがるへのさよころも

わかつまならぬつまあかさねと

とよみこしたる何れもあはへのあると此やうある不義の事をするもあにむかし今の代ま  
 でもあらぬ死をするものあまたあり何國も同じ色の不義京大坂よは殊に繪草紙よ賣る、  
 ものあまたあり現在よ恥とさらすは淺ましきとなり扱未來の事と經文の邪淫の罪業生をし  
 て地獄が畜生にちらもし人の中よ生るれば二種の果報を得る一よ婦貞良あらせ二にこ  
 二の妻相争ておのが心よしたがとせと説玉ふはじめの婦貞良ならせと今生よて人の女  
 房をぬすみたるもの後生にたまく人間どうまれて女房をもちても其女ひたと又余の男に  
 あひて我心にしたがひととなりそれおあにはをたて、又間男めをおさへてくつてと心

意のはひらをもやすやうなるを婦貞良ならせといふ義ありこれみお報ひやうのしなをわ  
 ちはすもの二に兩の妻相あらそふとは或の本妻の手かけをねたみ妾と本妻をそねみ針をう  
 ちたりどくがひをんとしてそねみねたみたるは大きな禍むとなるまとも國に讒言の臣下  
 あれば君かならずはるぶどと聖人のとは下々多きもの之夫婦いさかいなり大きな聲を  
 してつかみあふやらなくやら敷がねをはなよのけて後どつかしきとをわすれて常はかくす  
 事もわめきちらしあたりはどりの外聞も方便もかへりみずとがもあき錯をわるやら釜をな  
 げはるやら道具家財たまつた事あり何事うと思へばかのりんさより事おこりての騒動これ  
 は、やどてもうんよんもせまじ又そはれる時宜でもあるまじとおもへばいつの間よやらあ  
 き寝入してたつた一夜のうちよ中直り何の氣もないかほしてあるせつうく人のあつうい中  
 直しのときは角もとめるさつ相まて明朝はそれよ引かへ小ばなしあるとさてくおかし  
 事と人の指ざしをして笑ふをしらぬといふ其人もあのが非は見へぬものにて何國の夫婦い  
 さかいてもみるにたる事是等のものいひ口舌があれべ面々家職よおこたりていかはと損のた  
 つ内腹のつぶれやらしれず然とをたび有ゆゑに終家のはるふるさいさうくといつれも  
 おもひあへりあるべき事也それまでは遠い事先此邪淫戒といふ事天下の御法度あれば道  
 を心ざし義理をたてんと思ふばどの男は念もあは是等の非道とせぬ事じや一心さへみださ  
 ねばそのまよひのやむといふとなしをすさん

○正月元日より三日の元三といひて歳のはじめ月のはじめ日のこじめあれば一天四海の人々の  
 かしこきも思あるも愁あるも愁あきも貴をいやしきもいはむよろこばざるなく屠蘇白散あは  
 せぬろこあやとも鬚につけ御鏡をのりるとて尻もちありとををつきてそれくよいとひませるあ  
 りさまは誠に昨日よかわりたるよはあらぬとも空のけしきものどやかに霞わたり大路のさま  
 松立わたし家よは長き代のた先しとてしめ細ひきめぐらし昨日夜の半過るまでは人の門打た  
 るきて何事あかあらんことくしく足を空よまどひたるもたゞ一夜あけぬれば引かへ心もゆ  
 るくと又晦日の来るべき心もなく野邊の小松に千代萬世をいはひそめいつ死ぬべきものと  
 はあしに万の事をいとおそれ朝の露よ名利をむさぼり夕の陽よ子孫を愛し蟻が茶うすをめぐ  
 るかごとく同じ事をぐるりくと五百七十年七まがりといとひて世を秋風の心は霞ちりはども  
 なき人心を一休おかしく思しめし誠よおろかあるかな朝がはの日蔭待まもさかり久しき花  
 ながめかけらうの青天に羽をふるひて樂しむ間もなき世中よ義に宿ぬる正月とばた、時の間  
 の煙となりなんと打見るよりいで物見せん人々よと葛原へ行て御鏡をひろひ來り竹の先あつ  
 らぬきて正月元日の早天よ洛中の家々の門の口へこのとくくと彼されかうべをさし出し御  
 用心くど歩行たまふ昔人いまはしくとて門さしこめて居けるより今よ正月元日と門戸をさ  
 しけるなりといえりしかるあ一休を見送らせて或人のいへるは御用心とは尤しどくありたど  
 ひいはひうさりても終よのみな人うくのとくされを世の習よてかくいはひよるこよ折し其

むくつけきさしやれかうへをば家々へ出さる。事のほちがむならまやとやければさればよ我  
おいとひて此されかうべを各よ見するあり目出たしといふといひの心得けるぞやむかし天  
照大神若戸をひらきたまひしより事おこるといへども此されかうべより外よ目出たき物はあ  
しとてよめる

にくげなき此されかすへのあなのしこ

目出たくかまこれよりはなし

是見玉へ人々目出たる穴のそのこりまは先でたしとこそいふあるぞ皆人かくとりのしるらめど  
さのふも過し心なふひよけふとくらしてあすか川の瀧瀬つねあらぬ世也とは目に見ぬはしよ  
風の音にもおどろかぬ人々も用心せよと思ふてたゞ人は是にならねば目出たき事は何れもなし  
とのたまへば諸人これを見てさても野さ聖とておがまぬ人はあうりけり

○一休のもとよ犬あり或とき五ツうめり其三ツの子のうちひとつを親いぬよくみて乳をも自  
由よのまますしていがみくひよせけり下人ども此親犬をにくみうちけるがある夜和尙は夢よ  
つげていふ我身は前生にてあしはといひし遊女よて侍りしが五人の夫を持ていひしが四人は  
とにあさけある心ざしにて淺からず思ひしが一人はいつはり心多くして却て我をわづらひし  
くせし事たびく侍りしうば危にく、思ひながらうち遇ぬ今此五ツの子はかの五人の夫あり  
四ツのむかしのなさけ深さが故よ乳をのましめていとをししく思ふ也一ツを我をあやめし夫な

れば乳をさへのまさん事心にく、いひてうく雷りしありとこまやかよ前生の事をありくど

かたりしと一休旦那のうちへとなし玉ふと也

○七條邊よ有徳ある田人ありあるとき佛事供養のつめ諸出家のサよ及ばせ乞食までもかくのと  
く慈悲をしけりあるとき一休をサ入しゆぐ不審ども尋ね次手に問ていはく何れをさして善  
としつづれをさして悪とするや和尙こたへていよく善悪かぎりあし只善惡をしらんとならば  
其よし惡をあすみあもとよあるべしかれに行て尋ねよと答へたまへば亭主尤と感じける扱  
和尙たち玉ふ折ふし雨降けれハ亭主暫く待て雨を止玉へとすは一休サされけるは

ふらばふれ降せばふらまふらすとも  
ぬれて行べき袖ならのこそ

と言捨て出玉ふ

○加茂河ちかき邊も五郎右衛門とすものありかれがうちへいつの頃よりか犬一疋来しが打ども  
さらぞある日人を頼み二三里外へやりけるが又歸りぬける此度ととらへうち殺しすつるよま  
た同じやうある犬来るときならを夢見あしければいかい心もどなくおもひ一休へ参りくだん  
の事を一々となしけるよ和尙のいはくもめく其犬よあらく當り玉ふなそれは其方が前生に  
てその犬のものを負つむにのへさせして今人とありいぬとありてこ、に來れり全くわたくし  
事ならねばすつるともころしたりとも業力の成なれば其家をはなる、といふ事あるまじ賢ん



かたうらふ家郷といふ人あり初若とて  
 経令のあそらひて去りてありあふ大角  
 ありてはのほくほくまんといふと縁邦  
 かたうらふで井と接として接と助  
 一月してふお果よりあふお果  
 てあつらひあそらのとほはあふあそ  
 まのあつらひあそらとてあそら  
 さんとあそらあそらあそらあそら  
 うあつらひあそらあそらあそらあそら  
 おてあそらあそらあそらあそらあそら  
 あつらひあそらあそらあそらあそら  
 あつらひあそらあそらあそらあそら



うしあひたぐばかれに米一二斗はきめてはひおきたまへ喰盡たらん時はかへるべし左なくば何ぞあすともかへるまじとぞ教へ玉ふさらばとて歸りて米をわたへ置けるよある夜の夢は汝われをなやます事たびくあり打どもころすともうせまじされども今はあの佛和尚に申しへられ我をはさくし事まんぞくせりしかれば汝がもの喰盡す事やうく一斗ばかりあり其間は我よつらくわたる事あかれといふと思へば夢さめぬ此者いよくおどろきさては和尚のよしよ少もちがとざりけりと猶々じひをはきこしけるに彼がいひしとく一斗の米あくなりてのちくだんの犬かきけすやうせよけりふしぎ成し事なり

初知恵にまよふ女意といふ事のゆもろこしは林茂先といふ人ありしが學文しやめれども前世の因果がいかにしては貧しくられしが其隣り大きな分限者の文もなる仁の女房わが男の不學あるを氣のどくがりかの隣りの林茂先が才覚よはれてある夜ひそか忍びきたりて學文のまををほとくと音づれたるよ離ぞと思ひてさしのぞけばとふしてこふして執心でござつてと袖よあまる涙をつ、みかねてかくさまよひきたり待るとふかく思ひ入るやうすよてくどきけるをたれぞと見ればとありの内義もとより器量も人よすぐれとよ金もちの興さまおれば我がやう貧なるものがこちら懸したるとも今どきの後家さへ承知すまじきこれかたじけなき事御意はななく下地のいやである事夢からつ、か最早人しづまりむたりに離をはばかるものなし明日の閑浮のちりともあれこれはじぎよ及ばぬところを

んと若ひ衆此やうな事があらばなんといやとはすされまじまの十人が十人ながら飛つところを此林茂先じつとこ、ろとまづめしはらく物もいとなんだがさそが學者といはる、はとあつて血はどな目をむき出しかの女房をさつとよらまつけ去とて其方は人であし妻一人もちて居ながらか、る仕かたの淺ましや天地がくつがへるとも道ならぬ事を某はいたさぬどとやく歸られよとまをふぬはたとたつるとき女房となみだをながし是はどよ事をつれあくもろへし玉ふかせめて一夜ありともとなげさてたらのかさりしを林茂先のしり出て李下に冠をたいさき瓜田に履を直させとこたへまたあま先しきくどき事をとて小がいあどつて引立かへしければ力およばせ、とぐとたちかへりぬ此林茂生は其明る年つひよ官位に經立り榮花よさかへける道をまもる人のこ、ろはいかにちがふてゐるでなにか今どきの物語でも道を聞ても耳と口とにおぼへて居ながら不義なる事よ結句もんもらある男の律義あるよは劣りて悪事をするがちあり是を世話にいへる論語よみのろんでしらすといふ此とならん皆さまかたも朝晩口でと結構言せられんかそれは世話しりのせはしらせといふ物ぞかし面々の身のすへと棚へ打あげおきて人の胸といひ安いものでござる又利口さふ中拙僧もこれは同じ事あり人の身の中をかしてひもの上下二まいのくちびると舌ばかりおそくても大事あひ事心と身とよ先おこあせられよ此心か万事お通る肝要のところをござる或經よ人となつて他の女をぬすむものぞ鴨ようまる、と説玉ふと何たる因果有て鴨よ

は成ぞと、へは雛のきじにのといふのはめいへくは雌鳥を二羽づか、へて道をつたひし雄  
 といふ鳥と別て其やうなる事のきびしい鳥よて都はあひ田舎でと飼鳩といひていろく  
 羽色の見事あるをわつめて家を作りあらべ置よもし雄鳥のあをひろふ内ある隣の鳥留主の  
 うちによつとのぞくを見ると其ま、とびわがりて其男鳥をくひころすほどにせちがひ又  
 わが女房鳥もつ、さまわりせちがふといかさまとなり男鳥の、ぞくからは合點の行ぬし  
 かたといはぬ手それごとく少々よても其けふひなる事もならぬに鴨といふ鳥は池やあせ  
 道よいかひ事ひらがり居るよ是は誰が女鳥これたれが男鳥といふともなく常住ながれを  
 たどるやうに一日に男鳥の十羽や二十羽といふかずをしらす男鳥もまた女鳥の五羽も十羽  
 も、ちてあちらこちら相逢ふこれ此身になるもの何成とおもへばかの問男したるもの  
 女房をぬすみたるものがみな此鳥るいよ生る、としりたまへ此やうおももの生たくば好色  
 のわるひ事を折角して思ふま、よ不義をなされよ御満足ではべらん誠よわざかある樂みに  
 永劫のくるしみをまふくる事はあまよ思かある事なり過たる事かへらす今より思案し  
 て見たまへ別よかこる事もなく刹那の淫樂よ現世後生をとらうしなひ苦しむといたましき  
 とど一分別して見やうなればこ、じやそれよ付去所よ男女より合おかしきけんくわせられ  
 たのなしをいふて聞せませうか先未來の物がたりを一寸いたさふ  
 ○或人一休は問いごとく人と死て骸おくおひはつれ其魂はどいまるぞやがさやうよてもあるま

じきこたましひが死なすよわらば骸はなくとも矢はり其ま、居て物がたりなぞもしさふ事  
 よてあるまじきか何れふしぎなる事よて我等が存るよは佛に成たるものはたのしみにはこり  
 て爰の事をば打わすれ來べき心は露もあるまじ又地ごとくへ行て鬼をもにかしやくせられ隙少  
 しもあるまじ又かやうはてもあさみのやらん世中よ安樂とて死したるもの、來てさまぐの  
 事をいひなぞすると承る何れ是はいかある事よていや和尙のいわくさればわれも其儀はし  
 りを候へども若きとき談論をちと聞たるが誠かうそかしらぬたましむといふものが有て  
 佛ども鬼ども成げよいそのくせものがあんなま王とやらんの前よて公事奉行の手よわたりしや  
 ばよて作る罪をくろ鉄く赤がねかとしらねども帳とやらんよ付ておき鬼に見せてまづ是程の  
 罪人なり急ぎ阿責せよといふよ色々の鬼どもが受とりてさまぐのせめよあはするよし、や  
 ばにて作るつみはどせむるといふさりながら毒藥へんじて藥となるといふ事あればさのみつ  
 みの多きもあながちよあげくべき事にはあらじと見えたりかくいひしどきは  
 作りおく罪がしもとはどあるならば  
 あんまの帳よつけどころなし

とあるとさきと鬼といふもの鈍なるものなり釋迦が一代の藏經はみお人間をいためんがた先を  
 りのらつらよくの釋迦のやいろくのうそをつきおきたまへりそれごと、へば一字もひと  
 ぬといひ玉へり又さふかどおもへばしものつさんの語にぞ一佛浄土くわんけんほうかい脚木國

土悉皆成佛さう木も佛にあるともいひあちこちとひた物は身ぬけばかりいひちらし人間と永代まよひの身よちかうしてありともおもへば又うたふも舞も法の聲柳はみどり花はくれあひあらおもしろのはるのけしさ

しやかといふいたづらものが世よいで、

多くの人をまよはするかあ

○去さしきの天井の蛇をかきておける其座敷にて酒を飲けるよ盃の中へ給のうつりしをのみてそれより類ひけりある人きたりてわづらひのやうをしかくの事よてそれよりかやうよわづらひ玉よしをさけりと問ふにかよも其通りありと答へければ或人のやさる、は左やうの事あらば何とも氣分あしくておさふしも是のみ心よか、りてわづらひいとも成べしさりあがらさやうの事は一休和尚へ行て子細を御たづぬあらばしかるべしとすさらばとて参りしかくの事にてかくなやみや也いかなる事にてひや和尚の御しめしに預りたくぞんじ是まで参りていとすければ一休玉いやがてしめしたまふ其語にいわく

まぼろしを知節敵は、うべんをなす一切のしよはふは皆是まぼろしな

り何あれバ水中影像をじつなりとおもふや愚也早くなんぢが自心をあま

らめよ

とて扇をもつて、うくことたと打玉まづ右のころまぼろしとしりをば方便は有まじ一

切もろくのなすわざは何事によらぞみあくらなり水のうちようつるふかげをみて實のじやありと心得やまひとぞるそれなるかある心あり早みづからの心を納て見るときは實か無かあらとるべし其心納るときとすあはち病本復すべしとしめま玉へば此ものやがて得通して誠よくくしめんするに天井の給のあるといふ事思ひ當りそれよりして心すきとありやがて本よくしけり何事も善惡の源をたづぬるときは心の一ツより生ると見へたり扱こそ三界唯一心とす(一)

○伏見深町の里に森本善兵衛といふものあり其内よつかゆる下女もどより邪見の女にて朝夕の飯の残りをむさしとて非人よも呉せして皆堀へ捨しに其ことぐに皆蛇とありてはひ歩行家内へ這入しかば家内のもの人々おそれいふ成とやらんとひし先さける其折ふし一休其近所へ來り居玉よしをさ、てやがて使をもつて請に奉りことによしをかたるお和尚きこしめし扱くそれは笑止ある事かな是は此身上のくづる、瑞相ありそをば全く蛇よていあるまじ皆飯の残りしを捨し勢ひあるべし其蛇をのこらせ、入てたきて見るべし必らぞめしとあるべしとのだまふさらばとて教よまかせ皆あつて鏝に入一休經呪をじゆし玉ひたかせたまひしふ成程されいあるめしとある此飯をの女よ獲らそくひ尽させよゆも獲るならば身代あやうかるべしと仰らる、とらつてかか女の女よくはせけるよ皆陰つくす事あらまして又うくしてすつる此下女あるときおのれが在所へかへるに道よて蛇よさ、れ死けり日を入していくはどあ

して天爵ありうせしはあそろしき事ありさるは必に一ツふよても喰喫したるわらば決して  
 おろそかすべからずとて和尙旦那方よて折々御物がたりあるを今こゝよしするす  
 さて男女いたづらの評判ありしを御ぞあしすさん此ころ町を通りたれば四五人うちよつて  
 何やらせんさくしけるを聞ば世中に不義をして浮名ながしたるもの、事を評判して一人  
 の男がいふやうは世も女はどいたづらなるものはある一人のおつとに定まりて居ながら不  
 義なる事をしたがるはもだんがならぬ世界じや七人の子わなすとも女に心ゆるすなどよ  
 ふいふた物といへば一人の女房はらをたていや／＼それのわるい了簡でござる男といふ  
 ものはどあさはかあい、たづらあるものはある我手前も女房一人もつて居ながら人の女房  
 をぬすみたがるは正眞の生盗人じや其やせに男の心と川のせは夜に七度かはるとはよふい  
 ふたものと云へばかの男らとせめていや／＼男と云ふものはおどけるも云ふて見るものじや  
 よ合点する女がいたづらものと云ふ詞の下よりいや／＼女の方から盗でくだされと云ふと  
 房がいつくよござるどふしても男がわるい、や女がいたづらものとたがひに大きあけんく  
 わになり其あたりがもや／＼にへかへりましたこれは坪のあかねせんぎよてと侍らぬのな  
 んば男が口説たとも女が合点せねばならぬ事なりたどへどのやうなよき男が火をくへ女  
 いへばどてくひはせまひが下地がいやでないから御意とよしとつひかちもあし事よあつて  
 するされべいひかけける男かひととりわるいでもあし女もまたあしく世の中にはまゝなるは

と律義ある男も女の方より文をせやりてくどきかゝるかあればそれも一うのよはあしか  
 たしつまる所はどちらへもうた付てきせ付られぬ二人ともあ悪と云ふがよき了簡どのふそ  
 の也是程になきとさへ二人で坪を明でかなのぬことかく互に心をひとつにしてまめし合せ  
 ねばならず千人万人の中でもせまひとあもふ事ハ我心ひとつでたしあみやすし此坪をよく  
 合点すればどちがよいわるいのせんさくはいらぬと思ひ玉へ然ども人よそ、のうされぬや  
 うよこゝろをもつものはまれある事ありみだる、心のうは氣あるは、ぢをさらす高いもひ  
 くいも身を持そこあひ恥ぢよくをもふくる事は皆此やうあよわき非義ある心よりあこる  
 事なれば若ひ衆とよく合点めされて大事なりとおもひたまへ女の心もちけうへと梅柳のや  
 さしき枝に春の雪つもる如くよは／＼とはのめき心の内は石金もかたくもち玉ひてうり  
 そめよもあだなるふるまひをせぬやうな化粧ものこしにも氣を付ねがよしとさる上つ方の  
 教訓の文よ遊またるが眞實なれども今どきは皆さのさまにして上はかたく見せ内心はよは  
 く心得るはひがどの第一じや女義に善悪のこゝろやさかせませう

○爰にのあしあり某とかやいへる人の奥方相果られけるよ今端のどきの選言にわれら此年中で  
 佛ども法ともしらすしてうく成はつるなやこども女はつみふうきよし後の世いと心もどあし  
 承ればむらさき野の 一休さまは今の世の達士とやらんいふある間我等が引導をば和尙さまへ  
 たのみ奉りて得させよと念頃にいひおきしかば妻子ない／＼一休の草庵へ参りて其由をぞく

と申上げれば其年まで佛とも法とも知らざれば大かたの事にてはうかみがたし去ながら我等が一句をさづけすくふべきなり水葬よせん間鴨川へつれ行とて其ま、座を立ち打つれ川のはどりありしがば其死人を出せよとて和尙かの死人の首は繩を付けひつらたげて川岸に立てのたははく

河ふねをどつてあふ瀬のあみまくら。うき世の夢を見ならはしの。おどろかぬ身のばかなさよ

とて川へざんふとなげすてはや一かへり玉ひける妻や子どもおどろきて御氣も、しやぞいなるうこの一句は江口をうたひ玉ふありか、る事よてはうかひがたしとてかの死骸を引あげ念頃よをさりてある寺の上人にん導たのみければ其宵よりかの夫も子もさましくよわな、き夢見けるは一休の御引導あてうかみしものをよしあき上人の引導よて引もとされて中有の旅よまよふに又一休さまをたのみて我をすくはせたまひきは夫子をも取ころし手を引て三途の川を渡らんとまをつくど夢まぼろしよ見へければ是はとおどろき一休和尙へ参りて其由をしかぐと申上げれば我よく引導せしよ又異人をたのみしゆあかりとてふた、びうへり見給はねバ親子のものさましくよあげさしかば扱も不便の事やとてうづみし死がいを堀出させま九加茂川へかたげ行川岸よ立て一首

大水のさきよあがる、ところがらも

身とすて、ことうかふせもあり

とてねはとしがひを川へあげすてかへられければ其夜親子の夢にありがたき御引導よて今こそうかみけるぞとて白雲うちのりて西の空よ行ければみあ人ありがたくぞ覺えけるぞあり

○一休和尙山姥のすこひを作り玉ひしときひえい山中よき人あわしければ談合に登の玉ふは佛あれば衆生あり衆生あれば山姥もありといたしける此次をいかいばせんとのたまへば彼人もさすがの人よて定て柳は見せりとなされつらんと有ければ一休さてもよく推し玉ふものかな柳は見せりと花はくれあひの色々切人間に遊事と仕らんとのたまへばさこそといひて興せられ誠に同氣相もどむる心さしいとてつつかしく思はれけるさてよき次手ありあ山の當社を拜みめぐり玉ひしに山法師ども是を聞いて一休はかくれあき能書なり何よても書てもらわんとて手よく硯紙を持きたりてたのみしかば一休思しけると聖道のあて字とてや定て文盲なる法師どもならんと何が書て取らせんといかにもよみかたき一句さらくと一筆よ書ちらして遣されければ一山の僧よりあつまりか、る能書の名僧此山へ来る事は後の世までも寶物ども成べき語をか、せ置べしとて其中の老僧のいへるは先より各かきてもらひけるは一字もよめず又爾も余りにみじかくて此山の寶ども成がたしいかにも大文字よて長く書てたべよみがたきと有ても詮あしいうにもよみ安き事をたのみ奉ると一山とにも望ければ一休のたまひける紙筆は候が中々古へ大師のあそバしける七八尺の大筆あり紙は何はどなりともつぎやべ



しとすなればればさらば紙つかせ玉へ御筆の通長くと大文字を書よくよめるを仕べししとぞ  
 紙つかせ玉へとありしかば何はどなりとも紙は御のぞみ次第とてひたもの長くつぐはどよ  
 えい山の金堂の前より坂本の人家までながくも紙をつぎければさらば筆をめんどて墨  
 たつぷりとよくませべたと紙へかき付て一さんかけて不動坂まで一筋にむかれてよめるか法  
 師たちとのたまへばいや何ともよめずといふ又墨つぎて不動坂より坂本まで一筋よこしり引  
 よひさつよめるか〜とわめき玉へば一山の法師たち肝をつぶしいや何ともよめずといへ  
 ば是はいろはのあさきのへたりよあるしの字なりながく〜とかきてよめやすきは是也とのた  
 まへば皆人興をさまし扱も聞及しよりおどけびと哉と一度にぞつと笑ひて興しけるとあり今  
 の世までも其しの字ひえい山の寶物とありて有けるとあり山法師たちも望し事あればいやと  
 むいこれの御作意とみを感じけるとなり

前夜すおさました女の賢慮の心のもちやうとすはさるるところよりうまれつさのうつくしい女  
 房衆がありしと亭主の留主のうちに行し入あつて内々笑顔よき内儀なればなるべき事と思  
 ひよきすささく〜とさげれと女房何とあき顔よてそれは忝なき御執心其うち折をわ  
 わせて御談合すべしといふよ男うれしさかぎりなく此上は亭主をたらかすまでの事と前方  
 よりひつまじくとさる亭主もまづしければ無心もいはぬこなたより金銀も氣を付て借あど  
 しげるよ男は其心いけと夢にもしらせ後日のため手形書すべしといつば彼の男隔心なき

賦にて合力とはあまりのなづりがまじしけれどた〜やりすべしとて金の四五両もつかはし  
 て二三十日も日かすたち男のひまを心かけてひそかよ内儀もちかづきせんとすたる事御談  
 合せんとすされたるは何と談じ合も今宵はとよ首尾もあしとしおたれか、るを女房うた  
 ちをた〜しされば談合とすは御ぞんじの通り私も男をもちたるうへは我身ながらも我ま  
 ならずこなたの望のとよりを亭主へ談合して見るべしと思ひ先日よりいひ出すよすがも  
 かくてどやかくと思ふうち遅きはりすたり今少しまらたまへ明日と亭主と談じ合亭主のゆ  
 るしを受たらバ御心よしたかひすべしといふよ此男大に驚き談合とて御亭主との談じ合か  
 らそれは何とも迷惑なりさて念頃よなすあうよ不義ある事をいひかけしとさげしされんも迷  
 惑なりとよ短氣あるうまれなれば我等が命にかゝらんもしるべからずされば此事と決し思  
 ひてとよまりかゝねて申出すまじ必らず御亭主よ御さた御無用なりとよま〜とわりてう  
 るり其のちばたま〜行ども此女の手まへもなんどなくはづかしくなまで後々は終に遠ざ  
 かりましたあんと此女はかしこい女房と見えました又人によつてまた〜不義をせまじと  
 思へば人の害もあるとも思はずたけりまはる人あり去年の冬であつた日ころ念頃よ出入い  
 たす者がひとり来て語りますると昨夕さる所にて二三人こなしに参りましたが元來心易さ  
 方ゆる夫婦の衆と一緒にとたつへあたり四方山の咄しのうちひとり男とさう者にていか  
 いしたりけんかの内儀のふとものあたりへ手か足かさこりたさよにござるが、の内儀其



ま。これつをうつら立といふ物にばつと立て人の女房は手をさすは覺期してしやその女  
 のとりちどちがふ所こそ多きに男のあるそばはこれなよとしたるじたらくぞやいたづら  
 女よはそのやうを事したらうれしかろうはんよ木のそらへのぼりやるあど大聲上て勝手  
 こいマよしたが此手ざした男たれと知らねど自身は覺れば顔は血をあげ巨たつの橋よひ  
 たいを付て夢なれと先いぬくがるわたくしはそばは聞き何とあいつのしやうもあく汗  
 をたらしくかきぬたる事主とさす世間をひろくする人はどあつて惣じてあの女は少し  
 の事をも仰山といふものでござる此やうによりこそつてあたるうらと手もあしめさばる  
 ひものでないよぎやうさなやつにてはなしのじやまをせしたまへぬ遊び玉よ  
 無意主ふりあどかく何れも御かまひあさるまじさて今のはあしの跡のふでござつたとい  
 はれしよやうく色をなほしうへりましたかこれは何と賢女といふものでござるかど問  
 した此やうなる愚な女もある世の中これはど人にきまを付めいぬくからせいでも女のみち  
 立ふとあもへば何のさたあし我胸のうちよてとむ事なるにいかの間男をせぬと云ふ潔白  
 を見せんとてたけくしく愚のあまりある事也能く合點してみれば此やうあひんしやんと  
 はねまぐる女が結句内しやうでいたづら事をしてゐるものじやとさる人の云はれしもかく  
 めらん事ぞかしどかく女は物事しづかに只心の内ひとつをかどう持が道と云ふものでござ  
 ることさつとどのこんだるがとしと心得べし成實論の傳よいにく愛欲無厭賊水を飲で味

其喝を増が如しとあるは此色欲よふける有さまは蓋のからき咽のかはく物を仰山よ取こみ  
 ひたもの湯水をのひ喉のとくのもんでくあたる事なきは丁どそのやうあももの又たとへて  
 いは犬の枯骨をかむよひとしど有の犬がひだるさあまり死人原に入てしやれたる骨を  
 くらふよかたきものなれば己が口中をやぶりて血の出るを知らせ此汁は骨よと出ると手覺  
 て終よ舌も咽も己がでよくひやぶりて死すといふに似たりかつへたるとさよはあど先覺へ  
 せくらふは愛欲さかんよなりてかんよんならぬと何の事もちうちわすれて主あるものをも盜  
 み終よはあんあくとらへられてはじをさらし世の人ようき名をうたわれて我身を我心でこ  
 ろす此まよひのつとせり玉ふべし戀の滴をさかしてみれば濟とよごるとのふたつなる  
 は次よ御はあし申さふ

○さて御目のさむる御はなしやさふさる田舎人はじ先て京都一見のため、登りけるよ或人のい  
 ひける、その方京都へ登らる、ならば文を一通ことづけ申べし所も名もしかどぞんせを定先  
 て都へ通りく、明らかなしれ小路くは進しれやすきよし承る何方よて尋ねいと心やす  
 くしる、と申ひ間此文をまわらす口上よても申さかそたしかは覺えられとけ玉へ、則名  
 こさよし秋北赤南五百の涙の立かゝるとたづね玉はれもし口上わする、事あらば此文を見  
 せて尋ね玉ひとど渡しける此男文官あればいふより早を忘れさて都へ登り文をとて出し人  
 見せけるよ、願もの有とよことばりのとふりしるものなかりける此男申やうさてくさのどく

なる文をたのまれしものうな是をといけきして歸りたら頼まれしうひもあく云がいあしといはれんもはづかしなつねんとすれば時明きとやせんかくと案じわすらひしがある人申やう此文を千日千夜たづねらるゝとも合点するものありがたかるべし所詮この文をもちしより北西よひらさき野といふ處より一休和尚とて名智者のまします此僧に尋ね見玉は發明よましますはきよ定て敷玉とひ早く送られよ先都ひろしといへども是を合点し沙汰申ものはかつて覺えずとかたるとき此男さらば其紫野とやらんかしへ玉れといふよくわしくおしへけるやがてたづね行た此よし申ければ和尚文の上がきを御覽じて是は都の鳥丸通りとこそこまて雨や千阿彌とたづね玉へとくわしくをしへ玉ふ此人さてくかこじけなしたづねまゐるべし、かし此義理をとてもの事よとき、かし玉へと申ければさよしあき北はる南といふときはみなあめ也五百の浪の立かへりといふ時は五百をふたつ合るに千ありさてなみとうくときは雨やの千なみとあらでは讀くたらすとをしへ玉ふ

○又和尚御在世のとき下京松原通中ほどに制札あり其札のこしらへやうは板を丸竹とさみ其竹のように錢を一ばい入札の書やうは

- 一餅食たがるもの、事
- 一酒すひたがるもの、事
- 一茶のみたがるもの、事

右之通りひたくは買て食へし只世中は昔錢也以上

年 號 月 日

かやうに書付立ありしが一休折ふし通り見玉ひさてくめづらし制札いかさや是は子細めるべしと立よりうかひ見玉ふ世の常のせいさつとてかはり柱を竹めてこしらへたりしは心ありげよ見へたりとて供のものよ汝とこの札を取てかへるべし我少し思ふしさいありとやとくくど仰らるゝ男ややうは是は和尚さまとて覺へざる仰られ事かあかりそめにも是の定めて公儀のりの制札あらんしかるをひげよ筆とつて歸らば後のわざはひいかゝあらん我等よ於ては御めんぬれとやける和尚さま、玉ひ尤も汝がいふは斷なれども去ながら子細をしらねば道理あり先此札をはさきたる竹の内、錢あるべし此札をうばひ取べしとの書付なり早くとりてかへるべし若た、りあらばあんじが身よはどがはかくるまじ此一休が心よまかせおくべしかつは我あたまをまん丸めし身あれば半錢も身よは付じみを汝が穴一せよ、とらせん早とれなくとす、めたまむばさやつもはしくや思ひけんさもあはば取べきとてこしりよつて押たはままづかあめを引てみてあつばれ和尚は神通よてましますとてろこびいさま打かたけそれ世の中にぬれ手でのこをつかひとはかやうのこをいふらんとてちどり足よてひらさき野へどかへりける其後公儀に此札を一体うばひとり玉ふよしはのかよ聞めし和尚へ使を立られけるよ和尚うしこまつてやがて目代つ上り玉ふ奉行のいはくいふよ御坊何とて往還よ立し札をうば

ひとぐれけるぞ一休されば酬札のおもてを見ゆに御酒はしくと買てくふべしよの中より銭が  
 あるはどにとか、れ候扱も御公儀は御じひよましますかあどありがたくぞんじ殊も貧僧の  
 事なれば取てうへりて候とすさる、奉行聞しめし根本これは君より御じひのためよ國々にた  
 てられ此書付の面をよく合点いたしたるもの此札をうばうべしとのしたくなりよし、踏  
 へり玉へりしこまりて一休のむらさき野へぞかへり玉ふ奉行の日さても、の坊主あらで  
 はかやうのふだを引ぬくべきものと思えをたどへ心を知りてうばひたく思ふともどやかくと  
 思案しあるひは世間をば、かり即時うばふべきものはまれなるべきよ何のは、かりもなく  
 うばひしはきたいの坊主かを末の世に至るともかよふの坊主と二人ともあらとと感じ玉ひ  
 けり

さて御約束の戀の源と申御はあしいたしませうまよ人の身を觀じて見れば地水火風空仮  
 よ合してうすさかのうへよはりたるどころは男女のかはり有て美人もあれば見よくき人  
 めへだてあれども彼一重の下は高さもいやしきも不淨穢らはしきうみ血のくさきを包たる  
 斗音屏に似たりつばに色々のさいしきをして番をかきて見事ありと思ふなかな、我を入たる  
 がとくむさきものとのたどへあり先男女の八穴九穴とあるまづわたまに目二つこれもやに  
 といふ物があがれ出としよるにしたがひて常に汁が出耳にもあかの出るを長崎療治といふ  
 唐人のすがたしたる男が何やらん陳ふんかんといひて誰ありとも耳をよくしてもらふとさ

見れば異るい異形のもの耳の中よりぬきさておくさきたききものが出るこれも不淨な  
 か鼻からの青はなをさらし口よりこよだれをながし或は口ねつありて人よりてはさまむ  
 かひよはあしもあらぬはどくさいよはひがする物もあり其外戀といふ其みあるとをたづぬ  
 れば清とよごるとの二つありて頂上よりあなうちまで一つとしてきれいなものはあまそ  
 れをたい有がたがりて慙しがりたのしむ凡夫の心を佛の見通してさてもかはいの業生や誠  
 またのしみといふは此穢土をいとひて極樂といふ國よ生れてむさいとみひたるいとも思は  
 でくらす極樂をいやがる事のみさんや何とぞしてすくひとつてやりたいと思しめせどもお  
 のく我等はたゞ此世界のまよ煩悩さわりに戀をましていつまでこよ遊びたはむれ能事  
 がしたしと斗思ふと種々さまざまの罪をつくり又しても迷ひにまよひをかさねてはなる  
 事かならぬ此邪淫といふひとつたり事おこりてのせんさくありおもへばむさいものど  
 いお少のまの歡樂よ未來惡道よたさいして長きくるしみをうくる事はやうもあひものすき  
 扱邪淫といへて人のつまをわうすばかりかと思へばまよはあらヒ子をこらみし女をおかす  
 も邪淫の内乳祖母を犯すも邪淫あると非所といひて寺道場の内在家を持佛堂のあたりさて  
 非障の登や彼岸親先祖の命日遠夜さてはわが女房の心さしわりて精進する日持齋のとき  
 をぬ男何の大事かあらふとて犯すも邪淫また非犯とて若衆を犯すも邪淫のうちなりとある  
 聖文よ佛の説玉ひたりしがれば今とさの出家も男色をおかすはまた手がらのやうよ人もあ

亦ひ其身も勝なる心ざしであると思ふんし、は少と合点のしごこあいかどおもへば  
 それよはとり得があるといひ分をかじ先此やうなごまで邪淫戒といましめ玉へは覺へて居  
 たるがよし何と息もすきもあらぬ御制戒これまたかゝるいと戒門よついでとそれく四重  
 四堤二不定僧殘滅靜舍陀單陀五戒八齋とてどうもあらぬつとめが侍る爰が了簡の付どころ  
 さ。玉へ五戒の事はさて置き一戒も半戒もこのやうな六うしき事なれば見ぢんもたもつ事  
 はならぬしかれば佛よの得ありがたしこの法師も咄してさかすれとさとりぬ内は心も  
 どあしさて經文をどみたまへ女犯は七百生三途におち非犯の五百生惡道よしづむとあり女  
 犯といふと女をおかす事非犯といふは若衆をおかすせかひよ人の數何万何億あらふやらこ  
 の二つをおかさぬものゝ有まい然ばいちにんもはどけになる事はさておき皆々惡道へおち  
 ませうなかく落るよきまつた事いかにとあると佛のいましめおわせられたをやぶるから  
 はおちいで叶ぬ事ためて惡道のせめは往生要集其外方々談義談談にも聞玉ふべきがこの  
 いとむくるしいともいやといはれぬうまやくよあひやそと思へばそこへ落まいとて多年後  
 生をねがひ寺参する事じやがどかくは我々ぼんぶの力で地をくへおちまひとはいはれ佛  
 ぼさつのありがたいといふが大事の所あるを然にあみだ如來末世濁惡惡鏡ある惡業ふかさ  
 身の一戒も、たぬ惡人三世の諸々の手をうちばらひ玉ふ凡人をすくひ玉ふんどの御擡ぐ  
 めんじあしからぬ不取正覺とちがひたまふ此をひわみだ佛とてなへ奉れば身は不淨であら

ふとも戒律をたもたぬか、る罪ふかき惡人を西方あみだならばこそ見玉ふ一心不乱に一念  
 十念の御念佛のくどくよよつて八十億劫の生死のきづあをばらりとあしきり弘誓の舟よと  
 びのると大慈大悲の正手のかせに帆をあげてせつなる間に極樂は往生するは何とありがた  
 い事よて侍らぬか切又この法華經よは惡人の提婆をこじめ龍女は女人の手本をあらわし  
 乃至一不成佛と、き玉ひてたゞ一遍の南無妙法蓮華經に即身即佛をとぐるはうたがひあし  
 とかく惡業のさんせきとも只しんぐのひとつで往生成佛と決定と思ひ取てとなへ奉ると  
 り外はなし能たねといふと此念佛題目わるい種といふが此邪淫これにて種の子の心がすみ  
 ました又御話しは次にいたさふ

○ある人牧溪和尚の御筆ありし靈照女の繪を持けるが一人和尚の活機なる事をしたひ證をたの  
 みすべしとてやがて一休の御卷へまゐりしかくぐのよしたのみすければそれ社安き事なれ望  
 の費して参らせむと筆おつとりたまささらく書そのものは渡されければありがたくいた  
 いささてもかるき御僧かなとよろこび内へかあり友たちをもよびよせ日ごろの繪よ一休の御  
 寶なされ下されしとかたりければおのく拜見やさんとやがて床よかけて拜見しければかな  
 まじりよ

汝が親の所作り  
 阿麗居士の娘

馬祖よたまされて

寶を海にすつる

と遊しければ曾八よこ手をうちさてめたわけたる御事かを罷居士も靈照女も唐土にての賢人ありとみな人いひ傳へしはどこそ定て左様の心をもあそばさるべたかとおもひけるは格別なる御事かなまとも天下の活祖師にてましまそとみな人感にたへたりけると也

○又一休和尚は金を山に捨玉を淵よりあらべてもあらんはけしきあれば元より一鉢のみふけより兼てたくばへあかりけるは大晦日の暮方ありければ一僕やう明日は元三ありなよをか参らせん八ッ木の合もあく青き銅の一錢もあしとあげきければ一休き、玉ひてそれは歎く事にあらずいざ出よとの玉ひて一棒ふりかたげ山家街道へ出玉へば折ふしかはらけ賣通りければのがすまじと追かけたり彼者おどろき一荷のかはらけを捨てにげければ扱こそとめしつれし僕にもたせて是をしるなし初春をむかへ玉ふがはからず大名はて玉ひけるとて和尚を引導に請ひければいや参るまじとのたまふ何とて御出あきぞとサければ錢をくれねば行んとなたまふ安き御事哉何はどか御用ありとサせば一貫八文はしくといへり安き事とサ奉りければ其錢をもらひて彼おひはぎしたまひしところへ行てかこらけ籠へ錢をく、りつけて札をたてられけるは先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文但一枚は付一せんづ、帳けし玉へと書つけて傍よ一旬

賢のぬすみは偷盜戒にあらすいかんとあれば  
惡の歌も邪淫戒にあらざる證據あり慈鎮和尚と

て賢き聖のよめるあり

わが怒はまつをしぐれよそめかねて

まくつがはらよかせさのくあり

と侍りけむとやしければとて邪淫戒をやぶりたる人々といひがたし

我も賢のぬすみあれば偷盜戒をやぶりたるとはえいふまじきあり

と書れけるとかやさて引導よ出玉ひて曰

人は六道の錢とて六文出す汝の引導とて一貫八文出すさつしんがいちじう  
されば汝は人に一貫貳文さされり十方は道あり行たい方へつ、と行成佛ま  
さにうたがひなし是いかんとあらば有尸地獄のさたも錢がする

とのたまへばみな人さてもおどけ人やとて感せぬ人さなかりける

○或僧一休の活祖ある事を聞つたへいか程ある道徳かあるとて大徳寺へ行てたづねければ折ふし一休は門前の酒屋が方へもき酒よたべよい前後もしらす臥し玉ふところへ小僧きたり只今  
唐僧とかや見へし大和尚の一休はと尋玉ふはや御膳りあれと引おこしければ一休覺めいまだ  
覺せうかくとしておのせしに酒屋の亭主出て御醉眠御心よく侍りたるかとサければさても  
よき氣味やとて一首よみて亭主よ取らせけるは

ごく樂をいづくのはど、おもひしに



杉ばたてたる又六の門

とわそばしければ亭主大よよろこびけるとありうゝるところへ小僧またきたりてはや御歸り  
あれ先よサせし和尚の御待かねとサせば答もなく又うちうへしていびきういてそりがへりて  
寐玉ひしうば小僧うへりて何程おこしてもおきあがり玉をせとサせばよしくその寐入て何  
とも思ひよらぬとき引おこし一間かけたらば志いよくしれ侍るべしと彼唐僧一休の臥たる  
ところへさし足して行枕元へとうと座し何ともいはず引づりおこし目もいまだあき玉をぬよ  
一越聲を上げて曰

西來意の祖師の語は俗語ありや

と問へばその思もつさあえぬよ一休も大音よて

汝が俗よ

とこたへてつさこかし玉へば彼大禪師も舌根をふるふて立れけるがさても活祖師やきしあ  
は十倍せり汝が俗よとて即時又出まじき答話なりと感氣肝よめいじて歸り玉ひけるとなり  
或とき新右衛門録の語を参じけるに一休しめしていはく  
釋迦みるくは是他の奴しばらくいへ  
他はこれ阿羅と、ひ玉へば新右衛門歌よみて答へけるは  
たそといふことばの下よあらとれて

たそこと職よたそことたれなり

とよみければ一休これをかんとて此一とくにて千七百則をゆるし玉ふとなり

○一休和尚老年よ及玉ふ頃親をもてる若きもの、心得べき事諸經の中よこれありとて示し玉ふ  
よは人の子として親に一日も孝行の心わするべきやうあしといへども就中孝行の心おこすべ  
きは

- 正月元日 五百日の孝行よ向ふ 同十五日 百日よむかふ 二月五日
- 三百日よ向ふ 同晦日 百日に向ふ 三月三日 百日よ向ふ 三月十日
- 千日よ向ふ 四月十五日 五十日よ向ふ 五月五日 百日よ向ふ 五月晦日
- 九十日に向ふ 六月七日 二百日よ向ふ 六月十八日 七十五日よ向ふ
- 七月十三日 五千日に向ふ 八月十六日 五十日よ向ふ 九月九日 二千日よ向ふ
- 十月廿九日 千日よ向ふ 十一月七日 五十日に向ふ 十二月晦日 四万六千日よ向ふ
- 毎月朔日千日よ向ふ

右の日親よ孝行の心を猶更用ゆるものこそそれくの日數よ向ふと釋尊の經説よもあればうた  
がふべからず勤よかしく孝行といふは左のみ六かかしき事よもわらずに親たちよかうもな  
しかくめいたしたならば安心し玉ふう何とぞ安心させやたきものありとするとすことよ朝暮  
心がけるのみこれ則ち孝行なりさて勤めをばりたると前よサた種となりて其子もまた孝の心

父は倍増するものあり主人に忠義といふも名目こそかはれ心持これより同じと常しめし玉ふは有るたかりける事也けり

一休諸國物語圖繪卷之二

一休諸國物語圖繪卷之三

○愛に天台坊主一秀清とてたまこびに悪こびたる坊主あり多の八よこしやある道をす、め凡  
佛法はわが心より身の外は佛なしなどいふてあるひて宮社等の木を伐せ佛像を破却させ先  
祖をもとひらは非邪見極逸の坊主あり内々あれがやと承てれば紫野一休和尚と申小法師の何  
種佛法だてをして悟道はつめいの僧なりと世間よまたするとも是もつておかしきぞことへば  
井の内の蛙が大海をしらぬに似たるべしあはれこの坊主よあひなばおそらく只一句を以てば  
いこみ都の住居させまじのつばれ途中にても逢たきもの哉とよりく是をうかいひけるある  
日夕ぐれよ一休かへり玉ふよ其明と相尙眼病氣よて一眼はあしき折から彼坊主よ大宮通一條  
の辻よてはたと行あひたまふ秀清さればこそねかふところの幸ひなりとおもひてするくど  
走りよりいかよ御坊くといひかくる一休この方の事かと仰らる、其とき秀清のいはく汝一  
眼をてらし歩行する事もしのやまらある時と黒闇ありあやうき事全く頼みがたし一休やがて  
汝が肉眼より我一がん星まんくたり一月よりへがたし見物するときさんば明らかある鏡のと  
しうやうに答へ玉へばこの坊主かさねて一言よ及ば毛尻からげて足ばやま行方しれを飛うせ

○或とき一休よ問ていはく何ぞ和尙さまつくく世のあり行あり様をみるよ人間のきやう界を



あんきるよ皆我々が智音といへども幾人といふ數もしらせ大かた先だち行けるがつるよたれ  
あつて言傳ありといふとも聞すいかやうの處何のやうよして居るといふ事もなしこれのみ  
必元なき事ともなりやうくあちこちとする間にはむつじのあゆみ近づき車の庭よめぐるが  
如く我々が番に當り侍らむなげかはしき事ともありかやうにあるときは死ての先なよ成侍  
るぞ一休の曰

死てのちいかあるものとなりぬらん

めし酒だんを茶とぞありけり

と仰られければ此人また和尙のかる口れいを出し玉ふとどつとわらひけるが又とばある人の  
言けるをさりとて御坊このうたの必血白くひがまた行もめり行ざるも口よしこれはまたいか  
成事やらむ次手あがらさかせ玉へ一休

といまるともはゞそこにといまれよ

行とおもはゞとくくともけ

といひすて、歸り玉ふ

さて前冊よは邪淫のすがたよ付て未來現在にむくふ次第をあらく佛法はなしとのべやし  
たがまた中事かのこつてあるを少しか聞せませうさて經文は前よよみました大悲經第三の  
卷の中の種といふ字に付て中事ありとかく何の身になつても種がなければあらぬ世界の

敵いう程あるやらしらねども同じ目には鼻手足はありながら背の高いまあり低いまありあるひ  
はやせたるも太つたもあり目もひからめのたれ目のしはの目の筆奉行といふ目はやぶよら  
みの事じやげよはざる此種の方等部の中の經や眼目角昧なる者は他の婦女を邪看するもの  
、中より生るとは説なされた此眼目角昧とすかめども横よらみとも讀字あり他の婦女を  
邪看するものとい他女房をよこしまお見ると讀字なり是はどうしたる經の心と思へば世  
間よ人を横に見るやうお目の人がござるイヤア此内よも其やうな目の人があるかしらぬこ  
のやうある人を生つて來る人は過去よも人の女房のよいのがあれば人と語るうちよもひ  
たと見ぬやうで尻目でよこみたるむくひよよつて今生よは常住よこばかり見て居るやうお  
目よ生つくものなり見度ば眞直よは見せしてあせよよこよと見るぞといへば人に悪う思は  
れまひと已とあやまりて横にみるを他の婦女を邪看する者の中より來るとはとかせられぬ  
かくすたらばまた目のろくよ生れつかれたる衆のおれが目はもつや悪い目でないと思はれ  
て油斷をされたらば未來でまた昧が目よありませうぞわるふ合点あさる、なこれ人ではか  
り邪淫してさへはや目がかくのこしとかく目といふが大事じや目がいたづら者千里の行も  
一歩よりはしるといひて千里万里の道を行めたゞ一足よりはしるとくたつた一目見るとい  
ふより事おこりて及ばぬ戀の思ひのと罪を作りて思とさまくのせんさくがあるといひかし

の人も

人の身に目ばかりつらぬものあらじ

みすここひしとちもはぢらまし

とよみ置れしも聞きたまたしならばこそ座頭はあも事も思て幸にくらすかと思へば見事心  
 をうごかし情の道深く結句目のあきらかなる人々よりいにかうあり且そこが鹽のからさ物  
 のくさり味ひがするやら漆よかこの如くあるものと問をればあながち目ばかりがわるい者と  
 も定められぬ古人の詞よ月花もさのみ目よて見る物かはと書かかれたは能すませばあもし  
 るさ詞じやまづ各われらと目であければ物を見ぬやうよ心得て居まするをさのみ目ではか  
 りみる物かはそう見た物でさらよなし心でも見よみる目さへわれバ犬も小判は見るけれど  
 を是は黄金といふものもて七賢のうちのためらともこれさへもてバ何もかも自由自在に買  
 る。ものせやのを見たる手さいかよしてもその見らる。物の正躰をしらぬれば目で見た  
 ばかりが見たといふものではない物とに心を付て其道理をしらねば其方を今殺すがといふ  
 書た物をもても其文字を覚えねばいか成事が書て有やらはそ長さは見みせといふ字よてあ  
 らむすいりやうよやつて見れどもあはぬしからばさのみ目にて見る物かはといへるが面白  
 くないかさらば目にてみる見ぬのとなしを引て聞せまう先は茶ひとつ

◎浴陽よ天文はかせ某といふものありあるとき一休の庵へ行けり和尚出合たまひその方は久々  
 見えざるが何方へ参られたるぞされば私と此をるる人よたのまれ南都にまうりありてい

三日以前よ登りや候和尚の曰何ぞめづらしき事もなく候や博士こたへて曰されば奈良にてめ  
 づらしき事を承り候それはいかやうなる事よやわりけるぞ博士とんにや坂の邊りよ齒をぬく  
 ものあり一ツを二文づよて取と聞て去もの、虫くひ齒をもちて時ならずいたひとさよは身  
 体さへたえがたきとでもだへける者かれが事を聞および齒をぬきよ行一ツを二文づよありと  
 中此ものいひけるはそれがし聞及び遠方より参りたり一文よまけてぬかれよといへばい  
 く少もそら直のなく候御川ならば何とさきありとも御越われといひてまけす色々このりを言  
 つくしせんかたあくかへるべきと思ひしかども切角此事よ参りてむなく歸るべきよもあら  
 せどやおもひけん是非々々まけなくば二ツを三文にてぬかれよといふ先方のいふやう扱々其  
 方はこまうく直切たまふ人かなまけておまじやうとて二ツを三文にてぬきとりけり此男のし  
 こくも直まりてぬきたりとおもひ大きに自慢がはして歸りしをあたりのもの、申やう扱々た  
 い今の果とせんなき事をしけるものかあ其ぬくべき齒ばかりをばぬかすしてぬくまじき齒ま  
 てもぬくは一文の錢を、しみてぬうでもくるしうらざる齒をぬくさりとては世よめづらしき  
 笑みのこれは小利大損ともいふべきかど笑ひけるかやうの珍敷とをきよて販りましたとては  
 なしける和尚おかしくおぼしめしころくとわらひ誠よそれはおもしろき咄しありされば世  
 間の人利やうよあふかさは事よふれて利ふんをおもふはどよ因果の道理もしらす當來の苦患  
 をもわさまへざるが如くおぼしめし、四方山のはなしおはりて和尚西の方の遺戸をわけて出らる。

博士みてやがてかくぞとひひける

いかづち西に朝日のうつるのな

一休やがて心得たりと

天文をかせいかに見るらん

といひ玉へば博士手をうちて大に笑ひいとまもこのでかへりける

○爰に一休和尚の庵ちかきはとりよ四十がらといふ小鳥を養ける人のありしが物のあたりや生ある者なれば死する期あつて籠の内よひなしくあれり朝夕愛し手なれし可愛さに殊外不便よ覺ぬいとかあしくて子よわかれたる思ひを寄せり凡非情無心のものにも各佛性を具せりましていはんや生あるものや死出の山三途の河めいどの間いかゞ有らんしかるべき智者を頼みて引導わたさばやと思ひ一さう和尚の庵へ参りてしかゞの事頼みやたきよしなげさければ折ふし和尚の弟子出わい、とやすき事なりいでゞ成佛得させんとて佛前に向ひせ

ひかし釋尊八十三ばつたい河にゐるてねこんに入

今あんど四十から紫野よ成佛をぞと

とたからかよこそさづけ、る彼者たのもしくおもひやがて葬りてかへりぬ是を一休ものごしよ聞しめした、今ののんどうはよくでかしたる小僧かあ風骨によると思しめし大さによるこびたきひ欄楯よき事を、めあふせどかや

維广文殊のはあしいたさふ初維广經の中に文殊大士のまゝ居士の病をぞむよ御こしなされて何と居士御宿よか御見まひのため不來のさうをもつてきたりやたと仰れたこのこ、ろは不來の相とはきたらざるすがたを現じて來るといふ詞じや何と來ておるて來らぬすがたをもつてきたと何とやらむ六かしき公事ではござらぬかそのとき維广は方一丈の庵室の中にあわしました今とさ寺の長老和尚の御さるところを方丈といふと此こ、ろじやしうるに維广この詞をきかれてこれのく文殊はさつようこそ御出あされたれと維广もゆいまで我不見の相をもつて見るとこたへられたこの心は不見の相とはそなたさまの不來のすがたをゆいこしあされたなれば我もまた見ざるすがたをもつて見まするといふ心じや何としつた同士の出合のあもしろい問答ではござらぬかさのみ目よてみるものかはさのみ足にて行ものかんと書たさものとされちあみに申さふあれば鴨の長明が海路をへたつる懸といふ題よ

おもひあまううちぬる宵のまぼろしめ

なみぢを分て行かよひけり

これをおしはふてみれば寐入たるうちにて思ふ人の方へ心があよふたあれば此行やうては足ばいらぬしかればさのみ足よて行ものかはと書たいとやが賢じやまたまつしまの法心上

是のうたごて

なまをふまへ此てうすみたつらむ

きよみ玉ふよし沙石集の中は無住法師のかきたまひてこれ楞嚴經のころよかなへりど  
ありいかさま雲のはしりかそみのたつり合点がまゐらぬ春たつといふばかりよや見よしの  
山もかすみてともよまれたかよふによんでる同じ事じや歌よ  
足あくて舟のはしるもわやしさに

あまをふまへて涙はたつらん

實にも楞嚴經の中に釋迦如來と阿難尊者との問答は眼見心見不見の見あといふ事があるぞ  
と殊勝は有がたふおもふ事じや此やうを理よ似たるをささうならばある者の聯句に舟よ  
乗りて山の巔に上るといふ句をいたした世間は無理を問へぬ事を山よ舟を乗やうな事じ  
やといひまする是よ和を付めぐみましたいかさま付よくは難句なるを是よさるものがつけ  
ましたは

田子の浦をみ間よ富士のかげ見へて

あんどよく付たでのごさらぬか舟よ乗て田子のうらに魚を釣ながら下を見れば富士の山  
のうげが有りくどうつりてその上に舟をうかべたとさよは舟よのつて山のいたゞきよ上  
る心かしましよが池よ望めば天麻下といふ句もこの心と同じ事とのく物よは感さをして  
見たり聞たりせいで見たりうちでも聞たり内でもない月花を見るよも月はいつもやるる物と

ばかり覺へて花はいつも咲てゐるとおもふは本の目ではかり見たといふもの也月もかけ花  
もちるといふとを合点するを心もに見るといふものでござる此心をもつて邪淫をいまし  
めたがよいそれとなせよとサよきりやうのよい女を見るよもたいうつくしい執心やと氣を  
うつすは目ではかり見るといふものじや心をそへて見るといふはあの女いから美目よふ  
おれが心が何とやらとさめくあれどりやわの方よは主があるよよつてあらぬとかくおもふ  
まゝ主ある者よこころをかくるは生盤人といふものなればその證據よは罪よおこあむるぞ  
どじつと分別をしてひさうある事をやむるが心をもつて見るといふものじやさてこの心を  
納めてからの見たとて科もあらずへりもせずとてもの事に此ころがあるならば見ぬがよ  
いはづ見てもとて母はわかぬと男の胸骨をすみて持がたしあみなりさて物と仕ぞこあ  
もなし侍の殊さら此つよき根性をさげぬは武邊も高名ならず先いやらしいは見聞からあま  
ぬるく誠の用も立さふもあふ思はる。ぞ兎も角にも詮ない事のは是よかざらすあはうらし  
う誕ながして見ぬがよいさて女房の山神とやはなまをめさましにいたさふよりながら難川

といふ男の才智發明の義をちよつと入ます

○難川新右衛門親當その身いみじき才智發明の道士なるが和尙のもとへ立入禪法よ参じられけ  
る誠よ佛心の妙具をつたへ正法眼藏をさそひ英雄の士といひつべし和尙も心通相かあひて  
しくおぼしめさる。もとばかり也されば定業期きたりて寂滅の室よいらんとす胎下のむうし

より是を待と年久く思ひまうけたる道ありとて快氣の望さらにあく既一門とせあつまりおのく今のかきりに名残をおしみたひ歎くことよその見る目もあはれよてしらぬ袖さへぬらしけることごとりとぞ見へよけるうゝる愁歎の折ふし青々たる西の空より紫雲たあびき空の中よかよひ音楽さこへ墨香薫しとなふり妙なるうゝる三尊廿五度さつ赫々たる聖衆を引つれ間ぢのく來迎し玉ふとふしきありとも中々有かたかりける瑞相なり實うたがむめなく新右衛門之西方十万億土極樂世界に往生せしめて九品上刹の靈にいたらむとはたあこゝろを見るがとしとをのく感にたへざるはあうりけりされば落日もちうさ老士まだ物なれぬ若輩のやからは天をあほぎ地も伏しども死あんどぞくるひける道理の至極とぞ聞へし其中よ嫡子と新右衛門がひざの元よりそむ涙に袖を包みあがらいかにあれ御覽ひへ煎母しく思しめされて往生安全よとげ玉へと指をさしておしえける其とき親當ぬふれる眼を活と見ひらき我子をりたどらみてそれ弓馬の家よ生れけるものたとは安養淨刹よいふりて九品蓮臺よ座すとて弓箭をわするべきよあらず書院の床よ立たる重藤のぬりごめぬ矢をそへてもちきたるべしといふ聞人驚かざるはあかりけりこはいかよと見る所よ親當が弓勢何んばりとはしらぬとめさしむつよかるらむと思しきかやがて引くこへ引しほり暫しかためて鬪とはなつ其矢あやまたす三昧の中尊ひかりを放ちて立たまふ阿彌陀のむ板をあなたこなたへ射とうしてければ空よあまねき紫雲のよそはひも諸の聖衆とおほしきものたちまち消て影もなしいかなる事ぞとて了

簡すれば所よ久しく經るむじなの化かうを經たるよぞ有ける誠に希有の次第あり終よ一首の辞世を作り殘されける

生ねるそのあかつきよ死ぬれば

けふのゆふべとあき風ぞよく

どかやうよつらね陸終をとけ玉ふ奇なるかを空寂の玄妙を會得し邪尸の障碍をはらひ其身よ死門よ入ながら活人のねぶりをさまされけると世の人の珍事とする所なりその後一休を導師とたのみ奉り御引導をこひければ一休もこの新右衛門には一かこりかはりて引導すべしとたくみすましておはしけるよはや新右衛門が亡骸を興よのせて來りければ一休たち出たまひてかの新右衛門が乘たる籠をたまたまへば死たる者高らかなる聲を出して一首の歌をば一休よよみかけ、るこそふしきなれ新右衛門も只人よとあらじと今の世までも人のいひつたへ侍るなりその歌よ

ひとり來てひとり歸る我あるを

道かしへんといふぞおかしき

とたのらかにとなへければその詞のおはらざるよ返歌をし玉ふこそ有がたけれ

ひとりきてひとりうへるを迷ひ也

來たらせさるぬ道をおしへん



お通し人



はるのちの  
法乃  
みる

どのたまへば新右衛門も賢るとやあもひけんそれ。ちはずもせ成にけり世人これをつたへ  
聞て一休は誠は人間をらを佛菩薩のかりあられれひとり来てひとり歸るも道といへば来た  
らせさらぬと即答あし玉ふと所謂老子に死てもはるびざるもの命あがしといへるもかゝる  
ためしなるべし

○又新右衛門が最愛の妻いとけあきとさより萬は心みぢかく武々しかりければかなしき我も  
慈悲のめぐとあく召つかふ童も哀憐のなきけ鞠うりけりされば人と似を友とするあらひな  
るに悟道の居士なれそひて尊さおしへをしらざりける事いかさま我のバちあるべしと昔人  
とどにさみしける新右衛門あけれ不便におもひてもとより道者の事なればたましひをくだ  
き柔和のおしへをす、めけるしかれども露バかりをしたがふ氣しき見へざりけりあるとき余  
りいなく制しければ女房顔をわかめて聞へけるやう

あさいどのながくみぢうくむづかしや  
うむのふたつをいつうとあれん

とあいかやうによきておともせを親密おどろき日頃のふるまひに相違して歌の心あまり殊勝  
なりければさうつかしくおもひわが教るに及ばすとてさをも銘じて感じけるふしきあるかな今  
までは放逸邪見身をかかせ誠よくくらき人ありと思ひしがさては我より先よさととりける物を  
と思ひ舌をささける其後は夫婦のなきけあさからせひよくの契りふか、りけり上しむ水魚の

こゝろ同じむつびけるがつらき者のいひあしにてやありけむ密に異夫をかさねて二こゝろあ  
るよしまことしやかに新右衛門に告げる新右衛門もどよりいつのりを信するよもあらざりけ  
れども實に思ひわたる事ありとて物も忍びぬおのこありければ誓の延引もなく離別してこそ  
里へおくりける女房とありふし懐妊の心ありて憫みければ恨みの心あさからせつるぎをのこ  
はのを、かしむらんどもだへかなしとけれども力あく出よける無賃の程こそあわれなる然れ  
ども跡方もあさいつわりなれば誠つるよあらわれて謔言のしとさとしりよけるより新右衛門  
後悔して又よび迎んとて我あやまりあるよしいひつかはしければ女房返事に

秋かの世人のこゝろに立ちあらは  
見のらぬさきにいなこいとさる  
どかやうよよみおこせて二度かへらさやける夫より女房のなさけたぐひあぐいよきよさる  
まひは返てまさりけりと寝ぬものあかりしとなん或人かたり侍りいとじさおもしらく覺へけ  
ればかぞ耳の底よとゞまり忘れもやらせ有けるを仮初にあらひし侍るさればかの歌よいつれ  
もあげられたありしとさる

切女房を山の神とせせば御さしつかへもこさるふかもしらぬとも山の神といふものも目を  
見合すればそのまゝ死ぬると柚人のつたへて奥山ふかく入て木を樵に山の神らしめるもの  
もあたりて来て熊と見らるゝやうよとまん前もちらへすれども見ると死るよよつて随分

見ぬやうにする事も同じ山人でもまづこのやうな、りな物あらんとおもふてちよつとでもかの橋目をして少しばうりでもと死むことが一度じやこれをわすれさせらるゝお世界のすつくしめる人の内儀たちを常往山の神じやと思ふて見ると死こそせまひけれぬわさひの種じやと思ふてちよつとも見ぬがよい兎のく見ると死ぬるとさへなむへば手がつかぬ若し兼合点させられたかそれもおまとも人の女房を今どきののやり詞に山の神くといひますする此やうなところからいふかじやせんたぐい悟もじがまついよつて山の神のとくこのいといふ事かそれはいづれもがよくはぞんどであらふ身どもらがやうな法師の知ぬ事で迷の衆生は愛がゆさましよう御ざるぞ何でも見たぬるひとつとまで役立ぬ事をひたもの見たがるおんぼ心よ合点して居からぬ見たりとも何の大事かとおた言も弁口をた、さて連の泥より出て泥よそまらぬとぞくこ、ろが清浄なれば一心が極てからんととも見事よりいふれど一とさやうおきれいよいふはどの人の泥にそえたも一心の極らぬをも視てきままたよつてまづの眼を見るに煩悩よさばるものでござるさふお程に今の山の神をわそれぬ様にきて見たでとる大が小判を見たやうよ心得てござれたが今どきの若い衆や氣たいのよ親父たち笑止などは後生でみお絞白眼のやうお目よあらせられうと思ふてまづかひに存せるが後には世界よ生れてくる程の人が横にぐらみやうでござると思ふておかしうござるそれよつと邪淫のひくひばなしをすてきかせませう御世話方御茶一ツくだされ

○愛よ雲州大原とや所よあるや藤太夫とやものあり久しく京都よ住けるが元來出雲は生國なれバ又本國よ歸りて住けるが京より國へ下りさまに妻をかたらひて下りける此女京にてねんころしける男のうたより度々たよりをうかひ互よ文のうとひありけり此よしさる者ひそかに知らせば男あるときおまたの文どもの有けるをとりうくしけれと我とひとつも讀も無筆をれば力なくたれにか是を見せばやとおもふよ頼むべき人もなく打過しが折ふし一休この藤太夫が近所よましますにやめて和尙を請じてよき次手なりとおもひて件の文ども取出し御坊さま内々ながら御ぞんじの通り某は目を持ながらの明めくらよひとしければ此ふみ少し子細あるとよてゆゆ一々とみて給われとやける一休安きとありとて此文どもをよみかへて只尋常のふみよよみおし玉ふ時よ此男さての苦しうなき文どもあり余人よ讀たらんよの疑ひもあるべきが殊に和尙のよみたさふ上はさうよいつはり玉ふとも思はせさては人の云して皆いつはりおやけりと不審をばらしけり此女和尙の恵みあまりのうれしさにひそかに讀ふみをつうとす次手よ

しなのなるさそぢにかけし丸木はし

ふみ見しときはおやふりけり

どうれまのま、かきてつかはしける一休返事よ

見しとていふなる事と、ふ太夫



よみをばりてはこゝろゆるりや

これよりかの女ふつゝ身を慎みけるをあり

○都は口癖の妙薬を覺へて秘藏しける者ありけり一休機能をさこし召いかよもして知らばやと思召されやがてたづね逢玉ひてしかくの御薬を知らせ玉ふよしを承り及さふるふ天晴の恩僧は御相傳被下たくとるく是まで尋ねまのりゆとやされける彼人うけたまより中々の事よいこの妙薬をやて我等代々つたへ來り一子相傳の秘方なれば他もふす事思ひもよら去あから貴僧も、しき御僧と見奉れば否かたぐこそいへふかき御執心よてわらせ玉は、他は口傳あるまじき御起請をか、せたまへ然らばゆるして教へ侍らんとぞいひける和尚聞しめされわが身の大事一代一紙の誓文なれども恩僧はおしへてたびひと心得侍るとて墨ぐるにこそ書れけるやがてならひ得て庵よかへりあざわらひて宣ふやう人の病は薬となるべき物を秘藏して獨愛へたらむは慈悲のうとさ心也是等の事を秘藏とせばおそろく秘してもひしがたき一大事の因縁をばいかせむ去あから佛神の冥罰そらおそろしさらば札を立て世は知らせんとして

一口癖のくすりの事もし口癖をやひものあらばかならま密相の實を黒くやきてのむべし治る事すみやかよしてふた、び發ることなしこれ奇代の大妙薬なり

と書付たてられけるさて教へける男これを聞、以外は腹を立てはねをいからしていそぎ紫野

へとしりもき一休をたづね出しいか、御僧破戒無慙の賣主坊主かな何とて大事の秘薬を習ひ得て他は口傳せまじとて起請を書ながらのまつよ、高札を立て萬人の目よさらす事いかなる曲事ぞやと打たしたても忍びがたしと黒黒よまつて怒りければさしもの一休なれどもおめま後かとぞ見へにけるされども遠くけしきもあくそらぬ顔ももてなしめらとくぐしの有さまや何事を斯はのたまふらん起請をかきしも誠ありしかるよ札を立てしもいつりよあらま去ながら口傳せまじと書ぬれば口傳は一人もせざるなり札をたてと書ざれば建たるがあやましか起請よ少もそむかざれば佛神のばちもおそろしうらまえてそらうとふいてままくける彼者わくまで罵しり怒氣よおかされ方すませまりけるが一言のぬけ句よ返答をうばこれ歸りける

○一休和尚とひとしき沙門のぞけり我が繪像をみづから書てうつし心づから一入よく出來たるよとうれしくてさもあれ一休も見せばやとおもひ急ぎ紫野よもて行ける和尚この繪を一目見玉ひあなまぐるしやとて目を閉大さよ嘲り玉へはいかあれば所存をかへりみまのくわらひ玉ふぞと打腹だちの、しりける此時繪像を取て庭上へ投付土さうりをばさあから散々にふみよとじり一筆かうぞか、れける

世をすて、かたちをすてまびんはつをさりて煩悩をさらすかりよ繪像をかきておのが悪業おろせけ繪像大なる光いわくあり

と黒々と贅をかきてわたされける沙門つぐと感じやがて懐中して歸りける  
 ○五月雨のふりつゝいさはれ間もさえず打しめり四方のけしきうるみは情もみえわかたぬ徒然わ  
 びしく思しけん柴の戸をさまたみたん然として在しませ處へ六十の男とこへて破笠を  
 かじりいかにあもみ余りうれひよ沈みたる有さまよてしづか物ずさむとさうかいひける一  
 休たそやこなへと宣ひて柴のあま戸をひらき玉ふ彼男いふやう我は近きとたりに侍る者あ  
 るが明日はさる心ざしの日は相あたりいへとも智識をたのみ奉つるかたあくひへは忍れあが  
 ら和尙を請じたてまつりおろそか成者をまひらせ上たくひて是まで頼み來りい也とおもひ入  
 てサける一休聞しめしめとより出家のいとあみよいと男とあり何處のはとぞと問玉へは男  
 こたへてさんいわか家居とサはにさり川通をこぬけびしやく町と申てかくれあき所よて侍る  
 なり尋てわたらせたまは門よしるしを置候べし必らせまぢ奉りいよとていとまやて歸りける  
 一休のとよてつくぐと紫じ玉ひ果はふしきなる敷へやうをいひつる物かなさらば了簡して  
 見ばやとて應て義理をぞひらうれける柳にさり川とは今出川あるべし底ぬけ柄杓といひしと  
 あがわ町といふなるべしとてくたづね行て見んとて思ふ當をぞと玉へは紫よたがはさあ  
 がわ町といふ處へ行わたらせ玉ひける印といひしは何あるかんと見玉へは表よ杓子をぞつり  
 ありけりこれぞしるしありとてやがて内に入見玉へはさのふの男よめ玉ふ目出たかりける  
 事あ、めあらず我等のおるかあるたごふれをサ参らせゆへと一々よとさわうち道をもまよとて

せ玉はせ御入いこといつわりもなき天眼通にておはしますとてひとへに釋迦のまどくに思ひ  
 ける男もくせものよてむつかしく難問をかけんと思ひけるが法事も過ぬれば膳を出しすえた  
 ずける其とき和尙膳よむかひ殊よは亡者法界のためえかうをあして三界一所向と蓋をあけ見  
 玉へは飯よはあらで小ぬか也ふしぎに思めされ汁のふたを取見玉へは是も同じく小ぬかなぞ  
 覆りの物もみあぐぬかなりければよこ手を打てあらいたわしやさて亡者の三七日にあた  
 りいよとてかぶりもふらせのたまひける男といよくさをもけし恐れをなして敬ひけるその  
 とき男いふやうは仰のまじくそれがしと父をうしなひて三七日にあり侍る佛果よやいたりけ  
 んもし地獄よやおちけらむ後生の事おぼつかあくてかあしくいと問ひければ一休仰られける  
 は何事かあるべきたい存生のふるまひをば他人はよしとほむるや悪さとせしるやいかいふ  
 ぞとひそかよ宣ひければされば平生は常よよこしまなるといはすひとへは正直にてまつたき  
 性あれば他人は佛もてありつるとほむる者多くいとサければ一休聞し召しかればさづかひな  
 る事なし是あみだよもわらせ觀音よもあらず 則 正直佛あり佛果を得ると疑ひあしと事もあ  
 げよ仰られける男つぐと承りさては心安くい又それがしが兄よていもの三年已前よむな  
 しくまやたりしが常よ佛道をもしらす徒にあらし暮しはづかしながら天性愚鈍よして人の口  
 よぬかりもとの名を得い事くちあしき次第なりたゞし罪もつくらすいへは佛果も得いはんや  
 と問ひける一休聞し召中々つとどがあしとらへとも佛よありがたし左様のものと愚僧が

るしても人がゆるさければ其落どころの地獄を 則ちほう地とくといふあり但し今生のごとくは後生の事も侍れば佛果と地獄と少しも疑ふとあしと仰られける

さて又因果のむくひとやはなよをいたさふひかし今 都今出川のほとりよ色ごのみなる男ありあるとき水無月糺の森の夕すいみうちひらいたる河原よかり茶やたちなび京中の上下うつして御手洗のながれよて汗をす、ぎ暑をわすれかへる時分西山に入日かげ四五尺ばかり残りことさらひえの山おろしもひやくと心よく又も御出の茶やの床机腰をかけ休らふどころよ今出川ぐちのかたより大勢出来る内にもかづきのありふかく風俗のよきが年ふけたる姥一人つれてくるよくと目をそなたすはるかよ詠てゐたる間に近く来て此男がかけし茶やよつとはいりあふあつやとてうばがいさせもきかずして水のみて片かげのかたへよひたと顔ふりてゐらる、を見れば日ごろ執心よおもふたる人の女房じやまでこれは夢からうつ、うとそろりくと近づきて是ごようこそ御参詣といへばされば最前よりこなたさまをも見及びて居まゐらすれども御ぞんじのとはりこちの人といかひ世話やきあ人にてかやうなところへ参るとばさらはれやすから参るといふでは御ざりませぬわたくしの里へちとつと往てまゐるとすて横にされてまひりましたのへ離よも逢とがいやにてそれおを詞をそかけませあんだといへば此男それはわたくしよくしつて罷あるしからは暮ぬささよ神前へはやふ御参りあされたまゝの御出よ此うらよ見へしかくれ家は人の見ぬところを

ばわれよてゆるく御すぐみあされもし日かくれなり其私が御供をいたし御里へ参れば別義なし御参りよかあらぞおよりなされよといふを聞すでよ女房之神前へまゐりたるうち男はうれしく茶くむ噂よ今の人のおはしたらばとよとめて玉とれといふうちよはや只今歸りまそもはや日も暮れまするといふを茶やのか、も心得てむりよ袂をひかへまづ御茶ひとつとさしつけてうの奥の方のかりざしよへ引ばり行どころへかの男出きたりてものやわたくしむかへりますとむりよとて酒よとらめんよといふうちあんなく日も暮すましければ此女衆もかねて此男がこゝろあるよしなりたるよや姥とあるじのか、と物たりするうちよつる間男にありて扱それより親里までおくり遣すがら行末の落あふよとみとや談合して人しれすその夜こいとまごひして別れたげよとさる世よは性のわるい男も女もあるものじや然るよ人の心はそめるにいろをますすじやてそればかりでなく事其のち二ヶ月三ヶ月と逢よまざりてしたしくあり互に心をかよはす折から東山の透りよ此女房の方の家へいつでも齋におじやる出家の袷をせんだくたのまれこれも後生と念佛かたてよ縫しまひわたりよ硯のあるよまかせ其ま、うの男のかたへちよと文して音づれんとかさねはあがみよ一日二日御とよしくあつかしよ近きうちあかの方にて御めよか、りたさゆるくかたりなぐさみつめる御物たりいたし度神かけてあごこよと書てさりくしやんとむすぶところへ亭主何心なく來りしよ南無三寶とかはよ血をのけあがら竊立し此せんだくも

の、袖にちやくと入てかくせしを亭主これと見とげながらさるあき躰もてあし間近よりて飛か、やまづせんだく物をうばひとりかの文を取出し女め是といかよとひらき見せる  
 女房たまらさすがり付をつきたはして何々御なつかしさよあどよひ女もはやつ、ま  
 れせおくよ走り込かみそり取てのどふへかき、りたはれける亭主のこれもしらす文二三べ  
 んよまかへし名がきを見るよそれ様まゐるとばかりあるよぞさての此せんだくもの、主坊  
 主めよまがひなし袂にゐるこそふしぎなれさてもく畜生めと女房を引たて見ればとや息  
 たへたりいよくかんよんおらぞと其頃の太守へうつたへければ坊主を先して問はせ玉ふ  
 よさらあ覺へあきよし舞りなき通であさかかよす又けすれども相手の女は死してかの拾の  
 そでに入おさしが證據とありていひわけ立がたく終引わたされて女の死骸と、もよ木よ  
 のせられしはいと淺ましき事さても先世のいかなる因果がめぐり来てか、るからさ目よあ  
 ひぬらん人の身よはいつひくひがめぐり来るやらむしれねは現世よ覺へがあくとて此坊主  
 のとき油断はなりませぬぞさてまたかの問男めが科なき法師を殺したる因果のむくひにて  
 その身の果あがくしきおはあしがござる次よおはあしすそよ

○さるどころに何ともならざる邪氣ある男ありあまつさへ身をよろしくして万不足なく殊も下  
 人多くもてりあまりわがま、をいわんとて表の入口よ法度書をしてけり其札よ  
 一 へつらいあつて奉公はしがちの事

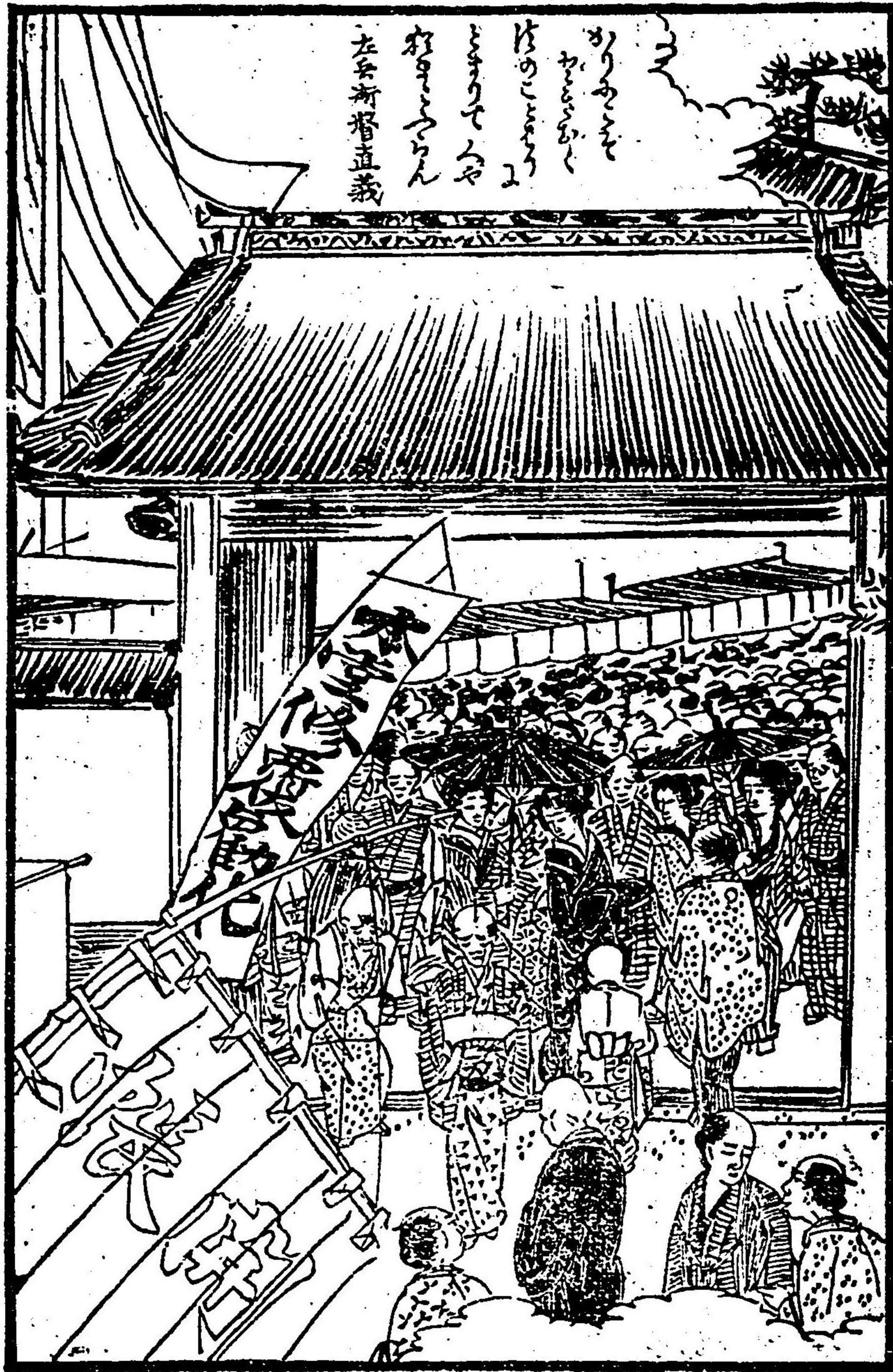
… つかひたはしの事くひたはしの事

一 おんなとりがちもらひがちの事  
 ぞかやうよ書て立おきけりあるとき一休をヤ入万の咄おひりて一休すさる、は何とこれの表  
 よめづらしき札をかきて立玉ふあれば下々への法度がさよて侍る亭主をかくとこたふ  
 一 休あらしき思ひ玉ひやがてかへりさまよかくかきそへらる、  
 へつらひてたのしきよりもへつらばで

よづしき身こそこ、ろやすけれ

かく書てひそかよおしとかりて歸られけり

○或人一休よとふていはく世の中の人のヤ事よてい人の人たるといふ事はいかある事をす候や  
 一 休答へていはくされば此坊主もしらぞ足らん身よて候もぬいんや人の人たる事をしるべ  
 きやさりながら若き人の心ざしあつてやさしくも尋ね玉ふをしらぬといふものにて候  
 ひかし物しりたる人の咄しをちと問とつり番候はどにすてみ候のんまづ人に人たる人と又人  
 たらぬ人と候がぬ人たる人を人どやげ候たどへば鷹などの鳥をよく取は鷹の鷹たるよ  
 候鳥を得取らせして鼠などをとるは鷹の鷹たるよて鷹とはいひがたし猫の鼠をよく取はねこ  
 の猫たるよて候へもし又鼠をば得とらせして者などを盗まぐらい候の、猫は鼠たるよて  
 こそ候へねこの猫たるよといひがし人の人たるよは人の道をしりたる者をすげ候又問てい



はく學文にうけ賣と申事の候いかなる事にて候や一休答ていさくされば是もしかとは知らざる事ながら申て見候とんまづうけ賣と申はあるひ四條五條の辻にこまるの店とて棚ひとつにいろくさまぐのものを取あつめおき人の用次第賣もの候此者に一いろよてもあつらへて見玉へ何れにても我が職あつせして皆上手の仕置たるを請負にいたし候間御川ならば其人あつらへて参らせんというがとく學問にもうけ賣の人こそ多く候へあつらへて行はん人こそまれよこそ候はめことよ老子莊子諸子百家のさたまでも取まじえて評論し物知りどの、しるは皆こまもの店に似てこそ候買手の爲は用よこと立ともやめらん賣手はさせる商人よても候は、一言一句にても我ものよして守り行ふは、るかにすぐれてありがたかるべしとすさるゝときこの人つくぐと問居てさても理りかなとてあつと感じける

○頃は七月十五日の夜若もの、飛上りのあと先しらせの男一兩人申やうはいさやかたぐ一休のかたへ行夜すがらなぐさまんと申一人がやうやうされば我等もさやうよ存せる處よくこそ申出されたりかの坊主もうささうさし坊主の事にあればこよひはとさら十五日いさく往てうからかさん尤とてうちつれ行はどよ折よく和尚寺ましく何れもよくこそ参られたり祝儀ありとてはや酒盃を出されて舞つうたひつするま、一休たつておどられける竹の切よのたまり水そまきにごらせ出せ入らせ人としぎらばうすくちぎりて未中までけよ紅葉ばをみようすいがるかこきと先ちる物でいおどれやう人々よ若がふた、びある身かや只何事もかど

もわかき時にはたれももうもいたづらくるひとあるものよそれくるしいものでもおじやらぬとく薬變じてくすりとなりいあよをあげくぞ川はた柳みづの出ばあをあげきいそれをあげかやあげかうまてようら、か身にか、る事にてあらばこそ牛はうしつれ馬はうまづれあだなうき世はどんなものヒやと破れ扇のひやうしを取てうたはうたへまは舞へ釋迦のかか、はやしゆたう女くよい人々とおどりをおさめ玉ふみお人はこれを見て扱々御坊のおどりを久しかりで見ました歌のせうが一だんおもしろしと一度よつとわらひけりいさく此おもしろさよ町へ出ておどらん坊も同道アベレ一休心得たりと太郎次郎とア下人をつれ玉ひ己上四人の人々思ひくいでたちしが先和尙のしやうぞくよはかつたいかきの布あげづきん紙子のそでなし羽おりこしよは九寸五分よひやうたんをふらりしやらりとさげられけりわさざしは門前の彦大が一子お竹がしやうぶがたなをうねひらさしよひらめさわたして出たまふさておどりは五條の橋より四五丁西にありとてこ、ぞくつきやうのおどり場なりとてうちまじはりて爰をせんと、おどらる、彼二人のつれも見うしるひたい主従にこそ成玉ふ何としたまふらん足もともしどろにあり若き女のかたへ、らくところびか、り玉へば女もともよ土つかひ彼おつとが是を見てそつじなる曲者かなのがすまじといふま、よ大をよ上てそりか、る一休も心得たりといふま、に大はだぬきよはだぬいて大手をひろげてか、られけり五人三人取つきてあなたへのひらく此方へはひらくとおしかあしおし戻し、ばし捻あふ其おまに

頃巾早やふれどびければ紙子はうしろのすそよりもばんのくぼくまで引やぶり前後ふかく  
 よひしめきけりかゝる所へ太郎次郎は見るよりもまうせたりといふまゝに大どたぬぎで相人  
 のすねかど見ちがへておぼんのすねをむすど、り曳やつといふて引ばせよおぼんのつけよ打  
 たふれ腰へ付たるひやうたんも微ぢんに成て失ふけり大勢打よりろうせきはさせまじと我も  
 くとはしりよるやがて御坊におきあがり東をさしてよげらるゝ下帯はづれてけつまづき命  
 からぐしりのびて寺へ飯らるゝおかしかりける事どもなり

○都にて大富家あるもの大事のとむらひをしける事ありけるよ折節導師はいかなる人をか請  
 じ奉るべきと思案すちくよ暮しける其頃名たうき知識あまたおとしけれ中よもむらさき野  
 の一休和尚よししくはあらじと明日の法事ありければとていそぎ人を遣しける折よく和尚  
 御庵のちりそごらひ庭のさうぢしておとしましけるが少もあづまぬ御僧なれば心安く傾掌  
 し玉ひけるが思しよる事のあるまや、がてこづかい人は身をやつし手足よす、をよじり付く  
 たり衣をやとひもくづの中より出るやうよ身をやつし御門またちたまひ乞食のの、しると  
 く御供養の御施行そたべ御慈悲を下されよとどりくゝにのたまひけるあると邪見も腹を立見  
 たるしき奴原おひ出せよと下知しければ其とき下男二三人はしり出供養は明日の事なるよ今  
 日来ておめく曲者やとて元よりたれとはいざしらすいたりしや一休をた、さ出し奉りさん  
 ぐよてうちやくしふみたはしてぞ入りにけり一休とからさ命をやうくゝに助かり無さんの

しはさと思しめし紫野へと飯りたまふ明日よもありければ昨日のさまに引かへておられたよ湯  
 あみし玉ひて衣を改め召されつ、七丈の御袈裟をすそあがよ引かけ金襴まじりよ取つくらひ  
 もとよりしもしやうに見へ玉ふ一休御こし玉ふぞといひ込ば旦那大よよろこび佛前へこそせ  
 うじけりされども和尚す、み玉はすいやそれまでたまるまじ愚僧はこれ候とていしう  
 すよありよじりたまはせ旦那もたへて是と何とておはしますすあらいまはしやこ、へは  
 下郎の起なりこあたへとふらせ玉へとて手を引たて奉れば一休御らんじてしからは此衣よ料  
 供を給はるべし愚僧がたまるべき子細をしとて一首の狂歌をかく

わうバくの三十棒をめてられて

身よこれきたる蟬のぬけが

とよみ玉ひてこつじさも愚僧も同じ火と水おれ共きのふは棒をくらひ今日は御齋をたまはる  
 事偏に此衣の色が光るもゑなりとぬき捨てこそ歸り玉ふ

さて前夜御やくそくやたひくひは、やさと御はなしやせうかのまへにやた問男どの日  
 頃の本望はとげ其うへ後難をさへのがれされども其のちの一人もいられせして女房をむか  
 へくらしましたが此女房よ子あくして年の十二三年も家つきあきを人の命はしれぬ世あり  
 とて親類のうちより異見して手かけ足かけなりとめこしらへられよとす、めて三方よりの  
 さもいりとして土手町邊よかこひ置しがまたこの本妻しなれたよよつてすぐは御手かけを  
 内へ入おきて一年た、ぬよさつそくおあかいだいならすつひよ安々平産とりあげ見れば玉  
 のやうあめこさまができて是と末のこつものど一家一門いはひよろこび御よくろさま、で

御達者よとていつしかどのをさまは直し奥さまよついでつてうへ見ぬ女とあるしかるに此  
 御手かけはじめはおやさまとよめられたとき一へんかた付るん結ばれし男がありしに貧窮は  
 しれぬもの不仕合よて渡世もなりがたく一先江戸へ下りてかせぐべしとて四年已前にあか  
 ぬ別をなしあふさかのせき越て東にくだり三年が間あづまに住せむ仕合おもしろからずし  
 てたより音信もなし其のち親のうちには脊たけのびたる女子をかへおく事もなしがたくし  
 て爰も奉公分に出したるよか、る仕合とひすめのかげられしかりしよかの過おし頃江戸へ  
 下りたる男かとり登りていとまもやらぬ女房をよまがしくねたりか、れど三年を待た  
 るにまがひおしとてとりあげずこの男元より身躰ふらちも名外に足もためられず何れよ  
 か、りてありともとおもふ所に今の男と身躰よしあれば彼といひ是といひ女めもよくしと  
 彼のどころへ行てだんくをかたり尤我罪たより音信さると越度によつてかやうに手をさ  
 げ申事あればはじめの女房よまがひなし只わたくしよかへしてたまはれといふも亭主何か  
 ひさふの新内儀なれば念もあひ事やかへすといはじしからばもらひか、るからはかくとい  
 たした程にとけしきするを手代や中間どもよりあひた、き出してやつたじやまでされども  
 いさどほり底心よてつして無念なれば今日はた、しにのけ込ん晩はさしちがへるときたす  
 るを一門よりあひ談合してあつかひよなり命があつてこそと銀十枚より小判十兩までよて  
 かんになしやれといふを一貫匁までいとおもふ心があつてあか、かんよんせ老又亭主も  
 命よかゆる事なれば一貫匁や二貫匁やりたどて身躰のよいよさる事にてもなけれども出し  
 てぞむべきが然るべきよゆのところがかのしりん方とかく右の通りにてかんにんをらすは

ともかくも分別したいとつきはあしけるよしからばかくといたしとて宿よかへりましたさ  
 て其じふん東山近きはとりよ万日の回向がとじまり貴賤の参り下向引もちぎる間もなく、  
 んじゆの中より脇さしのさやとづして切こいづるもの今今の男なりしかるにかの亭主がま  
 めりたるを見かけての事あればやがてそれといふ間によげまわる何がこのだんよあつてと  
 内ものどもとあたりよつかあんだときよかの已前よ間男しふれた男をふりし参りあひ近  
 付なればよぐる中よかけらだて、あつかはんとせしよつきのけく難おく大げさよ切たは  
 し女がたき壁へたるかどそのうへよ腰かけて見事よ自害してはたました何とむくひはおそ  
 ろしいもの何のあやまりもなき出家を無言よころしたむくひが此やうにめぐりきてそのを  
 どともあやまりもあきに死しこの間男め命を大事よつ、みだまりぬて出家を殺させよそよ  
 見ておのがとがをゆづりて何のむくひもなふして今までぬたるよむくひ来てかくのとく  
 また取さへたる眞の男も甲斐もなく結句あまり太刀さきよて胸のあたりを手負しか當座よ  
 り死るまでもあく百日ばかりあやみてくさり死にありました何と悪因の業報とやたり其の  
 ち此はなしをば紅の茶やにて取くみたるとき付てぬた姥がえおしました此姥も姥でかの坊  
 さまの越度にありましたたればこそ何のせんさくもなくわたくしが命もたすかりましたと  
 たりやたが此姥めも出家をころさしてよくおのが命をかばふて居た事じやいづれもよく聞  
 しやれこのだんくの因果そのとら分くよは目よ見へぬと自然もくねんと此やうにつる  
 よは追つめられて死ると因果とが同じもので若きうちはいつ年がよつていつ死るといふ事  
 をよだ遠ひやうよ賢へはるう手のとらぬやうよおもへるよとぞるうち一日たち二

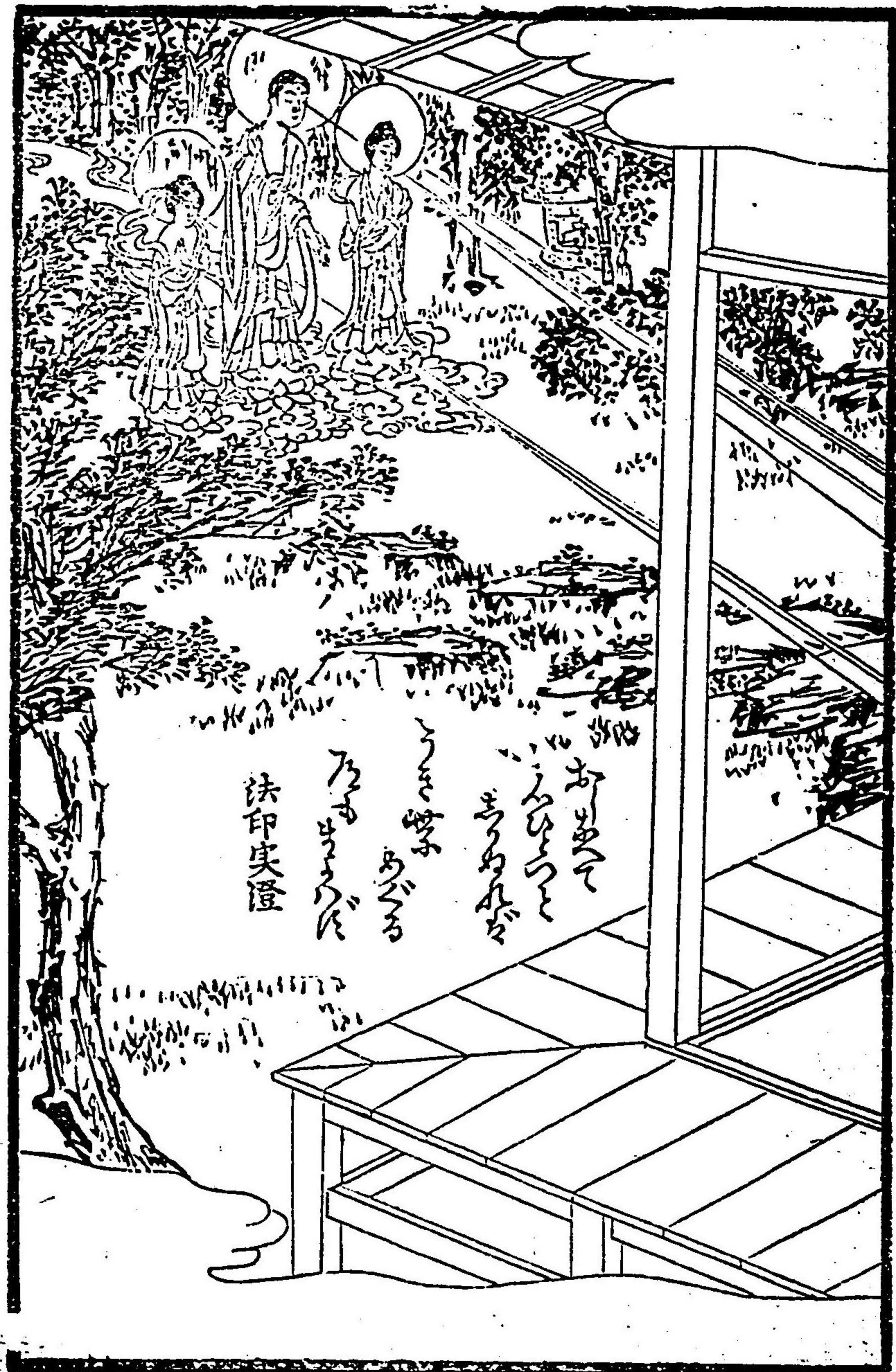


日たち今年が去年にあり去年が又去々年にありさて來年が今年よあつて一ツツ年がよるはどよ十といひしが廿よなりそれから後は月日もはやくめぐり心もせはまくなつてくる三十六歳をくるよりはあはすみやかにはや正月かこれはしたり又益か節句か朔日か晦日といふ内よ暮ては明て玉手箱つい白髪のを雪をいたいさこしかたをおもへば夏のよの夢よりみじかさためあさかたはしよりころりくと死ぬるをめぐりて歸くる人もはや空しくあつてあるは無くあさはかすそひまざる世界も見えりたる者よなどこへやら往て見ぬと思へば彼未來とやら來世とやらも日々ばらりくと果行くはどよもとや地をくもくもつよりてさうく借家もたてられまいとおもにちがひて無量無邊のひろい國かまて一人もつよりて居られませぬとて歸りたる者をしそこひ行ものこたくさんにあそこへも生れこ、にも鉢まきしてぬらりくらくらどうみ出すは一日のうちよ國々村々町々に何万何千何億よもせよ此世に生れくるはどの者よみな死をいでかあてぬものあれどもいつかといんぐわの道理も一度はむくわいて叶ぬもの也余所の人にはあれ程悪いとこしたるのあければ今に達者で息災で仕合もよふてゐらるればむくふものでもないかど必らおかもはる、なと事じやそれはくおそいかのやいかせひよ參ると心得よべしさて今の物語のありさまを聞て合点し玉ふべしたまへく姪欲の少い人あれば又妻子をふるそかよして邪見よあたるものもありか、る物は恨中より來ると、かれて恨の生れがはりあり成は姪をこの心物たりを悦ひ人々よあいせらる、そのは鷓鴣の中より生をうけあるひと邪姪をするものよ又あのが女房よの

のまはたされて親よあしくあたり不孝よなるはけつく姪のつみよりもまたふかしこれらのものは新舌地獄にちてくるしみをうくとも説せ玉ふ誠に三界よ人をつあぐきづなはこの姪欲あればいづれをやめ玉へしうしあがらどまらぬは此色のみちあればかたく往生成佛はなりやまいかどぞんじひふきのふやたる如く戒とたもち威儀をたゞしてや念佛もあらず成佛しがたき所のおのくわれらを助けまじとはいさ、か思しめさねども願はくばすこしよてもは苦勞をかけ奉るがうとまじ又おのが積犯の惡業つよければおのづからおのれと引さがやてちがひの綱よもれなんも淺ましけれど二百戒五百戒はたまたま先さしわたりたる所の御法度の邪姪をおかしてゐられぬはちをさらし玉ふあとや非也わるうさかせ玉とせどもすこしにてもあしき事はよぬうちよ心をもち扱そのうへの念佛題目のいよくすぐれて佛もうれまどおぼしめそべしたく種の字は今の因果のたね木の實よて有と日ごろ合点してござれこれまでにて邪姪のさたはみまじした其うちまたく御はあしやさんあなうしこく

○扱も一休和尚は活佛にてましくけると世上よ風聞しけるがあまりよいはんとて去人すけるここの間一休へ参りければよく來るとのたまひ虚空よ座し玉ひて御庭のまつの枝には腰をかかけられぬすくみをされしなり不思議ある事よあらずやとまかくとかたりければ皆人それと偽よこそ人間と生をうけかゝる自在のあるべきやと取沙汰しける事はのかよ聞めし一條の辻よ札を立られし書よ

佛法の修行まで道あり天眼通を得たて虚空に座せんとすれば則ち座し座せまじとあ



もへば則座せ幸通力自在得たり若うたがふ人あらば見物すべし

とかうれたる皆人を見えて此間人の評判しけるがく書せらるる上は更うたがふ所あし去  
あから魚をくむて生して吐と仰られし誠なりす左なる事までやあらむといふ人もありしが  
いやしくそれとは品かわりたるまですこびたる人二三人のつれだら一休の庵室へ行御札の表  
たがひはあるまじけれと直々をがみ申度ひてこれまで参りたりと申一休出あひ玉ひ中々の事  
天眼通を得ずいと仰られければ其中又すこびたるものすこみ出申ける是はいつわりよてあ  
るべし虚空の事思ひもよらす先この扇の上にあがりては覽われと申ければいとやすきとなり  
去ながら其あふぎの上へものらんと思ふ心出れば乗る今日ハ早天よりのらふとおもふ心なし  
虚空へものばらんと思ふねばのばら重ねては出われのばらんとおもふとき上りて見せんと  
仰られければ皆人あされて飯りける其中の人申けるこいかにして一休なり人のあまりにい  
はんとて天眼通を得玉ふといふをわろしくおぼしめしましめ玉ふありと感じて歸るとなり  
○或旦那さたりて申けるはこの御寺へ出入致し候人々申けるは話則の一そくもぬけたるかな  
ど、てわれらの愚痴あるをわろし何とも迷惑いたし候間何よても一そく御しひに示し玉へ  
と申ければ安事ありさうば参じられよと有ければ参ると何なる事まで侍る申すいや何  
なりとも佛の道にて合点の行ぬを尋られようしこまつて候とて佛殿さしてはしりいづる和  
尚おかしく思し召見ぬ顔しておはしけるせつあの間に走り飯をいづくへ行れしとのたまへ  
バ佛の道に不審あらば申せと仰せられしよと佛の道とは佛殿へ行く道ありとぞんじ一走視  
て参りましたがいふあるがてんのまらぬ事こそ候あの山門の遠りの松は巢をかけて候が何

の巢も更に合点まらぬを大方驚の巢とも見えて候得共しかとわきまへまひと申ければいや  
くからすこそ今時分に巢をかくれとのたまへばいやとて佛の御事御慈悲をたれて示し給  
われと申ければ其儀ならばはしとて持てのぼり見玉へと仰られければうのものいそぎのぼり  
て彼巢をわろし見ればあか鳥の子もあく何とも見えぬなり一休何あるぞとのたまへば何も  
中には御さく侍ると申せば

此の巢をわろしてみればからすよて

これよつて見たまへこ、が一そくなることおぼせられければ彼ものあかしく何ともつ申す  
べきこ、ろはあくと申ければ一休仰らるけるはそなるは我も汝も一則さづけしらすへき心  
のあしとしめし玉へバかのものおどろきさては一休和尚さまも仰られかたく侍るかど申けれ  
ば自心自佛と答へたまへばよて手をうつてかへり終に自得しけるとなり

○洛陽ある通世しやありけりあるとき一休の草庵へたづね行はじめて見参入奉らんよし申  
ける折ふし和尚御病氣よて此間はたれよても御目にかゝる事まかりならせ御用の事もどか  
くかさねて御出あるべき由申出さる、よ此坊主かさねて申やう御病氣のよし御尤ありしかし  
あから立ながら御見参入たさよしたつて申けり一休かゝる御僧もあつてまじといひて  
隠したりとおもれんもいかいとやがてたち出たまひたいめんしたまふ此坊主申けるは某は  
洛陽あまかりある坊主よて天台の法門をもちたのまくりけたまひていしかれども御坊へ  
すこし不審をたづねたくぞんじ参り一休いかなるふしんばしひや我等は愚僧の身よていへ  
ばいろはの講釋もしらぬべら坊よて返答申さんもおもひもよらざる事なりとのたまふ其とき

僧のいはくいかあるをりこれ草木成佛一休答へて云く卿木成佛よりなんぢが成佛をしるや又  
とんせいしやその成佛といかある所よかある一休なんぢが心よとへと答へたまふときやがて  
此坊主閉口して歸りける自心の成佛をもしらせしてあんどや外をたづぬる事愚ありたとへば  
盲目が黒白をあらとひゑんかうが月をのぞひよさも似たりそれ道人といへば生死の一大事を  
心よかけてむしのりんをたしむとするこゝ道人といへばいふべきにみのれが心をさへ悟らせま  
て外を求といふぞおのしとて笑ひたまふ

○一休和尚ころしも春の半のよなるよ花よこゝろをよせ玉ひて幾枝もあつめ花籠またてまじへ  
て酒なを参りこゝろもわのくどをよておはします所へ一休の旦那の奥がた参りけるよくこ  
そ来り玉ふとてさゝあどす、めおかしきとを御とをしありてひたもの酒のみて遊ばれけれ  
ば日もはや西山よおちこちのたつきもしらぬ御寺よ彼女房もべんくとはおし居ける和尚い  
かおぼしめしけんこよひと御とまりあれと仰られける女房のすけるとかりそめよ参りて  
あそび仕ひさへあよとやらん似合ぬやうよ侍るよ一夜とまりやすばうさ各やたちすべし其う  
へ夫ある身の事よいへばいかお心はさこおもひかなひがたく侍るまづ御いとますすとて立か  
へりしを一休袖よすがりひらよこよひとまり玉へと引といめ玉ふに女房やういす、では  
一休さまは生釋迦のやうよ思ひしがわらよ御心のありてとめ玉ふかや狂がるおはせかあ  
とすければ一休笑ひ玉ひて其方へ心をかくればこそ愚僧も是非よと止めすせ心かけぬ者が御  
とまりあれとすものかと仰られければ沙汰のかぎりや夫ある身が、る事侍るべきかとより  
切て奥に乗立うへりけるさて夫よあひて一休は佛のやうよ思ひそなる様もおぼしめさんがい

たづなる御坊ありわらに酒をす、先玉ひて今まで引と先刺さへこよひは一夜とまれどか  
あよ仰られけるうあそせの寺へ参り玉ふと二心あさいけんをくりかへしくすける夫は  
さるものよて手を打てわらひさりとては佛なり汝がかくいふも理なりよく思ひ見よいかある  
ものにて我をたのむ旦那の女房になれしくしげよ一夜とまれとあかしく出家の身よてい  
ひがたしよし一休和尚と枕をならふれば今生後生のうつたへ成べし我等をかね侍らせ急ぎ行  
て一夜遊ひたまへあかしくの誓言を我等のねたみ心とあしとすせば左あはば引かへし参るべ  
し御よろこびあるべしとすければ急ぎ参りてゆるく和尙をなぐさめ玉へとすければ女房  
よろこび一間の處へたちこもりおしろい口紅さつねの化たるがとく引つくるひ衣裳をかざり  
急ぎ興よのり一休へこそ参りけり一休はや寢玉ひしよ門はとくた、くおどろき立出玉へば  
かの女いかよも細々としたる聲にてさきに是非よ一夜とまれと仰られければ夫の心うた  
がはしくてふりさり立歸りしが余り御残り多くて夫よいとまを乞ひへば苦しからんとすもゑ  
おはつかしあがらとまりよ参りたるとすせば一休いやくもはやいやよこし御かへりあれさ  
き程はこあたへ心か、りたるがはや心か、らせひとや御かへりあれくとして門戸をかたくし  
先音もせせさりとては御なぶりひかとすけれどもあへて音もせせ是非あくうへりて夫にし  
くど語ければさあらんと思ひけること、て笑ひて天下老和尚也心うごくときは動かしうご  
うれざばうごかしたまはせめはやいやとて誠は行水の如き御心やいさぎよしとかく凡人  
にてはあしとていよく尋みける

○扱一休和尚の時代までは方々の寺々より七月十四日は大内へ灯笼をさ、げ、る大徳寺よる

開山大灯國師よりあありてさ、げしかば後々まで例はなりや先がたくありければ一休こひ  
つかしくや思召けんあるとき大裡へ灯籠をあげるとて狂詩を一首つくり灯籠にそへてさ、げ  
玉ひける

性靈今日出来迎 雨露直供三萬葉樹  
挑得灯明天上月 松明流水讀經聲

と遊しければ 帝親覽まし〜てまこと一休の詩なるものをやうあき灯籠をもとめけるあり  
自今以後大徳寺より何方の寺よりも七月は灯籠をさ、ぐる事あるべうらそと仰出されける  
とあり世の人これをさ、さても〜名僧かなう、る御心ざしにては定て御寺にも性靈祭り  
あるまじ若あらばさこそかはりたるとよてやあるべしいざ人々一休の御寺へ参りて見物し未  
代の語り句どもあすべしと四五人づれにて参り一休へ御目にか、や此間玉禁裡へさ、げひ  
し灯籠の詩浴中て是のみさた仕ひ定めてか、る御心ざしあひと性靈まつりも遊しや問敷  
いとすければいや〜われらと三界の衆生をおもふもる有縁無縁の悪鬼をまつりてし  
ぐの物を手向ひゆる廣大無邊なる性靈まつり仕ひと仰られければ皆人案は相違して此御  
寺あは見えずさそひが何れにて御まつりいぞとすければこれより四五町わさをかりていと仰ら  
る皆人すけるはとてもの御事に見物仕度い御人へられ下されよかしとすければさどく成事  
をいひ玉ふ方々や人までもなし我等同道すべし水ひけし玉へと誠しやかよ仰られければ皆々  
よろこび御跡へ付て行ければ東の河原へ御出あつてこれ〜見たまへとて両手をひろげ玉ふ  
皆々どことにていぞとさうと〜しければ一休は見玉へとてくる〜と舞ひ手をひろげたま

へども皆がてん行ざりければおの〜は見物かあるまじさぞといてさかすべし只耳にて御聞  
あれと仰られければ皆人あされて立居たり一休一越調あびて仰られけるは  
山城のうりやあすびをそのま、よ

たもけよあれや賀茂川の水

開玉ひけるが是大なる性靈たなにてはなきかと仰られければ皆人さても〜いやともいはれ  
ぬは意やとて感又たえてかへりける

あるとき嵯川新右衛門来て佛法ばなしなどしてあそびひけるに一休の仰らる、は今どきの  
出家心ざしうすく佛は五百戒をさへたもち玉おしどかやせめて其かき取の五戒をばよくた  
もつべきとありとのたまへば新左衛門すされけるは眞は沙門はすよおよば俗のうへよて  
もせめて五戒はたもちたき事にとすよ一休いや俗は是非あきと也出家にこもたせたく思ふ  
也去あがら目に見て耳に聞ゆるもの五戒をたもちがたしわつか一尺の扇さへ五戒をやぶる  
うへはまして僧俗生としいけるものたもちがたさはとわりなり新右衛門これを書き、て此扇  
子さへ五戒をやぶりいや中々やぶりたりこれ又和尚の出来口にて侍らんで一々どひすさ  
ん答へてさかせ玉へいつもの御願作のひかる口うけまわらせんとすければさらば一々どひ  
玉へ新右衛門とふて曰

如何是殺生戒 答て曰 竹を切て骨とはあさいるや  
如何是偷盜戒 答て曰 虚空の風をぬすまざるや  
如何是邪淫戒 答て曰 かあめと〜あはせせや

如何是妄語戒

答て曰 繪そらとをか、さるや

如何是飲酒戒

答て曰 開ててさ、んざいはさるや

これ扇の破戒ならせやと仰られければ今よはじめぬ口ありけれども一入ありがたくぞんじたてまつるさりながら五戒のうち偷盜戒のおん答よ不審すたくひ和尚の曰いかなるふしんいぞや新右衛門のいづく古語よ

扇是 日本扇

風 不 日本風

とさくどさど扇こそ日本のあふぎをうごのしめ風は日本ばかりとはうざらせ千里同風であるからぬすむところいかやとおどけて一句申ければ一休新右衛門とのたまふやわといふ音もなく香もあき人のこゝろよて

よべばこれふるぬしもぬすびと

とあそはしければさてもよきは口や先ほどよりの問答をほ六かしながら一筆あそばされどて書てもらひてそのまゝ、掛ものよさ、れけるとなり此かけもの都の中よ持たる人ありこれを開す

○或人一休にとふて云く何と和尚さま世の中よ化もの人毎よさどくふしぎとやものと覺えいさやうにていや一休答て曰いや只中よぶらりとこたへたまふこのおとこ大よのらをたてさても御坊はさこえ申さぬ御返事かなそれ人の物をとひうくるよ凡そ法こそ有べきよ中よぶらりといふあいなつとつぬにうけたまはらすそれは人をあぶりたまふか御出家よも似合ぬさふんや是非とも此上の子細をたづね申さで置まじ坊主とはいはせまじ飯訪入まんも御示現あれど

大よいかりやける一休この有さまを見玉ひさてもく其方はたんきあおそろしき人かあそなるのやうある人とはもの、咄しもならぬ子細は其はなしくのふといふ氣 んあり先よく合点しておみやれそなたはもの、不思議をさふもるよそなたへ幾度も申聞せる事あるよ同じ事を又はいひ又云おめさるよがてんのめかぬ人かあともおひて只今のやうに返事いたす事也それもの、ふしぎを立れそふしぎ不思議もなしと思へばふしぎ成事は一ツもなしました佛も神も有とあもへはかり無とあもへはなしさればあるにめあらせ無よもあらず扱あるときは中よぶらりといふ物ではなさかといはるれば此人手を打てかんじけるとなり

一休諸國物語圖繪卷之四

一休和尚の御弟子は雲知坊といふ者あり江菟に住けるが年月を経て師の御もどへとひらはんとて紫野へ参り寺門へ入らんとするは小法師禪をもつてうたんとすは何事ぞといとんとすれども物もいはれおにげ去ぬ是はいか成事やらんはるく思ひたちて來りしうおむおく空しく歸るべきかとおもひて又行とさよ小法師此うしといかさ思ふ事のあるやらん度々來といひてまづかたはらあ引入のなきおく其時我身を見れば牛あり心うき事かぎりあし是は日來の信施のつみふかきおるよこそとおもひて登勝陀羅尼こそしんせのつみをせうめつする功德あれとさすが聞置て誦せんと思へどもおらはざる事なればかおはせめて經の名ありどもとなへんと思へども舌こはりていこれぞ只そいめくばかり此牛は病のあるよや叫ぶくはず水もますますいめくと人言けれども心うきに食物の事をもちちわそれて三日三夜そいめさしが心ざしのつもるよや登勝陀羅尼といこれたりけるとき本の法師となりぬさてつなをときて和尚の御前へ行ぬ和尚仰らるは御坊といつきたれりといひ玉ふよ三日已前参りたりと答ふいづくに今まで有つるぞと、ひ玉ふよ馬屋よさふらひつるとて有し次第をうたりける和尚不便におぼしめして後登勝だらよを、しへたまへばいよく此坊主得道しけるとなり淺ましき事なりおそるべしとづべし

○江菟しやうれん寺は一休ははしましける時ある夜ふしぎの夢を見たまふ其隣家は角助とすもの、親善助といふもの三年已前に死けり今生は居るときはまをまく片目よて有しが一休へ夢

中にかたりややはわれと死て雉子となりたりいつ幾日よ地頭より御狩又出たまふさらば  
 我命はたすうりがたし此寺へまげ入事あらばかくしてたべ生々世々うれまををもとん我も  
 とよりぬぞんじのとくかた目しいたりしが其折からなれば定めてさじのかすも多く飛入る事  
 あるべけれど片目まいたるをしるまにたすけたまへとものおもひたるすがたにてなくく  
 かたると見て夢覺ぬあやしく思しめす所は次の日あんの如く地頭たかやう有けるしかるにさ  
 じ一羽寺のうちへ飛入ぬ和尚御覽じて扱ころの夢見つるさじと是あらんと取て見たまふに  
 彼かいひしとく片目なしやがてかの中へかくしてふたをなしきあらぬ体もてなし玉ふと  
 ころへかり人うち入て爰かして見れどもおらず力なくして出けり和尚此さじを取出して今  
 の世繼角助にしじうをくわしく語りたまへば角助なみだを流し此鳥をもらひ飼ころしたると  
 問はべるふしきなりし事どもなり

○江島に竹林寺といふ寺あり此住持生質脊低くして三尺ばかりありけるがさる方又思ひ入たる  
 美少年のやしをひそかまかたらひ折々寺へよびよせねんころせられしが何とかしてうちたへ  
 久しくきたらざれば此住持大氣をくさらかし何事もちちすてね間ようらしけるが下人少  
 しのふちやうはふわりしを腹だちまされ枕をなげうちしてさんぐに悪口しける所へ一休  
 もとより竹林寺としたしければ、からす來られ此体を見て是は何事をいひて腹立し玉ふぞま  
 づぐかんよんめされよ何とばしいたされしやとすされければ住持ひそかにかたりてかやう  
 くの子細ありて此ころと打たへまわらす何とぞしてよび度ぬが親兄弟の前をしのぶよし承  
 るが何ぞ天となきかこのつけしてうちたへきたらざるといかなる事とひ、やり度候御坊よこ

才人あればよろしく頼むといふに一休うちわらわ夫の何より易き事あり此ころ澤山にある  
 乗と錢と小糠とをすこしづ、紙よつ、みて遣り玉へ竹林それはいなる事ぞ一休やさる、と  
 なせよこぬうといふ事なり竹林さ、て一だんおもしろく候さらば明日のこれをもせやるべ  
 し今日は雨中よて猶さら心さびし幸ひ坂本より珍酒をもらひたり一ツまぬられよ我もたべや  
 さんとてたがひよさいつさ、れの酒宴なかはに一休たつておどられけるがせう歌に  
 君がこぬとてまくらがしろか枕な、げそどがはあしちくりんぐちんちくりん  
 さなちくりんじやはとにきのそんよなをどりはあんよさでちやせんやころさ  
 どうたひりあて、かゝられけりおかしかりし事どもあり

○其頃江島山村といふ所は六條なまがしどの、御領分にてありけるが久瀬又右衛門と申家老  
 せうよく心のもの成がゆる百姓をひたものせふり取あまつさへ農具までもとりつくすよより  
 百姓おのづから耕作もなりま在所に住まれずして一人づ、行方しれすのく程にやうく残  
 る百姓わづかになり何れもこれをなげさいかいせんとひしめきあへり其中一人がややうの  
 いかには百姓をればとて是はあまり無道あるしやうかお耕作の道具までもとられては何を以て  
 作りをせんしかれば在所ありてもせんなしとて死する命あれば此事を一先うつたへて其  
 後はともあくもならんともふいいうまどやける此儀もつとも一同しさて訴状を認むるに  
 およんでたれかれといふといへとも皆一文不知のものとてたれか書んといふものもなし  
 折ふし一休はち行玉ふを幸のとありとて皆々立よりて訴状を書て玉はれといふに一休さ  
 玉ひて何事の訴へよやと問玉へばしかぐのよしをかたるよ一休聞ていやぐそれは訴状



まてよと及ぶまじ是をもちて六條のへさ、げよとて歌を言てやり玉ふ  
又もまたとりてもさうぬ一村の

のふ具現らまきせやとり山

とよみて是をつかはされければ百姓ともう、る事にて中くとり上候事思ひもよらずとすけ  
れば一休いやくこれにてよし是非これをさ、げよと仰られて歸り玉るばいづれもいづれいあ  
らんどおもへるもみあ士百姓のあかいりともものより合なれば論れれどもめづらしき分別も  
田されば是非あくして放うたをさし上げれば六條のほらんありてめづらしき訴状かな百姓  
の分としてう、る事は思ひもよらず定て人だのみて書つらん有のま、よすべし若陳じなばく  
せ事ありと仰らる、よつて一休をたのみしよ一休これにて事足とすせし趣をす上げればされ  
ばこそ其おどけ僧あらではう、る事いんもの有とも覺えずと興じさせ玉ひて其のちは農具  
をもかへして百姓になさけふか、りしとぞ

扱も前冊についで聞談うたりつ先終り侍りしがまよかやうに座をおおじうし詞をかわ  
すもみな他生の縁とすそのはなす事もおほくあるひは役跡もあひたりとて人事そしりてかたり  
とさをうすは同じ事なぐら日のつるへとさらいかよ馬があひたりとて人事そしりてかたり  
あそふはせんもない事たがひよ罪ありすれども此やうを講談説法のままねをいたして一  
遍の念佛題目をどのうるはまづ悪縁でこおし座興もあひけよもよい事のままねをせいぶん  
したがよしわるひまねはなるものよい事とすよまねられぬつれづれ脚も此こ、るを  
かいておかれたとふりたどへば氣ちがひが丸はだかになつて大道をばしりあるくになるは

と氣のちがはぬ人があの狂人のまねをして見せんと丸はだかよなつて同じやうにこしりま  
わらばこれもどもに氣ちがひといふものなり然も其心之違はぬあれども形がうごけば先離  
を人よしても亂氣であいとといはぬたどへ内よ悪心があらふともま、身の行ひ心の持やう  
物のいひやうをまなびて儒者のやうに身をもては其儘じもしやといふものあり扱内心之俗  
であらふともわたまをそつて衣を着けさ袋かたちでもくびよ引かけしやくでうふつて出も  
ころさぬやうな形をもては御出家さまあり誰か俗人といふべきや然れば悪のまねをすれば  
悪人善人のまねをすれば善人といふものなりとかくよいまねをすべしよいまねとすたら身  
体のあらぬよ金持衆のまねをなされよといふ事ではあいせめて眞實より佛法はありがたい  
物といふ心はおこらずとも身のうへよまねをしてなりとも善根をつむやうの手立とす事あ  
り故よ悪僧都之名利の二字を拜見し玉ひて  
世をわたるはしと思ひてふみ見しよ

まことの道に入ぞうれしき

とよませ玉ふ僧都もはじめいたい佛道をそれほを眞から底からよの思し先さす彼禁中よお  
いて紫の御衣などたまはりしやうある事を手がらにし人よ學文者といえれたや知識とあ  
つて人に用ひられたやとひとへに名聞利養に修行し玉むたがいつの間よやら誠の佛心にか  
なひ心がうらびてやれ今までは名利にばかりの、わつて一大事の所をとり失ちはんとせし  
まよ急度心をと直して見れば今かくのつく大道心の心とおこるこしかたの名利を求め  
んくともふて修行したるがもと、ありぬれば世をわたるのしと思ひてふみ見しよそれ

伏見院御製

海のひかり

心のすまよ

ひらけりて

木のまはり

よ

海つ

ちのこ



あつち

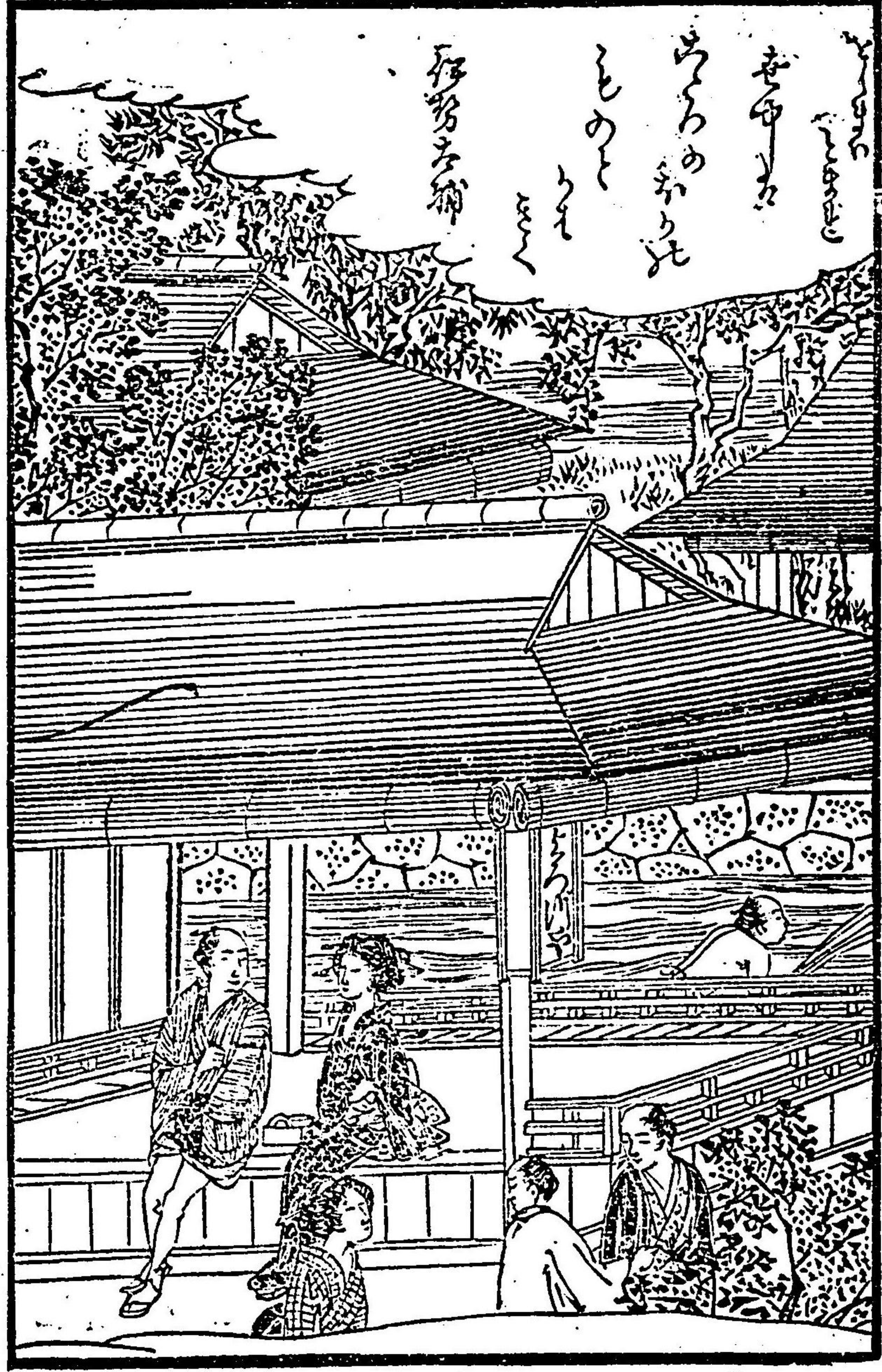
あつち

あつち

あつち

あつち

あつち



がたねとなりて眞の道に入たるは此上もなきうれしきよとさせられた此僧都さへはじめ  
の名利を心にかけて玉ひたどわり今どきの各何はと後生をねがひだてなされてもさあ今其方  
がくびをさるがそれでも佛道が有がたく思ふかと願をふり上たらばもはやすきと後生をね  
がひますまひゆるし下されとすす人多かるべしすれば身命おしよぬ佛道者後生がひとの  
いこれをもとより今生うら願て身をさかる、といふは今世からなる修羅道じやかうや愚  
僧をさなかくそれはどの信心はおこりませぬ其くらゐ成てもひかぬ佛道者はいまどき  
は先づらしい事殊々名利にさへ後生をねがふと有はとかくつ命かけるまではちうひ事名  
聞は成共佛道願ふがまねよきと思しめしひたもの談義寺参りもなされたがよし又貧きもの  
もあらばはどこすもよし心くく叶はと善根のまゑをし玉へまねよつゝあてのあしが御さる  
が次は仕ませう

○さて一休江州よましますときある寺の卒都婆がばけて八尺ばかりの入道よなくそどばの影  
ま立そふて居ける下部のものを是をおそろしがり用事をと、のへる事もならせ増てあたり  
へは猶参らぬいかある子細ぞと知人もあし或人和尚よかくとかたる一休その卒都婆を見たま  
ひけるに文字のちがひありさてはとてやがて改ため書たてられける或ときくだんの妄靈夜半  
のころわらはれ一休の前よひざまづきてあみだをばくくどこぼして曰我地獄の中よ入てさ  
まぐの苦を受る事たへがたしあはれ御僧すみやかに救ひ玉へとたいしはくどくどきける  
和尚のいはく汝圓通より出て圓通よいたる何れの所よか地獄ありやと仰らるれば入道これへ  
て曰いやさくちうを論せる事をかれたい此跡を見よ和尚のいはく其跡まつたく佛性同体へ

だてあしどのたまへば又入道やうしからば名を付てふべといふ一休のいはく本空道入解定  
とすさる、とき其ま、強きえいとしてうせよけり其後は二度出ざりけり一休にとひらはれ  
んが爲に來れりと哲人やあむりけるあはれなりし事をりけり

○あるとき一休沓氣よてこしをいた楚のびかみも自もうならす迷惑し玉ひいろく養生し玉  
へどもいたみやみがたしさる人來りてややう其せんきは鹽風呂があよよりもよく候其いたひ  
所をいく度もふき付けばやとらきて即時よく候私も此頃せんきさしおこりしを風呂にてふ  
き候へば其ま、やはらぎあくる日はもるくと立るも自由よいたし候間御内の次郎太郎はつ  
れあされかれよ其いたひとところをよくふかせ玉へとおしめるにさらばとてやがて鹽風呂へ入  
玉ふ次郎太郎もともに入りけりさてかのいたひとところをふけよとてふかせらる、に二人のもの  
やがてふきにか、りける其ふきやうましくしやうくといふてひたどうちたまひてふく  
とさに一休つくぐととき、玉ひて何どう合点し玉ふやらんそのま、返答に不奉公くくど  
これへ玉ふ次郎太郎もふしんよあもひけれとも主人の事なればいかいと問ふともあらせして  
うち過ぬある人湯よりあがりかたすみはにてつくぐと聞てこらすぢをよれり此人わざとだ  
まり居てあくる日和尚のものとへ行中けるは和尚さま夕部風呂へ次郎太郎を連させられ御入を  
されゆやされば此中とせんきよとめいひくいたし居る所へある人のおしへて風呂へ行てと  
めいたひ所をよくふかせよと有もへ夜前湯へ参り候其方は何として知り候ぞいやさる人の  
あしにて夕部うけ給り候しあれば世よの風呂をふくものも多ふかゝるものもあはさよあん  
ぞくしやうくとふけはふかゝる、若不幸公くとこれへ玉ふはさてくめづらしきふきや

うふかれやうと風聞仕候さやうにふき又こたへ玉ふついうなる事よて候ぞと申ければ一休は次郎太郎がちくしやうと云て合点するらぬ抽僧にもとより畜生よてもあしまたちくしやうといひる。べき覺へあししかしくしやうあるしはさかむしめらば彼らが奉公のしやうがあしきもあならんさるよよつて不奉公くこたへたる也とのたまへば此人おどり上り手をうつて感吐けるとなり

○江州堅田の浦は彌五郎といふ船頭一人ありけるおのがわざながらいやしさいとあみよつれこて一生がま穂の襖楫の枕をそばだて眞の道にうとくして心ざしさをあらあびすの九重の花にわそふどもがらよは、るかおとりおのづうらいやしきにあられていみじかるべき事を露しらすかたたくちよきおしへをばちくやまさればいとあさましきよすがありけるかつのよ身まかりて死にける妻子したひおげく事かぎりあくまであるべきにあらざれば火にやせん土よやうづまんとかなしみけるせめていかある知識をも頼みて後世のくげんをたすけたきと思ふ折から一休風雲の行術を思しめて浦のかたよねまりぬて四方の致景をたのしみでおはします所ま妻子これを見て衣のすそにすがりたい今うやうのあさましきもの、相果しがあはればじひをたれて彼もの、後世のくるしみを購きてたまはれかし生々の厚恩にて候べしとかあしみける一休ふびんと思しめし何より安き事なり印傳さづけ得させんとて此家よきたり玉ひ其し玉ふ松こそふしんなれ先々死人を米どもにつ、めよとてたこらに入て繩をのけ丸太舟にかきのせ湖水の波ようかべけるおきにいたりて聲をあげ高らかにのたまふやう

此後これ元來米俵をももち豆俵ももちま改はかたの彌五郎候なり

江河よしづんせうろくづのふとあも無果を得よ喝との玉ひ水の底よぞつ

○又一休堅田の庵あおせしとき梅はたへ立出給ひてて毎日つりをたれては魚をとりてまゐりけるよ御弟子兄弟の僧達これと不律なる仕合ありとて一休を一間のところへよび入口々よ異見しければ一休の曰各々は學門をするどて何事をのし給ふや我等は古しへの祖師の眞似が禪宗の學問と心得たりしかれば例なき事は仕らさいで古の例を知らずば見せんどもとより繪はさやうあり親子の繪老をつり給ふて喰ふ處をありくと繪よ書一首の歌をか、れける

いよしへのかまこき祖しは親を釣し

我とのほうて魚をつりてくふ

と遊しかの僧たちよさし付さあらぬふりにて居られけるみなくかの繪を見てさても奇容なる繪や見事なる歌の書ふりやと感吐ける其中よての老僧あざわらひ古の祖師の親を釣参りしてとて貴僧の若さありよて魚をつりまらんと鶴の眞似して鳥が水をのむといひし類ありさて貴僧はこの親子和尙のあびつりてまいりし御心根をしらしめしけるか中々及なき事やと笑ければ一休少もさのが赤色をものへささてく貴僧の愚ある心よて親子繪老を喰ふ心根がてんはまゐるまじそれ人は若もよら老たるもよらす道よあひては老若とあるまじ老たるが悟道せば門外のひく犬も悟道すべし世尊と三十成道とつけ給はる我等が祖達大師のいにしへを承るよある時般若多羅尊者の來り給ひて光明かくやくたる壁をぞ、け三人の皇子よ

見せ給ひつゝ、心をためさんとておのゝく此玉を賣としたまへんとやと問ひ給ひしとき御死二人は此の壁にまざるたからり又あらじとの給ひけり。達广大師は七歳まで一の乙皇子なりければ此玉を世賣りて賣らむらむ智光の珠こそ又なき賣なれとて彼玉をなげうち給ひければ尊者おどろきかゝるいとけなき身よしてふしきなる人かなとて則御名を達広と付られけるはじゆは菩提多羅とせしとや達広とは萬事に達して通じて見がさ立たるやうある人ありとの語とかやしければ悟道は老若よはよるべからずと一休手を打て彼老僧が異見の拙さを笑ひ給へば老僧も人中まで込付られ赤面してすされけるこかる口よまかせてすされたり如何に口めてはいふとてす、れさ心なきものなり貴僧は實正親子のあびまゐりし御心根をしり玉ふか一休答へて曰中々存知たり老僧す出る、は各、いうに思しめすそれ禪宗は以心傳心なりいかで親子の御心が知るべき親子の心の親子ならざればしりがたしとあざわらへば皆々尤と打わらひて親子の心とあかゝく凡人のしるべきよあらずしかま一休は親子よありて御覽じけるが一休ゆもおくせむ扱々かゝのゝはあろろある事をのたまふものかな我等は親子よならねども親子の心とよく知りたりと宣へばみあゝくそれのうけがたき返答あり一休さればとよおのゝくは此一休が心にありすなれば愚僧が親子の心になりたるかあらざるべしれすまじと大に笑ひ玉へばおのゝく陳咲門にてよげられけるとや

さて爰は善惡ともに真似もよるとす事の御なしすやそある人曾我ものがたりの淨るりあやつりを見物に行き彼十番きりの處があもしろしとのみ思ひこんで彼五郎十郎が筋を耐た所が不斷目よ見ゆるやうよあつたとき日頃念願あるものひとりきたりて酒よ夜をふか

してつひにそこよねて前後をしらさぬいびきしてねるよ此十番切のすき男居ねむるよ目がさへて寐られず折ふし彼表うちの五郎十郎が淨るりをあもひいだしてむかしの筋経がうたれしも此とくね入つらめあやさみよ兄弟が討たるところを仕方して見んとふつと起てあたりよ刀脇ざしあるよまめせ両刃さめて其方は工藤ではあいか我こそ曾我の何がしなり親のかたきのかさぬと刀をすらりとぬきあがらね入たるもの討は死人をさるよ異あらせかくもゆたかにねるものう覺悟せよと枕元の縁よあどりあがつてふみならせば此男目を覺し南無三寶とふんどしもせせよ、げ行て次の間の屏風の間に飛かくれてふるひくさしのぞき法とては人よがひならんさらゝ身に覺あし我は生たる鼠一疋ころしたる事侍らすと手を合て色青く其興を覺せしかはを見て此男もをかしさかきりなく是はあやつりのまねじやと大笑ひになつた各ゝよす、めるが此たどへなりかたきといふは八万四千のぼんのふの敵つるぎと念佛題目の利劍也かの類腦の中の大將無明や元品やといふ敵めは聲聞や縁覺といふ修行者さへ手よ余りまそましてこあた方の千人万人の勇力でこ行ぬ事じや是が行くらゝいあらば何れもまねよありとも各圖よ成とも後世をねがせられよ善人のまねをし玉へといふさめとともそれが行ぬにふせめてものともよいまねをめれよまねよ成ともすれば今の如く人たがふでござらうとさきもをつぶす敵もあればどこぞでは功をつみ徳をかさねて各圖の中より信實の道理があらこれとて真の道よ入事が有ぞとす事を悪心僧都もくれゝ仰られし事なりさて真似にも物事さまゝ多ければ此やうに經文のはしくれでもよみたり聞たりするまぬが其中でとよしゆもあむるまねなどせぬがよい世話よ佛のまねはすれと入す

ねがあらぬといふ金持のう位高な業のまねおのが分よ似合ぬまねがあらぬといふ事じや  
今の真似といふは其やうあけつかうな形そがたのまねでのちま只心内をのしく持せうた  
らによき取まはしをうつせといふ事をうたに

うしこさようつせばあきからつらざらん

花の色ある山ぶさのいろ

とよみたるやうようつそふす又まなぶと思はれ品形とめんくの生付實福は過去の業心は  
なぞ、かしてさよりかしてさようつさばうつらざらんと書たるをよく心得て真似をされよ  
と中事也今の聞やがひあきやうよ身を持給へ又まねよ付ておかしきはなし次にすませう  
○愛よ一休の時代は越川新右衛門尉親書といふ人ありけるが禪法よ身をやつし心をあやましけ  
るよ一休の發明ある事をさ、及びて遺師とたのみ奉るべしとてあるとき一休の草庵へたづね  
行楽の扉をばとくた、くよ折節和尚出たまひていかある人ぞと問ひ玉へばいやくるしうも  
いとす佛法修行の大俗まのりて候とすされければ一休はやとひたまはく  
なんぢのいづくの人ぞ  
國よは何事も待らぬか  
こ、はいつくとかしるや  
いかんとしてか染けるや  
ちよての徳はいかん  
原よは何事か侍る

答曰 和尚と同國

鳥のかうく雀のちうく

ひらさきに染たる野邊

月花朝かは紅菊柴蘭

宮城野かはら

水の流れ沈む風を吹て候

よき候やこれくと精じ茶をまのられよとて

なよをがあまおらせたくはあもへとを

達一宗には一物もあし

返歌

一物もなさをたまへるこころこそ

本來空の妙味ありけり

ゆされければ一休のたまひけるる間及びしより越川どのにて道心者ありとて感せられける  
さて四方山のはなし過て親當ゆされけるは少し承りたき事あり邪正一如といふ心得はいか  
るがよく侍るや一休問玉へとて邪正一如の心を  
生れてて死ぬるありけりおしなべて

しやかもだるる廣もねこも杓子も

又問空即是色とはいかん答へて

しら露のものがすがたは其まよ

紅葉よおけばくれなるの玉

又問色即是空の心

花を見よ色香もともよちり果て

こころなくとも春を来よけり

又問世法はいかに

よの中ぞくふてはこして寐ておきて

さてその、ちとしぬるばかりよ

又問佛法どいにか成心得をよしとし侍らんや

佛法はなべのさかやき石の聲

繪よかく竹のともせれの聲

と一々問ふ言葉の下に歌よみてこたへられければ親當舌をふるはかして聞及しよりたけき活僧かちと頼もしく思ひければいよく道を示したまはれいつまで語るも濱の眞砂のかずぐなれば先ほいとまやすとしてしほり垣の邊まで歸りけるが手をたどうち立歸りて一大事の安心わすれたる佛ははいかゞして成けるぞとすければ一休きやつはくせものかなと思えめしそれといと易き事也とてふんぞりかへりて目口をひろげてうくして佛はあるよとのたまへば親當おどろき活大禪師かちと心空及策してこそかへりける

二休和尚は奈良のたき木といふ處に折々はかこしませ其邊の村々を近衛どの、御領地にて有けるが左近尉といふ家老百姓をひたものせより取ける百状どもはこれをなげさていかゞせんといひしめさあへり其内老人すけるといかゞ百姓もあたりきつしとて武家とて、るか違べし御公家の長袖あれば訴へやて見んとて訴状をたくみける所へ折ふし一休鉢をひらきよ出給ふ百姓ども一休を請じこの訴状を御書下されよとたのみければ安事ありいかなる事ぞやとのたまふにしかぐの事の上しすければ長々しき状までもなし是をもちて御館へさ、げよとてよの中は月にむら雲はあふる風

近衛どのよは左近ありけり

とよみて是をさらくとした、たつうはされければ村々の百姓か、る事にて免多くたまはる事思ひもよらせとすければ一休ひらさる此歌をのみさ、げよと仰られて歸り玉へばせんかたあくこれを御館へさ、げ、ればこれ何もの、よみけるぞと仰出されける百姓すけるは薪木の一休の作よて俳諧ならばその放者あらでか、る事いこん人今の世は覺えせと興じ玉むて多くの免を下されける

さておどけたるはなしなれどもある座頭がとそで山椒よひせたるがあかしさにはさしたればさかしき男居あはせむしくしそのまねをして見せませうとて手元ありしさんしやうを二三うら口へいれてひこつふたつしわぶさして口をどがらし目を白く黒くあして舌をすゝるうち此男誠よひせて息を内へはがりして水をくといふさへ息いですころりとそこへたはれて目を見つめたるよ一座ありしほどのもの誠にひせたると夢さらしらすさてもよくにたり興る胸のまねが上手きような男じやうつりすすよいやノ人とはめて心よあまりながさまねじやとおもふうち炉の中へこけさるびたるにぞまだあさよりいま迄と思ひたるよ炉にてこびんをやさあまつさへじまんのはうひげけむりとなしたる跡を見て是はまごよひせたるやらんとよはかよみなくおどろきて水をのませ薬をもちひてよびつけしにやうの事よて息出まづあたま灰だらけなるを打てらひあせしてさぞやくるしかりつらんと笑止がれば彼男へらせ口よ何とあまり眞似がねんいにて眞心のくるしさを面目灰よまぶれやたと秀句にし大笑して座をたちました其頃を近邊よ此さたばかりをなして笑ひしとあ

り先此やうあまねはとんといふぬもの今どきの若衆はとかくいらざる役者またはものもらひの真似などをなし給ふ同じ口てんがうならばよみもの切はしでもあそこで一日こ。で一日聞て庭訓往來山高きが故は貴方は向て武道勝利を得ざる事子程子のいはく孔子が大學のいにしへあんどたとへ取集めわけもあふよめどもかやうの口てんがうは聞安し扱はうたひでも爰一町で十番はとうとふぐらむでも余の口まねよりこき。よしかりそめよもよい真似をあされよと申事也やうの事は子どもものときから親たちが心得てやういひさかしやうませ先入主人とすて子どものとき覺たるいとしよりてもわそれざるものあり

○一休丹波路へおもひき給ふある山里は二三日とうりう有けり在處のもの、すけるはいかにたひの御僧この郷境に二町ばかり南郷は天台の寺の候が此寺夜るあなればすさまじき家ありして色々ふしきある事どもあるより我すまんといふ坊主なし其子細と去々年たびの僧たのみおきたるよ去方より三年忌の卒都婆をたのまれ此坊主の書たるが其より時ならず火焔もゆる其火の高き事一丈ばかりあり郷内とすに及ばずりん郷二三里の外までも其うくれあしされば其坊主もさまぐ経多羅尼を修しとむらひしかどもあるまなければいつの頃か此事はづかしくや思ひけん夜ぬけて行方しれず故よこの里の女わらべよるよもなれば恐れて門せとへも出られず其のち或坊主を入置しに是も三日とこらへせして又出られ其よりわれ住せんといふひじりなければおのづからあき寺となりくちばてんこそ惜う候へ是はいかある事よてやあらん一休聞給ひてさやうの事といかほともあると也それは別のとよてはあるまじ定て卒都婆の文字の書らへしのおもならんそれかし書はしらせなば別の讀めるまじさらば同道すん

てくだんの寺に行見給へば法華經要品ありわんのとく文字一字ちがひありあらため書直し給ふ其文字にいとく十法佛土中唯一乗法無二亦無餘佛方便説とかきこれを立あかれようさねて子細であるまじとて和尙はそれより西國方へこ。ろざし給ふ其後は此寺無事となりよけりひとへに和尙を神佛の化現なりといはぬものなかりけり

○又丹波のそのべより三四町南の在所よかめといふ女あり母一人よぞ有けりその三四軒とありの喜八といへる者の方へ縁付のやくそくありしよ或者いかある意趣やありけんさまぐいひさかして契約變がへさせて隣郷よりあるもの、娘をよび入けり此女これを無念よおもひて病とあり終は死たりしが、の喜八あるもの、かたへ亡靈よとにきたりて恨をのべ喜八の首をしむる事たびぐにして其恐さかぎりあしきながらかのむかへし女めおそろしく親里へにけりこれり喜八が親類此事をあげき神子山ぶしをたのみてさまぐ祈禱をなすといへどもさらよ止ざりし折から一休國部にましまそよしをさ。て此よしをねがひしに和尙破地獄の誦をかきてこれを喜八が首よかけぬるべしまた家のうちよはるべしとのたまふを教のま。にをまければ其後ふた、び亡靈きたらざりしとあり

○又讚州三木の郡より二里ばかり奥の山里を修行し給ふに在所のめんぐすけるを修行者よ何國より來り給ふ人を此邊は草ふかさ山あれば元より佛をくやうする事あければまして御僧あまよは一鉢の慈悲をばこすといふ事もかつてしらす誠よ今生の罪人といふは我々が事をらんあこれよしばらく逗留ましませかし一偈一句の道理をもうけ給はり活佛にこそならせともせめて死佛ともならばあといひて四五日もこ。よとらめ置けり一休すさるは是より北よ



あたり松林の見え候いか成どころにて候や在所のものこたへて御尋おくとも上たき事にて候あの林よつきて御物がたり有押あの林のうちよ古寺ありしかるよむかしより變化ありて其形何ともしれぬその三人出よなくおどりくるふいの成法師にても三日と住せすして立のく也此寺古來より由來ある寺にて本尊は一刀三禮春日の作どやらんや傳ふ也尤什物もあまたあるよしなれどりの變化よてたれか住せんといふものなし御僧貫くましませばあはれ變化をもしりぞけ給ひて此寺よ住したまはこれにすぎたるよろこびおしどくハしく語りければ和尙さ給ひそれこそ一だんの望みあり佛道修行もさやらの寺をどりたてこそ本意とすべけれいづれもたのみやすはやく肝煎られ給はれどなたまへばいづれも大よよろこびてやがて同道し彼寺よともおひ和尙ひとりを獲して皆々にげかへりし、かるよ其夜五更よもなれば聞しにたがの老人音きて三人の變化出きたりおどりくるふ一番よ出しばけものがうたふをさげば

東野のつづとらとらし事やいつをらくともおもひもせいでせはねのそんじおし  
うちおりて終よりのへのつちとなるく

又二番目の化ものうたに

西竹林のけし三ぞくともあるうひもなきかたわらうまれ人のなさを得からむらな  
竹つばやしよひとりのぬるく

又三番目の化もの歌に

南池の鯉魚をつりたらし身や水を家ともじともしればいつもぬれくひやく

とく

どうたひ、たものおどりける一体一々合点したまひ何さまさやつらをしりぞけん事やすかるべしと思ひてさて夜を明し所の人々をよひよせ變化のやうをかたり先一ばん東野のばづといひしは是より東の野原馬のされかうべあるべし又二番は西のやぶのうちよ三足のよはとりあるべし三番はこれより南のかたよ池ありて其うちよ鯉すひべしこれを取集め給へとの給ふほどよ人々ふしぎにおもひそれくさがし求むるよ其ものみなくありしかば一体其品を弄りて翻經し玉ひしかば夫よりあつて怪しき事なく一体すおはちしかるべき僧を住持せしめ和尙はあはく奥へと心ざし玉ふよつて今にいたるまで一体を權者といはぬものをなきさて今ばんの要義は妄語戒のあらまし講談いたしやさんさて妄語とはみだりよかたるとよみてうそつく事をいませしめたまふあり經いはいく妄語の罪業生をして地獄畜生がさよ墮してくるしみをうけたまへ人間よ生るれば二種の果報を得る一よは多誹謗せられ二ツよは常よ他人のためよたぶらかさるとあり此心はうそをつきたるものは地獄におち又餓鬼道よおちらばは畜生ようまる其のひだ十年あらす三十年ならぞ百年二百年あらぞ何千何万年といふ限りあき間此三惡道をへ先ぐりそれよりやうく出てたまへ此世よて念佛の聲經をよむをちよつと耳にふれたる功德よよつて人間道ようまれきてうれしやと思へば今の二種の因果との誹謗せらるるといふて誹もそしるとよ誹もそしるといふ字よて人よひたものそしらる、むくひを得二ツに多く人のためよたぶらわさる、は切てはの盗人めよ何のかのどたまされかゆわかされて手よ持たるものも人にとられ當分我が身のよき事と思ひて談合

あゝの程の事皆かたりよあふて損をする又しても身軀を持てこなひてはたはれ手よ取事も  
 大はづよなりつゝに身をくづして路頭またいせむ身とあるを多人のためよたふらかさるゝ  
 とは説玉ふあり何れもこれを聞たまへうそを付て當分人をたふらすといおもへるもひくひ  
 が皆あのか身よひくふてあたまのあはるとのあいはみあ大きなうそをつく故に物を得が  
 かぬ事ありかりそめよもいつはりをしてぬやうよし玉ふがたしなみ是又付て商をかしやる  
 業のふしんがござるうそをついて當分後生がわるからふなら私どもは得うらみますまひと  
 あるによりそれは又なせよと、へばされべ商ひをいたすからはたとへ五十目はたす物も六  
 十目とも七十目ともやわはうらしい田舎男があれれば此男をぬか事はぬくもの有りまひと思  
 ふて十枚のものを一貫目とい、かけて九百目ほどは直を付ても末ふそくらしきうはをわさ  
 どして思よかけてまけるふりをいたし探同と都同國同いあかの内にては商の功者の行程此  
 やらあうそをすかけ又其外人のしらぬ内證算用ひの所でもわれながら是はかいて出るは  
 安閑のいましめをうけ玉ればこわいすさまじい睡を得ますなればこれ何とも了簡よあ  
 たひませぬがさふぞこ、をば談合なされ下さりませなんだかといふ人がござる此ふしんよ  
 もあふて叶てぬ律義をいひふんで待る此うそが罪よあるかあらぬかのせんさくは明晚いた  
 して聞せませう

○さて又讃州の柳原兵内と申す武士あり久々わづらふて醫術を盡すといへともさらには其しるしあ  
 し殊に重病なれば最期近づきぬ折ふし一休郷内ましますより其かくれなく内々殊勝なる御

坊のよしき、及ばれいそぎつかひを以て此度りんじらの一大事をもさかせ玉ひてすぐなる道  
 へ引入たまは、有がたかるべしとすつかとしける一休聞しめしれこそ易き御事ありとて其  
 ま、つかひとつれて参る、和尙とりつくらふ事もなくやふれ衣よやふれ紙子の所々はのり  
 とあれさあがらとひの身ふるひしたる風情もこれよりまたましあらんといへる風体よて病人  
 の間近くより給ふ家内の人さる日頃さ、およびし僧なれば何さま成佛安心至極のむねを聞べ  
 きと我もくど次の問よつめかけかうべをのたふけ耳をすましてさく所に一休あよとなく病  
 人の耳よ口をあて、大音にて曰ふは

汝すでよ末期や我も行人もゆく只これ一生は 如夢如幻

どかくいひすて、かへりたまふ何れも勝手に一門家の子あつまり情もくめづらしからぬ  
 一休坊主のすめかな夫りん終をす、むるといふ事は成佛かんじんをいひさかせて心安くお  
 こらすをこそりんじらの一大事をす、むるといふものなるにか、る爾は坊主のいふ迄もな  
 く皆がんせんよ人といふ事なりさて一狂の坊主かなと口々よすあへりか、る處へある出  
 家きたり此よしをき、いやくそれは何れもの不合点なり一休は心こそいへかやうの爾こそ  
 いかも殊勝よおほへ候惚じて禪宗悟道の坊主をきといふものは余宗をきとのやうよあるひは  
 念佛題目をきよへ尋ひどころへ御参りやれありがたき事のおはするなご、いふ事は禪宗をん  
 ぞはすさぬ也いかよもく右のす、めしもしやうやとすければいつれもはせめてさるこそと  
 得どくあし皆一同よかんじけるさて御内よ恩を深くかうむりたるものども御さいこの順死の  
 面々たれくゝなるぞと其用意とりくゝよひしめきけるを一休はのかにき、玉ひて其夜門前よ

一首の狂歌をたてられける

世の中も生死の道はつれなき

たゞさびしくも獨死獨來

明れば御内のものこれを見付てさつそく老士へもら出て何れもうちよりいかあるもの、立つらんとせんぎしける折から又かの僧やさる、この作者別人あらせ一休禪師に必定せり實尤の狂歌かお此うたはみあ人そひとり来てひとり死する身なればたど誰かれ冥途の供をすればとて便はなるべけんや五十人百人殉死するとも自業自得過なればめんくの罪障により百人が百所へわか行れて主人は付従ひ行ものにあらすさればあたら若君ともを殉死させんを歎きて此歌を立られたるならん今殉死せん命をまつて世繼の君を守護をし玉とんこそ御家長久あらんと理を盡してやされければみな此廟に同じつ、かさねて殉死のさたはなかりけりされば死するは定りたる面々は一休を活佛と尊みしハ斷りせめて道理あり

○爰は一休津の國の山里を通り玉ふは二人の山かつ有一人は伏倒てあり今一人ハ畑をうつ父子なりよりて見玉ふはひすそ毒蛇のためよさ、れて俄に死たり父をげくけしきもなく一休はひかつて御房そのおとする道のはとりは小家有これ我等の内ありそれよりめしを持きたるべし只今息子は俄に死したりさすれば一人の食ばかりもちて來れとすてたべといふ一休ちうくより玉ひてそれ父子の別はうあしかるべきがいなれば汝はなげきの色あさぞと、ひ玉へば男こたへていわく親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意は親子のちぎりは鳥の上とやしよも合て夜あけてどかへどびさるがとくわづかのちぎりの間なればななく事をしといふも也

一休それよりおしへの家を行くだんの通りを女房はつふさよかたたる、扱ことして二人のこしらへ置し食物を一人分さしおき只一人のばかり指て出る一休とひ玉ふは其死たるはなんぢが爲にはいりよと、はれければわらばがためは夫なりとすて少もなげく氣色あし一休仰けるはそれ世の中は死るといへば他人の身としてさへあはれをもよふすよまして夫あらばうをしかるべし殊は女性ハ、あさきものなればいかあるべしと、ひたまへば女こたへていらく夫婦契市人行合要事過方々如散とこたへて行過けりこの意は夫婦のちぎりと市より合てようをど、のへをのれば先んく方々へちるがとしおがへとふべきものあらせといふ心あり一休もふしぎの思ひをなしてさてものやうなる山家にかゝる生死無常のことはををよくあきらめたる男女もありけるよと感と玉ふ

さて前夜おやくそくやた先うそといふふさまぐささる其品々かちやそろへて一を道理をもつて了簡いたすうへすぐ此所をさくはと万事を通るかんもんのところくどけれども心をしづめてさ、玉へおのくの徳は成て永々の苦をぬける善根耳のあかをとつて、うもんあれ先釋迦如來世に出玉ひて一切衆生に法をといひて聞しめ玉ふ物にて設法の儀式で先禪定に入て今は何をといひ聞せたものであらふと分別あさるに如來の御心には手みじかよ三界唯一心の道理をうひて聞せんと思し召れてはじめに花嚴經といふ願大のおしえをとひて聲聞緣覺は説きかさしめたまひければおしつんぼのとく一さい合点せずそこで佛のおもひ玉ふと眞實のひねをとひて聞しめては結句衆生等が合点行きたらば氣に入やうは何ぞ方便をといひて佛のこゝろは思しめさねとも先賢分の氣を合して何成ともつべくと口よまか



せてはしぢかなる事を取付て無事を有と説める事を無事と説て見たりまたあるでもなしあ  
いでもなしと、きむかしの物がり今のばなしのやうに作りあして五十年の間御ときさ  
れた今時の人もさかしき評判もいかに佛の御ときなされたとても是のあよりあつそをつ  
かせ玉ふといふ人もありすそよまましくありといふがこゝじや先佛のうそとは今のやうに  
人機を合せてとよも角よを衆生の爲の事よよかれうし佛よあれかしよき心がおこれうしと  
善根す、めの爲に御ときなされたうそといひながら其うその御かげよりて三界の火宅を  
出るはしとなり生死のうみをこゆる舟とありてつるは極樂や寂光土や寶觀土をといふけつ  
こうなる世界へ生て苦をまぬがれて樂を得る爲のうそあれば先是をけつこうなうそで侍  
らざや然も世の中のうそといへば人をたぶらかしてなりともかたりてあつともおのれが  
ゆのよきばかり心よかけて先さまの身体がつふれうともくびをさられうとをかまはず他の  
害よなる事とうへり見す其もの、さのつかぬやうにうそをつきてたらずを世界のうそとい  
ふものなりうそといふ名は同事でいかふ心持のたがふ事は天地黒白のさうあるが有こ、を分  
別して見れば佛は人のよくあるやうにうそを説おぬしの身よか、こらぞ又ばんふのうそは  
已を立んとて人をたばすとのちがひが有は格別のせんさくさて商人のうそには先かけ直の  
事たゞし是は何を買者も見せよたちよるから覺悟して定て商人のくせかけ直をいふて有ふ  
ほどにこちらからもよいかげんよ直ざるべしとたがひよ合点づくなれば先よも少し合点し  
ぬかる事でなし然も是はあけ直と知りなからの上なれば世中のうそのやうにたましたぶら  
かすとのちがふて有世のうそと之をしらせぬやうつくなりまたたぬる所の見世よと合点づく

の上なればこそあけ直をしそら直なまを賣付しておくとこもあり其外をかけねがあるよ  
極るうへは少しもうそといふ物でいはいははどよかまへてうそとあもはすとを随分とかけね  
いふて利をあるが、んやうなりなんば正直は商しても利があければ妻子をいよくひ事なら  
ず或ひと旦那に損かけ拂ふべき所へもはらとせとあるがそれが結句大うそとなり大なる罪  
となりて人のうちらみをうくる事もくせん也うくすてもますく生馬の目をくぢるやうな事  
と余りあねかけ直といふほどをせんく商する人のこゝろもちよあるべきと也とに出  
家沙門をど高利をとれば珠數のまとしてそのま、うへりて其家滅す此のうきくらさを思案し  
て渡世のための事なれば未來の事はきつうひををし隠じてがいよあらぬ事なり人の爲よなる  
事隠しかる事おかしがる事面白き事心のやとらぐ事は少しも罪みよあらぬはとよとかく悪  
ひうそをつかせらる、あとのいましはでござるまた武士なまよは謀計など、や事あり是は  
又別機でござるがこれは追ておとあしすませう

○一休伊豆の國よである山人猿を一疋どらへ柱よしばり付なさけなくもうちた、さすでも打殺  
さんとすべきところへ和尙行あはせふびんよなもひ乞取てこなしやりたやふ折から夏の頃な  
りしが或夕ぐれよくだんの猿いちごといへるものをふきの葉よ包みもち來り一休をさし出し  
ける一休かわめく思し先し布袋よ豆を入れてとらせらるればどりて歸りかさねて又其袋よ粟を  
入てきたりみぎのこく和尙よさし出してかへりけるとあり畜生といへども命を助けられし思  
のはをよよくしれり然も人間の身として是非のわからちを知らぬのさるよもおとれりとかんじ  
玉ひ此事を旦那がよまてかたりたまふすこしもいつはりのあきとなりけり

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり常々百姓の衆をなす殺生をこのみ大酒博奕はいふに及ばず其外ゆるき事のこりなく大いたづらなるもの有常々猿をかひ置ける然るは猶助といふ一子あり嫁をむかへしもの懐妊よて七ヶ月といへる頃右飼かける猿何やらんすこしいたづら致しけるとて猶右衛門大いかり猿を柱にくゝり付七八日も食をわたへせせめければ終は終は飢死をしけりかくて此嫁十月に満て出産する處の女子目つき面つき猿のとくにして全身しかも五大分はど毛生てさあがら猿のとき小兒なりこれ全く親の邪見孫にむくふ處よして和尚のあたり見玉おしその物がたりおそるべし

○一休初發心のとき越後路へ修行より下りたまふは信濃上野のさかひ近きところに湯澤といへるところにてこや日の西山にかたひくもゑ宿をこひ玉ふ在所のものやう御房宿を求む玉ふならはむかふ見ゆる山中より古き堂ありこれへ行一夜を明し玉へさりながらかの堂には天狗住よしいひて住持するものあく久しき空院なりその心して行玉へ和尚それこそ望む處ありとてやがて行て見玉ふに此邊すべて山多くして陸奥の方へ峯ついで駒ヶ岳坂戸山清水白峯松ヶ岳あそびていづれも高山ありて物すとき土地なり和尚かの堂へ行て佛だんの上にあがり隠形の印をむすび心をしづめておとしけるところは夜半のころうへの山より人ならば二三十人斗の音してさゝめきわたり来る一休すはやと思ひ見給ふ所は堂のうちへひらがり入を見れば色白き、あけある法師を手でしよかきのせて小法師はら二三人前後をかこみて来りしが此法師小はふしばらを庭にをひ出してあんぢらばあれにて遊び候へといふかしくまつてばらくと外へ出て遊ぶとき此僧一休を見てそれにかくれ居ゆ御房これへ出られいへといふ

一休さては見付られたりと思ひて何の用よいやとすさる、いや御房の隠形の印のむすびやうのわしくもゑ見へやなり是へおはしませおしへやさんさらば物見玉へ所詮なきやつばら見せやさしどおひ出したたり先印むすびて見たまへさらばとて一休むすびたまへとよし、只今は見へたまはぬぞといふてその、ちと主従どもようちまじわりて舞あそびあかつきがた奥山へのへりけり

さて武士の謀計とすはうそに、たれども左はあらざる道理をおこおしやさふ侍りとさらうそをつくは盗人と同じ卑氣なれども敵をうつは謀計と智略とていろくこかりごとがあつて随分色を見とられおたばかつてうつ法なり討負せると其うそへに大國を納め名を上手がらものよばれて官録にす、ひの見事なるなりてうと商人のかけねをいひても内をまもり外よむかつて損をかけぬは手がらと名付捨れたる家をもたて人をすくふはかへつて善根となり商人にも色いろありて已に入よくあらんと利徳を心にうけて人の損失をあたはせ手前へとり込む分別ばかりするもの一旦の依怙ありといへども終は日月の御厨をかちひるものありとの託宣をわすれおわれも仕合あし人をよくあし平等あ世をわたるべしと心かけたるかよし人よ損かけて已が仕合をするはいろ品こそかはれ二樹二種をつかふも同じ罪をれバ商の内よもこれらの事はせぬ事なり是は人よしらせせ目をくらますもへ買ものもしらすかけねは合点つくなれば人もしりてねざる也かくすと明すとあつわれて有どのちがひよて罪よならぬといふ事明白なりさあこれではふしんがはれてとさならふ

○一休關東心外寺にしばらくおはせしが此住持もそのかみ同學をればむうしよしみを思ひ種

走したまふあるとき一休とせんのおまき客殿も出て四方をながめておはする折かみ地侍と覺しき人供人四五人のれ來りて一休はひかひかに御坊此寺の寺號山號はあにぞやと一休こたへて山號は別法山寺號と心外寺とや貴殿はいかなる御方とてましますぞ某は矢奈木雪折とやて此邊近き在所の也此寺をかねて承りおよびしまよ參詣なりしかるよめづらしき寺號山號なりそれ三界唯一心心外無別法にして心の外法をしいか成をか是別法心外寺とたづぬるよ一休とりあへず答へていよくそれ柳の枝は雪折をしいか成か雪折とこたへ玉へは此侍大よかんじさてもく答話かしてき坊主か我等は内々たくみてさへさしあたれば失念する事あり又はうつて出さる事多しそく時にかやぎのへんどうせられし事あつばれの御坊うなとぞかんじける

○又御雲水のころ駿州富士郡大石寺は知音の僧おはすとてたづね玉ふに互よあつかしう思召しばらく足を留め玉へとて少しの滞留ありしより近村の凡俗を樂め寺僧の法談をどし玉ふを助請なとありし折より隣り村は村山といふに喜兵衛とて大百姓あり常は隙ある身あれば殺生のみ樂みとせしが庭先の柿木に鳩二羽來りどまりしを得たりと鉄砲とり出したらちち一羽をうちおとしけるよ一羽の鳩おどろき飛去りしがまた元の枝へきたりとまりしを又も玉をこめかへ同じく打落せしがよと一休和尙の法談を思ひいたして鳩に三枝の種ありと聞しがよさしく此鳩はつがひのはよとして暗をささへうちしや雄を先へ取し事や残りし鳥の元の枝へ來りしと死を共よせんぞ我が玉さきを待し事うたがひおし切々鳥だよも夫婦の約あるものをまれに人間とらまれながら殺生をこのみ是まであまたるもの、命をとると樂しみと心得し業因のはよ

なをそをろしやとたちまち發心して一休のもとへはしり行若きよりの我があやまりをざんげして御かみそりをさづけさせたまへとて其座にて剃髮染衣の身となり全證居士と法號をうけ明くれ念佛三昧に入八十有余の年齢をたもち子孫榮へけるとなり其とき法名を下さる、とてこ、ろよりくひよりけたる傀儡師

○さても因みし御はあしやさふ鶴といふ鳥はくれにおよべば親子ひとつ木に宿ををし親鳥のとまりたる枝か三枝下なる枝あらでは子鳥は宿らず又鳥に反哺の孝ありといふ事もありこれは生てより百日が間の親鳥にやしおこれ百日にみつれば親と同じ形とあり巢をはおれ餌をひるふなり其後百日が間親鳥へ餌をく、先かへす鳥なりよつて昔より古人の文にも出たるぞかし鳥よさへ箇様の禮孝あり人間とらまれて忠孝のふたつは大切につとむべきの第一なりや、もすれば不孝不忠のもの出来るを神も佛もかあしと玉ふて鳥にさへおとるぞと示し玉ふほどに鳥にをとり玉ふな形こそ人よ似たりとも人とはいひがたき必ずわすれ玉ふを古歌に

父母につかふあふぎのかなめから  
 したいくよそる廣ふなる  
 何事もあやの心にうのへさる

○越前の府中よ長野銀助とて馬上の名人あり一休福井より上り此府中よ二三日とらうりして萬をとり行ひ玉ふる後銀助さ、および御齊も上申たしとて和尙をむかへ御齊もすきて四方山の

ものがたりのころさる方よりはね馬を曳てきたり御六かしながら此馬を只今一馬増せめて玉はれど中にやすき事なりとてやがて馬引よせのられしが此銀助と申は元來せんきの病よて陰囊大に腫たりけるが鞍の前輪につかへて事のはかのりにくきやうすを一休見ておかしくおるひ

はね馬のまへわにうゝる大ふぐり

きんくんだりんとこれをいふらん

とよませられければ銀助大に興じけるとなり

○又下総國相馬郡を通り玉ふ頃和知川といへる水上に大ぬまあり此近村にあるもの、妻十二三歳なるま、子ひすめを右の大沼のはどりへつれ行て此沼のぬしに申けるは此娘を其方へ参らせ御よし参らせんとたびくひひけりあるとき又件の沼へつれ行かくのまくいひけるに俄に空すさまじくなり雨風しきりよして沼の水立すさまじき事かぎりなくいそぎ家よつれ歸りしは物のあまより追くるやうよおほえければいよくおそろしく思ひかり娘父に取つき日頃我等を沼へ母のつれ行いひし事をかたるに其夜大さある蛇來りてくびの上の舌をうごかして此ひすめを見てはしばしくありてはうせぬる事度々なり爺親此事あんま思ひいかゞあらんとあげさかなしむ其頃一休同國まします事中國にかくれおければ知識と聞たづね行因果の子細を語りあかしおきたを流して煎ければ一休さても不便の事やとて猶もくはしく尋玉ひさらば我文を書いて得させんかさねて蛇きたるとき此文をとちへ聞かせよ二度きたるまじとて其文よいはく

此女我女也母繼母也無我免爭可取

かくとなへさかすべし重て來るまじとらさてつかはさる、此文の心は此女めは我子なり母はま、は、あり我かゆるしおくてはいかでかとなるべきといふ心なり男よろこびくたんの蛇の來ると侍ける所又れいの如すさまじくして來るさればこそおもひさづかりし文を一々とて又聞せしかばたちまちさへて失にけり畜類といへども物の道理を能わさまへ二度來らずとや傳へ侍る

前のつぎをやませうさて人間といへばおあるじものかとおもへば人間にもさまざま品位にちがひ都上臈といへばどれもうつくしひかと思へば田舎にもおあるも有佛といへば一佛にかざらす十方の芥佛も五十二位のしや別がわかれ其外も名の同じ事でもさまざまうちがらがある是を同名異昧の法門とすすまはすは五迷といふ佛の身より血を出すとがも其内じや釋迦の身より血を出したるものは彼提婆といふ惡人大きな石をなげて指より血を出しそれもへ地ぞくへおちられたそれでわるいもの提婆といふありしかるに釋迦如來の入めつるとき耆婆といふいしや何とぞ今一度蘇生玉ふべきかとさまざま療治の余り針を刺あしよたて、血を出したさお提婆があくと同じやうに地獄におつべしと思ふ所は案に相違し結句血を出した功德よつて天上へ生れて勝妙のたのしみを得た爰をもつて合点したるがよい尤佛の身より血を出した事は同じ事なれども提婆と佛をそれ見て血を出し耆婆と御いのちを、しみて血を出し取たり血をいだす事は同じ事で心が格別あよつて地ぞくと天上とのちがひは出來るまづそのとくうそをつくは同じ事でよい事のため善根のた



めにつくの同じうそでもよいぞといふををしめさせられんがため提婆をば地をくも落し  
 きばをの天上界に生じさしたるものじや是はまづ經の心じやうそのついでをつかいでもの事  
 はつかぬがよしさい分どりちぎにつとめたが常分いつはりかさりたるやう見事なけれ  
 共神佛の御心よかなふなりかなへば現世には福とくを得後生ははごえらくへめでとふ往生  
 し成佛をとげ常樂我淨の四とく波羅みつよのぼりをしやはしやかわいやの念願もあし常住  
 不退微妙の設法ちやうもんし、んぐますくす、み後のおのづからまた衆生利益の  
 もおこり玉ふべしあらうらやましの境界や南無あみだ佛くさて此度おのくの望よま  
 五戒誹談をあらましのおましたとかく大悲經の中の種といふ種の字をわすれず惡いたねを  
 まかぬやうよきたねをまかせられようし今一冊は愚僧がこゝろの法語なり皆人この文  
 をみて邪見外道の思ひをなして直に活佛とあり給ふおしえを書のこしませう

○こゝに常務徳念寺と申浄土寺あり住持の長老の旦那にて有けるがいかにおもひけん先祖より  
 代々浄土にていかに不計禪寺へ参り久しくわづらいて程なく死けり其子すなごら禪寺の住持  
 ゐんどうを頼むよしをか徳念寺はのかよき、て中々先祖よりわが旦那さまなごら禪寺の住持  
 をなんぞや禪家へわたしてゐんどうさせん事先代未聞の恥辱なるべしたとひ此事は於てこす  
 くびよおはふともわが引導せんものをと思ひ定て在所のもの其外あふれるものを二三十人斗り  
 かたらひさちんよあさんどひしめくを此よし禪寺に聞えしかばいやくさやさあ六かしき死  
 人を取おかざるどころ何かひくるしかるべし入らざる事ありとて打すてぬ三十五日のとふら  
 びすさて此徳念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事を口ばしりけるを何れも旦那衆めいわくし

て座敷半を作り少し入おけば半をやぶつて出尿をたれては手に、きりあるひと顔あぬり又こ  
 已が食する飯器も入て在所中をもて歩行丸裸あり若ものすんぐにくひさき家々へとび入  
 人の妻子をおし付うち倒しなごしてさまく悪むるく、るむけるほどに終にくるひ死し、  
 けるがやがて火葬しけるに石おを打くべたるやうに黒くありけれども灰ももならせふ  
 しぎにおもひ炭木を山のとくにつとて焼ども少しも焼す弟子もこれをきて大あおせろきこれ  
 只事あわらすいかはせん評議あす折から一休和尚其ころ常州にましくけるが或人の申  
 やう上方より一休和尚といふ知徳の僧下りわたす此和尚子細を尋ね見たまへかしとやけ  
 る弟子坊主幸の事かあさくばとて弟子一休を参りしうくとやける一休さ、給ひてそは不  
 便のことあるそれ佛法とやば人我の相をとめて心を納るをもつてせんとすま去て僧法師は  
 大じひ心をもつて専らとして人をおしおるものある愚痴加越よしてかバねをあらそう事生  
 ながら犬も似たりあさまさま次第ありそれかしたちまち灰にして参らせんとて諸行無常の四  
 句の文を書たまひて是を死人のうへえあけかけ玉は即時灰とあるべし早とくどあれ  
 こ添をしとてとりて踊りあふすばりたる死人の上へなげかければあぶらをかけてやくが如  
 くべらぐと焼て怒ち灰とぞありよけるふしきありし事ともありさるよとつて和尚を佛の再  
 來といはぬ人こそなかりける

○一休北國より京都へのぼり玉ふとさ越前敦賀の宿をうち過ういづの山中一宿玉ふが何も  
 のかいひけん今こひ此宿よとまりしと都名高き舞まひの大うしかよていまは入道して世間  
 をすて諸國を修行し玉ふと承るいさく方々みな参りて一ふし所望せんはいか皆々是は一

だんの事かあるとて大勢旅宿へ詰りかけて一休は對面し御坊をうけたまはりいへば都がたまたて舞の  
 大かしらとの、よし遠國遠里までも其沙汰かくれなし幸これは一宿し玉ふこそ後のかたり  
 句よあし申さん一ふし舞てさかせ玉ひいへとせめかけてすければ一休は大に迷惑しこれはお  
 めひもよらぬ仰かを見玉ふとき坊主なれば經陀羅尼あまは少しぞんじたるが其舞といふもの  
 のさらにしらすと断れければ在所のものともいや／＼にどのたまふともたゞ一ふしの所  
 望ひせひ／＼御舞なきありバ今宵の御やどはうあままじいか／＼とせめかけて所望す一休  
 さ／＼とそれと迷惑千萬さだ先て人ちがひなるべしとさま／＼のび玉へども皆もんもうある  
 里人あれば更ふ令点せま是非とも／＼と所望すればしは案じて愚僧けつして其舞まひよて  
 とかくいへども一ふし舞さればはかへりなくばせんかたあし愚僧若さききに高館といふ舞を  
 少し見覺たるがおぼつうあく候へども一ふし舞て見申さん先鈴木の三郎が紀州藤白より奥州  
 衣川まで付し所を少しまひすべしといふまは在所ものたかだちが何やらんしらすれども早く  
 くといひけるよ一休座をあらため扇をてうとうちてさる程やす／＼の三郎しげ家は旅のし  
 やうぞく光されつ、藤白を立出で奥州さして下られけるはどにくだられけるはど／＼といひて  
 いひて何べんもくだられけるはどよとばかりくりかへし／＼すされければ里人等はふしぎし  
 ていかに御坊さきはどより同じ事をくりかへし／＼のたまふといかゞの事よや早く舞をまふ  
 て見せられいへ一休さあらぬ顔よて三郎が紀州より奥州まで七十五日の日數をかゝりて衣川  
 へつかれたる事あれば先くだられけるはどよを三十日も五十日もすつ、けよしてそれから衣  
 川よ着しての舞をまひて見せ申べしおの／＼も此處に入九十日逗留して衣川の處をたまた

ふべしと宣ひければいづれも顔を見合大にあされしはらくの間さへくだられけるはどよひて  
 さいくつし侍るよいかでう七十五日が聞きく事はなるまじとて皆々家よぞかへりたるとなり  
 是も一時の才智なりと人申あへり  
 ○今出川通よよしや加齋といふものあり兼て和尙とまじはり厚うりしがうちつゝいさ用事しげく  
 久しく和尙のをもとを尋ざりしかば心よやか、りけん文をした、めて此頃ハ用事つとひ候もえ  
 御見舞もア上せぬふさ／＼やいづれ近々御見舞ア上るあまとはりの文をつかはしける其返事  
 に

見舞とて見まふてくれぞ見まはせと  
 よしやじよさいと思ふ身をらづ

とよみてつかはされける加齋これを見て御坊の今よはじめぬかるさ御事かなとかんじけると  
 ぞ

○一休和尚高野山よ看り玉ひ四方の山々をあがめてさても聞しより聲さけしきかあどあがめお  
 のしけるよ高野ひじりども立いでさて一休を見ていかある人ぞと尋ねければ愚僧と名もあき  
 道心者よて侍るが此山はじえて一見仕候えは余り風景がおもしろく侍ればこし折の詩か歌う  
 一首つかまつらんとぞんじつ／＼として侍るの玉へはひじども一休とは中々おもひもが  
 けねばしはらしき事をいふ御房うなとまじよいえるめくらの垣のぞきそぐちの囁て心あくさ  
 ひとやその身はかゝみてこそとてうそさむげある形ふりよて珍は此山の名産高野がまそりの  
 刃よりもうすきあり付にて細首のいとあまき体よて詩歌を繋づるといひきたりと口よま

やしめ笑ひけるよ一休耳もかけ空うそふきておはしけるがやうく一首仕りたり硯紙た  
まこれとやされければ何一首出来たるとやさらは拜吟仕るべしとうち笑ひ硯紙を出しければ  
一休筆をとり彼東坡居士が經山寺の詩を山がたよ作りしを例として

山秋落葉	山高近都卒内院土進空	山春開花發空	山迎連峯報佛心亦	山平幽臨化佛惱亦	山夏涼風煩寂	山冬索雪
山高近都卒内院土進空	山春開花發空	山迎連峯報佛心亦	山平幽臨化佛惱亦	山夏涼風煩寂	山冬索雪	山冬索雪

かくのこく即時に筆をとりさらく認玉へばは山のひじり大よかどろきさても形容は似  
合ざる見事なる筆跡といひ又目おれぬ詩の体かなと開たる口をふさぎうねさて先刻は皆  
々よしなき事どもをいひては僧をどづかしめし事かへすぐもはづかしうこそいかなる人ぞ  
御名をあのり玉へと口々よやければ其詩の下よゆとのたまへばまことよ小文字ゆが何一とか  
やぞとたづねける其中よ一人のひじり眉をしはめ此詩の筆跡をよくく見るよ京紫野ある  
一休和尚の書なりさるから一としるされたりさればこそ曲者ありとふり歸り見るよ和尚と彼

方へ下向し玉ふひじりたちそれといめまぬらせて過言をわやまれとてはしり付て引といめ一  
休和尚ども存せずして段々無禮をすたり御免ありて先々坊中へ入らせ玉へどるんぎんにのふ  
るよ一休いやく何も断り玉ふべき事にとさらくなしとてきげんよく坊へ歸り玉へばひ  
じりたちさまく馳走をまぬらせけるさて厚く禮をのべ下向玉ひける歸りて一人のひじり  
やうらか、る名僧また登山し玉ふ事まれあり願くば大師の御影に贊をたのミすたらばいかよ  
といふよいづれも尤と同じさらば今一たびよびかへしまぬらせんと又追うけ奉るよ一休は  
何事にやと仰らるればしかくのよし中に一休わらひ玉ひてそれはどの事また立歸らるとも  
なるよ也御影を懸持きたられよとて道ある茶屋よ休ておはしける人々おどろき大師の贊を請  
ふよ立ながら思索もあくあさる、事聞より大博學の祖師かを舌の根ふるひけり扱大師の御  
影を持来りければ  
弘法大師活佛死ねばはらの土となる  
と一筆にさらくとした、め玉ひて下向し玉ふ人々ふかき事もありといそぎ登山して學匠に  
見せければ格別のおどけ事なりしかとまたひじりども口を得ふさがざりけるとなり

二休諸國物語圖繪卷之五

○さても一休和尙能州越川村の草庵くさあんましませし頃泉水のき、に水の上へおよんで極たぎばひにぬたる松のありける獅子しし衆をのつめて此松を真直まなぢに見るものやあるとたづね玉ふ僧々立たかひり入かはり見られければとも極たぎはいの松あり其とき越川新右衛門しんえもん参り合せてわれらいかよも真直まなぢに見ていとすされければさて如何いかよと仰おほめればまことよいがみてこそいへとすされければ和尙手をうつてよく見られたりさて五十則いそをゆるそと仰おほられける

○和尙熊野山へ御参詣ごさんぎまし／＼て本宮へあがりたまふころしも春の半ななれば山々谷々の櫻都さくらみやこ三月の頃よりもいと目出たかりければ拜服らいふくまうちのばり四方の風色かぜいろをながめまし／＼ける處へ和尙の人まかり出て客僧きやくそうはたゞ人とて見参みさんらさすとすければ中々なかなかわれられたゞ人にてはひはす御らんごらんいへ出家しゅつがまていとすされければ彼僧かそうこそをもつふしこは興きようがるは僧そうめなどひとつふたつと物がたりし玉ひて和尙この僧そうはゆしはあせる者ものとおぼしめし高野山の時の事をおぼし出させ此山にても一首いっしゆを作りてあぐささんと矢やたてをとり出いし／＼と書かて彼僧かそう見せ玉へば其ま、神前かみまへへそなへてさて／＼御筆跡ごひつせき見事みごといふ都人みやこびとと見すはひがめかどすければ和尙答へてよく慰なぐさめられたりわれは都紫野の一体いったいといふものなりと仰おほられければさてわかねてちつたへし和尙よてましますかとてかの神前かみまへよま、げおさしをとりきたりとても事の事ことは御名を番付玉へとねがふにさらば後の代ごのしろかたり神かみももなりなんと一体老人いったいらじん御圖ごずとぞ記しし玉ふ其時